

## ルイ祖語の再構にむけて\*

藤原 敬介

### 0 はじめに

本稿ではチベット・ビルマ語派ルイ語群に属するチャック語、カドゥー語、ガナン語を中心に、これらの言語に共通するルイ祖語 (Proto-Luish: 以下 PL と略す) を再構することを目的とする。

本稿の構成は以下のとおりである。1 ではルイ語群について概況をのべ、先行研究についてふれる。2 ではルイ祖語再構の手順についてふれる。3 ではルイ祖語の頭子音をあつかう。4 ではルイ祖語の母音をあつかう。5 ではルイ祖語の接頭辞をあつかう。6 ではルイ祖語の声調をあつかう。7 ではルイ祖語とチャック語、ルイ祖語とカドゥー語およびガナン語との音対応についてまとめる。8 では本稿であつかった音対応を一覧表にする。9 で本稿全体をまとめ、今後の課題についてふれる。附録としてルイ語群の分布をしめした地図をつけた。

### 1 ルイ語群について

#### 1.1 ルイ語群とは

チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) ルイ語群 (Luish) とは、チベット・ビルマ語派に属する言語のうち、チャック語 (Cak/Sak: バングラデシュ・チッタゴン丘陵)、カドゥー語 (Kadu: ビルマ・ザガイン管区)、ガナン語 (Ganan: ビルマ・ザガイン管区)、アンドロ語 (Andro: インド・マニプール州)、センマイ語 (Sengmai: インド・マニプール州) をふくむ言語群を一般的にはさす。

ルイ語群についてのはじめての報告は、管見のかぎりでは、チャック語について 74 語の基礎語彙をあげた Hodgson [1853] を嚆矢とする<sup>注1</sup>。その後、Houghton [1893]

---

\* 主要語句: ルイ語群、チャック語、カドゥー語、ガナン語、チベット・ビルマ祖語、比較言語学。

<sup>注1</sup> Hodgson [1853: 17] は Buchanan [1799: 229] に ‘Thoek’ として紹介されている民族が、サク人 (Sak) にちがいないとする。しかし、西田 [1964: 15] も指摘するように、「この言語も上掲 Buchanan の論文ですでに紹介され、Thoek 語と称されていたが」どのような言語であるかは「実際にはよくわかっていなかった」。なお Buchanan [1799: 229] によると、‘Thoek’ という民族はバングラ人からは ‘Chatn’ や ‘Chatnmas’ とよばれていた。‘Chatn’ とはチャック人 (Cak) のことであり、‘Chatnmas’ とはチャクマ人 (Chakma) の

が、上ビルマのカドゥー語について報告し、Hodgson の資料にもとづいて、その言語の語彙がサク語 (Sak) と非常によくにていることを指摘した。G. Brown [1920] もまたカドゥー語について研究し、カドゥー人の自称が Asak であると指摘し、Houghton の説を支持した。

一方で Grierson [1904: 43] は、Damant [1880] によってルイ語 (Looe)<sup>注2</sup>に属するとされていたアンドロ語、センマイ語、チャイレル語<sup>注3</sup>をクキ語支 (Kukish) から独立させ、メイテイ語 (Meithei) の下位言語としてルイ諸語 (Lüi languages) に分類していた<sup>注4</sup>。そして、G. Brown [1920] をうけて、Grierson [1921] では、カドゥー語の語彙をルイ諸語の語彙と対照させ、その類似性を論じている。その後 Grierson [1927: 77] ではルイ諸語のみだしが「サク (ルイ) 諸語」(Sak (Lüi) Languages) となり、カドゥー語とガナン語が同列にあげられている<sup>注5 注6</sup>。このように、Hodgson

---

ことであると推定される。当時からチャック人とチャクマ人が同一視されていたことがうかがえる。なお、-tn という表記は、ビルマ語の緊喉調をあらわすためにもちいられる表記を転用しているものと推定される。

<sup>注2</sup> そもそも「ルイ」という名称は McCulloch [1859] でしめされたアンドロ語、センマイ語、チャイレル語 (Chairel) などの言語に対する総称である。さまざまな研究でアンドロ語、センマイ語、チャイレル語の資料としてしめされるものは、実質的にはすべて McCulloch [1859] にしめされた資料からのまごびきである。なお McCulloch [1859] では、「ルイ」が Loee と表記されている。

<sup>注3</sup> チャイレル語の資料としては McCulloch [1859] しかなく、Benedict [1972: 7] によるとすでに死語であるという。

<sup>注4</sup> インド・マニプूर州に居住するルイ系諸民族 (Lois) の民族誌として L. B. Devi [2002] がある。ここでいうルイ系諸民族とは、主としてアンドロ人、クルクル人 (Khurkhul)、パイエン人 (Phayeng)、センマイ人 (Sekmai) (この民族は Benedict [1972] では Sengmai とよばれており、その名称のほうが一般的であるとおもわれる。そこで、L. B. Devi では Sekmai と表記されているけれども、カナ表記としては「センマイ」と表記する) の諸民族である。これらの民族の言語は、民族名とおなじ名称でよばれる。そして、Grierson [1904] 以来、ルイ諸語 (Lüi) に属するとされる。藪 [1993] などによれば、ルイ諸語と類似した特徴をもつ言語群であるルイ語群 (Luish) にはチャック語もふくまれる。しかし L. B. Devi [2002] の記述をみるかぎり、ルイ系諸民族は現在ではメイテイ語の方言をはなしているようである。Robbins Burling 教授によると、1999 年にアンドロ人とセンマイ人を訪問したところ、メイテイ語をはなしていたという [van Driem 2001: 570; Burling 2003: 178]。なお、アンドロ人のメイテイ語については L. M. Devi [2002]、センマイ人のメイテイ語については Singh [1988] および Ch. Ch. Devi [1993] を参照。

<sup>注5</sup> Grierson [1927: 77] によるとガナン人の自称は 'A-Sak' である ("Ganan is merely a variant of Kadu, and its speakers as well as those of Kadu call themselves 'A-Sak.'")。しかしながら、筆者の観察の範囲では、ガナン人の自称は /kənáːn/ である。/?əsàː/? とはいわない。/?əsàː/? を自称とするのはカドゥー人である。

<sup>注6</sup> おなじみだしのもとにダイネ語 (Daingnet) もあげられている。この言語はバングラ

がチャック語の資料をはじめて公表し、Houghton と G. Brown がカドゥー語とチャック語の類似性を指摘し、Grierson がそれらをさらにルイ諸語にまとめて分類した。

Shafer [1955: 104, 1966: 5] はチベット・ビルマ語派ビルマ語支 (Burmic) ルイ語群としてアンドロ語、センマイ語、サック語、カドゥー語を分類した。Grierson [1904] とくらべると、チャイレル語がはずれ<sup>注7</sup>、サック語がくわわっているところに特徴がある<sup>注8</sup>。

Benedict [1972: 5] はカドゥー語、アンドロ語、センマイ語をルイ語群とする一方で、これらの言語がタマン語 (Taman)<sup>注9</sup>とともにカチン語 (Kachin) にきわめてちがいない関係にあると示唆している。しかしチャック語 (サック語) の名称はみえない。

藪 [1993] は Grierson [1904]、Shafer [1966]、Benedict [1972] の見解を整理し、ルイ語群をさらに次の四種の下位方言に分類した: (1) カドゥー語、ガナン語、サック語、チャック語、(2) アンドロ語、センマイ語、(3) タマン語、(4) チャイレル語。そして「この言語群に属する言語は、カチン語、チン語群のいくつかの言語、メイテイ語、ボド・ナガ語群のいくつかの言語、それにビルマ語群と、さまざまな言語とつながっている。そもそも、カチン語やメイテイ語が、チベット・ビルマ諸語全体の中で、まさにそういう位置を占めているのであるが、この「ルイ語群」は、もう1つ下位の段階における繋聯言語 (link language) と考えることができる」とのべている。

Matisoff (ed.) [1996] はチャック語 (サック語) をアンドロ語、センマイ語、カドゥー語、チャクパ語 (Chakpa)、パイエン語とともにチベット・ビルマ語派ジンポー・ヌン語支 (Jinpho-Nungish) ルイ語群の言語と分類している。

Bradley [1997: 20] はルイ語群の上位語群として東北インド (North-East India) という分類を提案している。この分類には Burling [1983] が提唱したサル語群 (Sal) にちなんでサル語群という名称もあたえられている<sup>注10</sup>。サルの名称はこの語群に共通

---

語によって転訛した (corrupted) 言語であると説明されている。なお、チャック語で *dáinjái?* (ダイネ) といえば、それはチャクマ人の氏族ともいわれるトンチュンガ人 (Tangchanghya) のことをさす。

<sup>注7</sup> Grierson [1927: 77] もチャイレル語をルイ諸語に帰属させてよいかどうかには疑問をもっている。

<sup>注8</sup> ただし Shafer [1966: 5, fn. 4] によると、ルイ語群のなかでもサック語はほかの言語とはことなる特徴を有しており、クキ系の特徴がつよいという。

<sup>注9</sup> このタマン語<sup>1</sup> は、ネパールではなされるタマン語<sup>2</sup> (Tamang) とはまったく別の言語である。

<sup>注10</sup> ただし Burling [1983] がいうサル語群は、ガロ語 (Garo) に代表されるボド系諸言語、ナガ諸語のうちからコニャク語 (Konyak)、ノクテ語 (Nocte) およびタンサ語 (Tangsa)、そしてジンポー語の資料による分類である。Bradley [1997] はそこからサルという名称をひきつぐとともに、本文でこのあとのべるように、対象言語をふやしている。

してみられる \*sal 「太陽」という語源に由来する。Bradley [1997] によるサル語群にはボド・ガロ諸語 (Bodo-Garo)、ナガ諸語、クキ・チン諸語 (Kuki-Chin)、カチン語、ピュー語 (Pyu) などが属するとされている。Bradley [1997: 21] はルイ語群に属する言語として次の四種類をあげている: (1) カドゥー語、ガナン語、(2) タマン語<sup>1</sup>、マリリン語 (Malin)、(3) チャクパ語、パイエン語、センマイ語、(4) サック語。

Burling [2003: 175–178] はかつてみずからサル語群とした分類を、ボド・コニャク・ジンポー諸語 (Bodo-Konyak-Jinghpaw) とあらためている。そしてこの言語群をさらに次の三つに下位分類する: (1) ボド・コチ諸語 (Bodo-Koch)、(2) コニャク諸語 (Konyak Group)、(3) ルイ語群とジンポー語からなる言語群。ルイ語群にはサック語、カドゥー語、アンドロ語、センマイ語があげられている。

以上みたように、ルイ語群の帰属をめぐるは、どの言語をくわえるか、どの語群と関係がふかいかという点について、論者によりこまかいちがいがある。ただし、おおむね共通する見解としては、最初にのべたように、チャック語 (サック語)、カドゥー語、ガナン語、アンドロ語、センマイ語をルイ語群の言語とかがえてよい。

以上のべてきたところをまとめると表 1 のようになる。

表 1 ルイ諸語の系統と所属言語

著者	一次分類	二次分類	三次分類	所属言語
Grierson [1904]	Kuki-Chin	Meithei	Lūi	A, Se, C
Grierson [1927]	TB	Assam -Burmese	Sak (Lūi)	A, Se, C, K, G Sak Daingnet
Shafer [1955, 1966]	TB	Burmic	Luish	A, Se, K Sak
Benedict [1972]	TB	Kachin	Luish Taman	A, Se, K
藪 [1993]	TB	Luish		1 K, G, Sak, Cak 2 A, Se 3 Taman 4 C
Matisoff (ed.) [1996]	TB	JN	Luish	A, Se, K Chakpa, Phayeng Cak/Sak

ルイ祖語の再構にむけて

著者	一次分類	二次分類	三次分類	所属言語
Burling [1983]	TB	Sal	Lui	
Bradley [1997]	TB (NE-India)	Sal	Luish	1 K, G 2 Taman, †Malin 3 †Chakpa, †Phayeng, †Se 4 Sak
Burling [2003]	TB	BKJ	Luish Jingphaw	A, Se, K, Sak

表中の略号

A	Andro	Se	Sengmai/Sekmai	C	Chairel
K	Kadu	G	Ganan	NE-India	North-East India
TB	Tibeto-Burman	JN	Jingpho-Nungish	BKJ	Bodo-Konyak-Jingphaw

## 1.2 先行研究

ルイ語群についての比較言語学的研究としては、カドゥー語の親族名称をシャン語やほかのチベット・ビルマ諸語も視野にいれて比較した Benedict [1941 (2008) : 157-161] を最初期のものとしてあげることができる。

他方、ルイ語群そのものについての本格的な研究は、Löffler [1964] のみである。Löffler [1964] は、チャクマ人 (Chakma: バングラデシュ・チッタゴン丘陵、インド・アールリア語派) とチャック人が本来はおなじ民族であったという説についてのべるなかで、当時しられていた二次資料および Löffler 自身が収集した資料をもちいて、サック祖語 (Proto-Sakisch: 以下 PS と略す) の再構をこころみている<sup>注11</sup>。Löffler は PS を再構するにあたり、ジンポー語 (Jingpho: ビルマ・カチン州) やガロ語 (Garo: インド・メガラヤ州)、クミ語 (Khumi: バングラデシュ・チッタゴン丘陵)、ムル語 (Mru: バングラデシュ・チッタゴン丘陵) など、ルイ語群以外のチベット・ビルマ諸語もとりあげ、105 語について検討をくわえている。そして、ルイ語群に属する語例は一例しかなくとも、ほかのチベット・ビルマ諸語と同源形式の語があれば、サック祖語再構のてがかりとしている。

これに対して本稿では、2「ルイ祖語再構の方法」でのべるように、原則としてはチャック語、カドゥー語、ガナン語という三言語に共通してみられる語彙を中心にルイ祖語を再構している。つまり、ルイ語群のどれか一言語の語例について同源形式が

<sup>注11</sup> Löffler がいうところのサック祖語は、再構の方法が本稿とはことなるけれども、本稿でいうところのルイ祖語とほぼおなじものをさすとみてよい。

みつかっただけでは、ほかのチベット・ビルマ諸語に同源形式が見つかったとしても、ルイ祖語とは認定していない。また、調査対象の語彙を Löffler よりもふやしている。その結果、Löffler が再構した PS よりも多数の PL 形式をあげることができている。

Löffler のほかには Shafer [1974: 392–399] にルイ語群の比較をみつかった部分がある。そこでは 100 語程度が比較されているけれども、個々の単語に対して祖形を再構するのではなく、声母と韻母ごとに語彙を対照している。

Matisoff [2012] はチベット・ビルマ語派におけるジンポー語の位置づけを再考している。そして、Sangdong [2012] によるカドゥー語、藤原 [2008] によるチャック語をおもな資料として、ジンポー語とルイ語群の比較もおこなっている。さらに Matisoff [2012: 22–41] において PTB の韻母を基準に 327 組の同源形式をあげている。ただし、PL の再構はおこなわれていない。また、かならずしも同源形式とはいえないものもふくまれている。

## 2 ルイ祖語再構の方法

### 2.1 対象言語

ルイ語群に属する言語のうち、現在も話者がいるのはチャック語、カドゥー語、ガナン語のみである。本稿でも、この三言語を中心にルイ祖語の再構をこころみる<sup>注12</sup>。ただし、アンドロ語やセンマイ語の語形が記録されているばあいには参照する。Löffler [1964] によるサック祖語 (PS) も可能なかぎりあげておく。ジンポー語やビルマ語、チベット・ビルマ祖語の形式も参照することがある。

以下に言語と出典および略号をしるす。

- Cak (C) : 筆者による一次資料。

<sup>注12</sup> この三言語については音素をあげておく。各言語の音韻論について詳細は藤原 [2008, 2012, 2013] を参照。ただしチャック語の表記については、藤原 [2008] に二点の変更をくわえた: (i) 母音はじまりの音節では、音節初頭に声門閉鎖音をかきくわえ、(ii) 有気音は右肩に <sup>h</sup> をつけてあらわすことにした。

Cak /p, p<sup>h</sup>, b, b̃, t, t<sup>h</sup>, d, d̃, c, c<sup>h</sup>, j, k, k<sup>h</sup>, g, ʔ, m, n, ŋ, s, ʃ, h, l, r, y, v, w, a, i, i, u, u, e, o, ə/

Kadu /p, p<sup>h</sup>, t, t<sup>h</sup>, c, c<sup>h</sup>, k, k<sup>h</sup>, ʔ, m, n, ñ, ŋ, s, s<sup>h</sup>, ɕ, h, l, y, w, a, i, u, e, ε, o, ɔ, ə/

Ganan /p, p<sup>h</sup>, t, t<sup>h</sup>, c, c<sup>h</sup>, k, k<sup>h</sup>, ʔ, m, m̃, n, ŋ, ñ, ñ̃, ŋ, ŋ, s, s<sup>h</sup>, h, l, y, w, a, i, u, e, ε, o, ɔ, ə/

声調素は以下のとおりである。

Cak: H ( <sup>˙</sup> : 鋭アクセント ) vs. L ( 無標 )

Kadu: H ( <sup>˙</sup> : 鋭アクセント ) vs. M ( 無標 ) vs. L ( <sup>˘</sup> : 重アクセント ) vs. F ( <sup>ˆ</sup> : 曲アクセント )

Ganan: H ( <sup>˙</sup> : 鋭アクセント ) vs. M ( 無標 ) vs. L ( <sup>˘</sup> : 重アクセント )

- Kadu (K) : 筆者による一次資料。
- Ganan (G) : 筆者による一次資料。
- Andro (A) : McCulloch [1859] による。声調は記録されていない。表記を次のように変更する: u → ʌ, ee → ī, oo → u。さらに、語頭の大文字は小文字で表記する。また、数詞や動詞の語例については、付加語と推定される部分を除外して引用する。たとえば数詞には類別詞と推定される ha という要素が共通してみられるので、ha 以外の部分を数詞そのものとみなして引用する。
- Sengmai (Se) : McCulloch [1859] による。声調は記録されていない。A と語形がおなじばあいは A/Se として表記する<sup>注13</sup>。そのほか、A とおなじ原則で表記を変更し、引用する。
- Jingpho (J) : 徐他編 [1983] にみられる音声表記にしたがう。
- Jili<sup>注14</sup> : N. Brown [1837: 1033] による。
- Marma (M) : 筆者による一次資料。
- Usoi Tripura: 筆者による一次資料。
- Shan: Moeng [1995] による (ただし SEALang Library Shan Dictionary<sup>注15</sup>でラテン文字転写された形式からの引用)。
- SpB (Spoken Burmese) : 大野 [2001] を基本とする。
- WrB (Written Burmese) : 大野 [2001] を基本とする。ただし表記は澤田 [2001] による。これは綴字転写である。{ 括弧 } でくくる。
- OB (Old Burmese) : Nishi [1999] による。これも綴字転写である。{ 括弧 } でくくる。
- PCC (Proto-Central-Chin) : Van Bik [2009] (STEDT Database) による。
- PKC (Proto-Kuki-Chin) : Van Bik [2009] (STEDT Database) による。
- PL (Proto-Luish) : 筆者による。

<sup>注13</sup> McCulloch [1859] の附録にある語彙集では ‘Undro and Sengmai’ としてまとめられている。そして掲載されている語例から判断するかぎりでは、Sengmai の欄にあがっているものは Undro と語形がことなるものだけである。すなわち、Sengmai の欄に何もあがっていないばあいには、Undro と語形がおなじと推定される。なお Shafer [1974: 392] は “Where the Sengmai space is blank, the Sengmai form was the same as Andro, according to McCulloch” とのべる。ただし、McCulloch [1859] のなかに明示的な記述を筆者はみつけられなかった。

<sup>注14</sup> N. Brown [1837: 1027] によれば、この言語をはなす民族はもともとは北ビルマに居住していた。しかし当時すでにシンポー人 (ジンポー人) によって本来の居住地をおいだされ、消滅しかかっているという。言語としては、ジンポー語の変種ではないかとされる。ただし、筆者の観察では、ルイ語群の言語とより類似した語彙が散見される。

<sup>注15</sup> <http://www.sealang.net/shan/dictionary.htm> (最終閲覧 2012 年 11 月 10 日)

- PLB (Proto-Lolo-Burmese) : STEDT Database による。
- PS (Proto-Sakisch) : Löffler [1964] による。
- PST (Proto-Sino-Tibetan) : STEDT Database による。
- PTani (Proto-Tani) : Sun [1993] (STEDT Database) による。
- PTB (Proto-Tibeto-Burman) : STEDT Database による。
- PTK (Proto-Tangkhalic) : Mortensen [2012] (STEDT Database) による。

## 2.2 対象語彙

本稿で調査対象とした語彙は、Löffler [1964] において PS 再構のためにとりあげられている 105 語と Matisoff [1978] にしめされた基礎語彙 200 語、そして McCulloch [1859] にあがるアンドロ語およびセンマイ語の基礎語彙 423 項目を中心とする。このほかにも対応する形式が見つかったばあいには、適宜追加している<sup>注16</sup>。

## 2.3 再構の基準

先行研究をふまえ、筆者のかんがえも反映してルイ語群の諸言語を系統樹でしめせば、図 1 のようになる。最下段の言語名は、実際の地理的分布に準じて配列した<sup>注17</sup>。

図 1: ルイ語群とジンポー語の系統

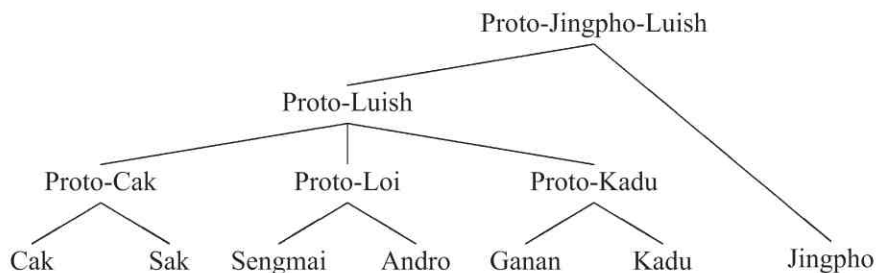


図 1 にしめしたように、PL を再構するにあたり、本稿ではジンポー語を基準にはとりいれない。本稿では原則として以下の基準をもちいる。

<sup>注16</sup> 初稿 (2012-10-24) 提出後、Matisoff [2012] が発表された。そこで二稿において Matisoff [2012: 22-41] にあがる 327 組の同源形式も調査対象にくわえた。

<sup>注17</sup> Cak と Sak はほぼ同一の言語とみてよい。本稿では自称が [ʔátsaʔ] であるものを Cak (ほぼバングラデシュ側)、自称が [ʔəsaʔ] であるものを Sak (ほぼビルマ側) とした。Sak (ビルマ・ラカイン州) についても筆者は予備的な調査をしている。ただし、資料が未整理であるので、本稿では Sak の形式は参照しない。両者の祖語として Proto-Cak としたのは、Cak という形式のほうが、よりふるいとかんがえられるからである。Andro と Sengmai に共通する祖語は Proto-Loi とした。これらの民族がメイテイ語では Loi とよばれているからである。Kadu と Ganan に共通する祖語は Proto-Kadu とした。Kadu が代表的な民族で、そのしたに Ganan などの民族があるとかんがえられているからである。

- ビルマ語やシャン語からの借用語であることがあきらかである形式は、PL とみとめない。
- C と K/G/A/Se のうちひとつ以上とで対応する形式は PL とみとめる。
- K/G のうちひとつ以上と、A/Se のうちひとつ以上とで対応する形式は、C と対応していなくとも、PL としてみとめる。
- 上記の条件にあわないものは、PL としてみとめない。

以上の基準をまとめると、表 2 のようになる。+ は PL としてみとめることを、- はみとめないことをあらわす。ひとつでも + があれば、たとえ - となる部分があっても、PL を再構できる。たとえば Kadu の行をみると、Cak/Andro/Sengmai の列について + である。これは、K と C/A/Se のいずれか一言語とで共通する形式があれば、PL を再構できることをしめす。他方、Kadu の行に対応する Ganan の列は - である。これは、K と G とで共通する形式があっても、それだけでは PL を再構できないことをしめす。なお、Kadu の行と Kadu の列との交点は意味をなさないので \ としている。

表 2 ルイ祖語再構の基準

	Cak	Kadu	Ganan	Andro	Sengmai
Cak	\	+	+	+	+
Kadu	+	\	-	+	+
Ganan	+	-	\	+	+
Andro	+	+	+	\	-
Sengmai	+	+	+	-	\

#### 2.4 表記上の注意

- 通時的には接頭辞があったと推定されるけれども、音価を特定できないばあいにはたんに C-であらわす<sup>注18</sup>。たとえば (84) ‘chilly’ PL \*C<sup>H</sup>-cap。
- 再構形の一部に複数の可能性があるばあい、(A/B) あるいは A/B と表記をすることがある。たとえば (60) ‘bow’ PL \*t<sup>H</sup>-li(t/k)?、あるいは (115) ‘bridge’ PL \*t/r-ká?。
- 同源形式と推定されるけれども、声調などが通則にあわないことがある。そのようなばあい、再構形式に?をつける。たとえば (274) ‘father’ PL \*a-wá?。
- 同源形式と推定されるけれども、母音が通則にあわないことがある。そのようなばあい、母音の部分は V でしめす。たとえば (191) ‘younger brother’ PL \*n<sup>V</sup>si。

<sup>注18</sup> 接頭辞は基本的には子音であるから C-と表記している。

- 高声調をもつ接頭辞は右肩に <sup>H</sup> をつけてしめす。たとえば (156) ‘nose’ PL \*s<sup>H</sup>-na。
- 同源形式ではないけれども意味的に対応する形式は (括弧) にいれてしめしたばあいがある。たとえば (7) ‘horse’ で C (məráj) となっているものが該当する。
- 語例のなかで注として補足説明をいれていることがある。ただし同一例であっても、どの部分に注目するかによって、注をいれることもあれば、いれないこともある。たとえば、(87) ‘milk’ は頭子音の箇所では注をいれているけれども、母音の箇所では注そのものをあげていない。また、注の内容がことなることもある。たとえば (16) ‘left (hand)’ は頭子音 p- の箇所と t- の箇所とで注の内容がことなる。

## 2.5 記号・略号一覧

上掲の言語名および出典以外の記号・略号は次のとおりである。

- \*A: A が推定形式であることをあらわす。
- A ≈ B: A と B は語源的異形態。
- A < B: A は B に由来する。
- DPTB: LaPolla [1987]。
- GSTC: Matisoff [1985]。
- HPTB: Matisoff [2003]。
- PBG: ボロ・ガロ祖語 (Proto-Boro-Garo)。
- STEDT: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus<sup>注19</sup>。

## 3 頭子音

### 3.1 閉鎖音

#### 3.1.1 PL \*p-

C/K/G において共通して p- があらわれる形式には、PL として \*p- を再構する。(1) ~ (13) のような例が確認されている。

<sup>注19</sup> <http://stedt.berkeley.edu/~stedt/cgi/rootcanal.pl> (最終閲覧 2012 年 12 月 20 日)。このデータベースでは、筆者が確認できた範囲では、2012 年 11 月 22 日ごろまでは 4.3 Luish という分類があった。しかし 2012 年 11 月 23 日ごろから 4.3 Asakian という名称に変更された。今後は「ルイ語群」という名称ではなく、「サック語群」などとよぶほうが一般的になるかもしれない。

- (1) ‘level’ PL \*pá; C pá-goʔ, K ləpá ‘paddy field’, G lətpá ‘paddy field’; J pa<sup>33</sup>; PTB —
- (2) ‘four’ PL \*prí; C prí, K (ei), pí [Sangdong 2012: 511], G pí; A/Se pī; J mə<sup>31</sup>li<sup>33</sup>; PTB \*b-ləy (STEDT #2409)  
注 PTB \*bl-は C pr-で対応するようだ。
- (3) ‘put’ PL \*péy; C pí, K pé, G pé; A/Se pe ‘put down’; PTB \*s-bəy-n/k GIVE (STEDT #2158)
- (4) ‘emerge’ PL \*pru; C pru, K pu, G pu; A/Se tu a-bu ‘dumb’; J pru<sup>33</sup>; PTB —  
注 A/Se は tu ‘language’ + a- ‘negative.prefix-’ + bu ‘emerge’ と分析できるものとおもわれる。PTB \*s-pro-k COME OUT/EMERGE/BRING OUT (STEDT #2573) もおそらく関係している。
- (5) ‘vagina’ PL \*pak; C ʔápaʔ, K paʔ, G paʔ; PTB —  
注 PTB \*b(y)at (STEDT #662) は韻母があわない。Usoi Tripura fipauʔ も同源とおもわれる。
- (6) ‘mosquito’ PL \*p-cík; C pəciʔ, K pəsiʔsáuʔ, G pəsiʔ; A/Se pu; J tʃiʔ<sup>31</sup>kʒoŋ<sup>31</sup>, tʃiʔ<sup>31</sup>nu<sup>31</sup> ‘fly (n)’, mə<sup>55</sup>tʃi<sup>51</sup> ‘fly (n)’; PS \*puʔ-chitʔ; PTB —
- (7) ‘horse’ PL \*s<sup>H</sup>-pu-k; C (məráŋ), K s<sup>h</sup>əpù, G s<sup>h</sup>əpùʔ; A/Se shuruk; PS \*sapu; PTB —  
注 C は M mráŋ からの借用。アラカンの Sak については Hodgson [1853: 5] に sapú という形式が記録されている。そこで PL \*s-pu を再構する。Maring sapuk (STEDT Database)。
- (8) ‘hatch’<sup>注20</sup> PL \*puk; C puʔ, K pouʔ, G pauʔ; PTB \*puk ≈ \*buk (STEDT #3488)
- (9) ‘belly’ PL \*píkʔ < \*pyúkʔ; C ʔapíʔ, K púʔ, G púʔ; A/Se puk; J pu<sup>31</sup> ‘intestine’; WrB {bVkʔ}; PS \*pük; PTB \*s-bu-k (STEDT #258)
- (10) ‘palm’ PL \*tak-prár; C taʔpráŋ, K taʔpá, G taʔpá; J lá<sup>31</sup>phan<sup>31</sup>; PKC \*ɓaar (STEDT #4027: provisional)  
注 PL \*tak-は (44) ‘finger’, (45) ‘nail’ と共通する。
- (11) ‘bloom’ PL \*pár; C páŋ, K pá, G pá; PTB \*ba-r (STEDT #2153)

<sup>注20</sup> この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

(12) ‘flower’ PL \*pár; C ῥαράιη, K pəpá, G pəpá; A/Se paba; J nam<sup>31</sup>pan<sup>33</sup>; WrB {pan’}; PTB \*ba-r (STEDT #2153)

(13) ‘fly (v)’ PL \*pír; C páiη, K pí, G pí; J pjen<sup>33</sup>; PTB \*pur ≈ \*pir (STEDT #2580)

C/K/A で共通するものとして (14) がある。

(14) ‘smooth’ PL \*pri-t; C pri, K pi, G pit; A pī; J p̄i<sup>33</sup>; PTB —

K/G/A/Se で共通するものとして (15) がある。

(15) ‘calf (of leg)’ PL \*t-pók; C (ῥάταςολύησα), K təpáu?, G təpáu?honnos<sup>h</sup>i; A/Se tanpok; PTB —

K/A/Se で共通するものとして (16) がある。

(16) ‘left (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-pay < \*t<sup>h</sup>-pway?; C (belá?), K təpè, G (pɛ); A téwe, Se tewew; J pai<sup>33</sup>; M (be), WrB ({bhay’}); PTB \*bay ~ \*bway (STEDT #2154)

注 C はマルマ語からの借用語に ‘hand’ lá? が付加した形式。G はビルマ語からの借用語。K はビルマ語からの借用に接頭辞 PL \*t<sup>h</sup>-が付加した可能性がある。

### 3.1.2 PL \*b-

C b-に対して K/G が p-が対応するばあい、PL \*b-を再構する。ただし適当な例は (17) ~ (19) にしめす三例しか確認されていない<sup>注21</sup>。

(17) ‘ashes’ PL \*k-but; C ta?kəbu?, K kəpət, G kəpət; PTB —

注 \*hot (STEDT #3514: provisional) は声母も韻母もあわない。

(18) ‘ringworm’ PL \*k<sup>h</sup>-bun; C kəbuŋ, K kəpòn, G kəpùn; PTB —

(19) ‘cheek’<sup>注22</sup> PL \*n/l-bay; C ῥανəbáy, K ləpàη, G nəpàη; A/Se namɓɓɓɓ; PTB \*bay ≈ \*boŋ (STEDT #263: provisional)

注 C と K/G で声調があわないほかは、よく対応している。PL では声調を指定できない。

<sup>注21</sup> いずれの例も接頭辞のあとで C b-となっている。とくに接頭辞 k-のうしろでは、C p-となる例が確認されていない。したがって、PL \*p-にまとめてもよいかもしれない。

<sup>注22</sup> この例は Matisoff [2012: 31] の指摘による。

### 3.1.3 PL \*ph-

C/K/G において共通して p<sup>h</sup>-があらわれる形式には、PL として \*ph-を再構する。  
(20) ~ (26) にしめす七例が確認されている。

- (20) ‘thin’ PL \*pha; C p<sup>h</sup>a, K p<sup>h</sup>a, G p<sup>h</sup>a; Se pha; J pha<sup>31</sup>; PTB \*ba (STEDT #2143)
- (21) ‘shoulder (v)’ PL \*phé; C p<sup>h</sup>é, K p<sup>h</sup>é, G p<sup>h</sup>é; J phai<sup>33</sup>, phye<sup>55</sup>; PKC \*paay ≈ \*pooy (STEDT #4135: provisional)
- (22) ‘jump’<sup>注23</sup> PL \*phró-k; C p<sup>h</sup>ró, K p<sup>h</sup>áu?, G p<sup>h</sup>áu?; A/Se phok; PTB \*p(r)ok (STEDT #6707: provisional)
- (23) ‘lizard’ PL \*k-phóy; C kəp<sup>h</sup>ú, K kəp<sup>h</sup>é, G kəp<sup>h</sup>é; PTB —  
注 (28) ‘snake’ と語家族をなすとおもわれる。
- (24) ‘full’ PL \*phríŋ; C p<sup>h</sup>ríŋ, K p<sup>h</sup>éiŋ, G p<sup>h</sup>éiŋ; J phǵiŋ<sup>55</sup>; PTB \*p/bliŋ (STEDT #111)  
注 C p<sup>h</sup>r-なので、PTB pl-に対応するとおもわれる。
- (25) ‘wear’<sup>注24</sup> PL \*phun; C p<sup>h</sup>uŋ, K p<sup>h</sup>un, G p<sup>h</sup>un; J phun<sup>55</sup>; PTB \*pun (STEDT #2579)
- (26) ‘tree/firewood’ PL \*phón < \*phól; C p<sup>h</sup>úŋ, K p<sup>h</sup>ón, G p<sup>h</sup>ón; A/Se phol; J phun<sup>55</sup>; PTB \*bul ≈ \*pul (STEDT #2176: provisional)

C で p<sup>h</sup>vu は確認されず、hvu で対応する。(27) ~ (28) のような例が確認されている。

- (27) ‘open (umbrella)’ PL \*phúw; C ʔəhvú, K p<sup>h</sup>ú, G p<sup>h</sup>ú; PTB —  
注 PTB \*ʔ-bu ≈ \*pu BORN/BIRTH/BUD/BLOOM (STEDT #1811) と関係している可能性がある。K/G には ‘wear’ という意味もあり、J pu<sup>31</sup> や PTB \*bu(w) (STEDT #2180) に対応する。
- (28) ‘snake’ PL \*k-phúw; C kəhvú, K kəp<sup>h</sup>ú, G kəp<sup>h</sup>ú; A/Se kuphu; J lä<sup>33</sup>pu<sup>33</sup>; PS \*kaphu; PTB \*bəw (STEDT #2178)  
注 (23) ‘lizard’ と語家族をなすとおもわれる。

C/K で共通するものとして (29) がある。

<sup>注23</sup> この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

<sup>注24</sup> この例は Matisoff [2012: 31] の指摘による。

(29) ‘kick’ PL \**phiy?*; C *kəp<sup>h</sup>e*, K *p<sup>h</sup>i*, G (*su?*); PTB —

K/G/A/Se で共通するものとして (30) がある。

(30) ‘tree’ PL \**phón* < \**phól*; C (*ʔap<sup>h</sup>áj*, *púŋp<sup>h</sup>áj*), K *p<sup>h</sup>ouŋklon*, *p<sup>h</sup>ón* ‘firewood’, G *p<sup>h</sup>óntòn*; A/Se *phol*; J *phun<sup>55</sup>*; PS \**phül*; PTB \**bul* ≈ \**pul* (STEDT #2176: provisional)

G/A で共通するものとして (31) がある。

(31) ‘door’ PL \**k<sup>h</sup>-phaŋ*; C (*ʔahá*), K —, G *kəp<sup>h</sup>áj*; A *kaphaŋ*; J (*tʃiŋ<sup>33</sup>kha<sup>33</sup>*); PTB —

### 3.1.4 PL \*t-

C/K/G において共通して t があらわれる形式には、PL として \*t- を再構する。(10) ‘palm’ PL \**tak-prár* のほか、(32) ~ (51) のような例が確認されている。

(32) ‘fish’ PL \**t<sup>h</sup>-ŋa*; C *təna*, K *tájŋà* ~ *taŋŋà*, G *tájŋà*; A/Se *tanga*; J (*ŋa<sup>55</sup>*); PS \**tangà?*; PTB \**s-ŋya* (STEDT #1455)

注 K/G において接頭辞 t に ŋ が後続する例がない。K/G で *taŋ-* となっているのは接頭辞 t に ŋ が直接後続することをさけるために主音節の母音が挿入された結果と推定される。平行例として (34) ‘bee’ K *túŋŋún* がある。Jili *tangá*。

(33) ‘turtle’ PL \**t<sup>h</sup>-lip*; C *təli?*, K *tələp*, G *tələp*; WrB {*lip*}; PTB —

(34) ‘bee’ PL \**t<sup>h</sup>-Cún*; C *təlún*, K *təmún* ~ *túŋŋún*, G *təmún*; PTB —

(35) ‘stone’ PL \**t<sup>h</sup>-luŋ*; C *təluŋ*, K *təluŋeíŋ*, G *tələuŋ*; A/Se *torong*; J *n<sup>31</sup>luŋ<sup>31</sup>*; PS \**talung*; PTB \**r-luŋ* (STEDT #1269)

(36) ‘red ant’ PL \**t<sup>h</sup>-hra* < \**t<sup>h</sup>-khra*; C *təhra*, K *təhà*, G *təhà*; M *k<sup>h</sup>ra*; PTB —

(37) ‘foot/leg’ PL \**ta*; C *ʔáta*, K *ta*, G *ta*; A *taka* ‘foot’, *ta<sup>h</sup>a* ‘leg’, Se *ta<sup>h</sup>mpha* ‘foot’, *ta<sup>h</sup>a* ‘leg’; J *lǎ<sup>31</sup>ko<sup>33</sup>*; PS \**t(l)a(k)?*; PTB \**la* (STEDT #350), \**d-ya* (STEDT #888)  
注 PTB \**l-* が C/K/G など で t- で対応する例は散見される。そのような語例は馬提索夫 [2006] に多数あがる。傾向としては、たんに \**l-* というだけでなく、\**lj-* ないし \**s-l-* という条件がある。ただしルイ語群の形式はそのような環境にはない。ルイ語群の形式はボロ・ガロ諸語やナガ諸語に散見される \**d-ya* (STEDT #888) によりちかい。

(38) ‘ankle’ PL \*ta-mík; C ?átəmí?, K tami?tú, G tami?tù; A (khujeng), Se tāmīt; PTB —

注 (37) ‘foot’ PL \*ta と (229) ‘eye’ PL \*mík からなる複合語。

(39) ‘elder sister’<sup>注25</sup> PL \*a-té; C ?até ‘uncle’, K ?əté, G ?əté; PTB —

(40) ‘leaf’ PL \*tap; C ?áta?, K təlap ~ tətəp, G təlap; A/Se tatəp; J lap<sup>31</sup>; PS \*-tap; PTB \*s-lap (STEDT #824)

注 PTB の形式は \*l → t の条件にあっているけれども [馬提索夫 2006]、PL では接頭辞として \*s- を想定する根拠がない。なお K/G にみられる -l は接中辞であるという [Sangdong 2012: 158–160]。

(41) ‘listen’ PL \*tát/tít?; C tái? ‘hear’, K tét, G tát; A/Se tat ‘hear’; J mə<sup>31</sup>tat<sup>31</sup>; PTB \*s-ta-s ≍ \*ta-n (STEDT #1408)

(42) ‘weave’ PL \*tak; C ta?, K ta?, G ta?; J ta?<sup>31</sup>; PTB \*tak = \*trak (STEDT #2686)

(43) ‘lick’ PL \*á-tak; C ?áta?, K tà? ~ ?ətà?, G tà?; J mə<sup>31</sup>tə?<sup>55</sup>; PTB m-lyak ≍ \*s-lyak ≍ \*g-lyak (STEDT #629)

(44) ‘finger’ PL \*tak-sir?; C ta?fi?, K ta?ci, G t<sup>h</sup>oklat; A (takhutol), Se (khutpang); PTB \*si ≍ \*ser ≍ \*sor (STEDT #324: provisional)

注 PL \*tak- は (10) ‘palm’, (45) ‘nail’ と共通する。(16) ‘left’ や (54) ‘hand’、(59) ‘right’ にみられる tə- は PL \*tak が弱化した形式と推定される。C -i? に K -i が対応することから、PTB も考慮すると PL では語末に -ir があつた可能性がある。類例には (155) ‘tongue’ もかんがえられる。

(45) ‘nail’ PL \*tak-miŋ < \*tak-min?; C ta?miŋ, K ta?miŋ, G ta?miŋ; A/Se takmeng; J lă<sup>31</sup>mjin<sup>33</sup>; PTB \*min ~ \*myen (STEDT #513: provisional)

注 PL \*tak- は (10) ‘palm’, (44) ‘finger’ と共通する。

(46) ‘pot’<sup>注26</sup> PL \*tik; C ti?, K tei?ci, G tei?s<sup>h</sup>i; J ti?<sup>31</sup>pu<sup>33</sup>; PTB —

(47) ‘knife’ PL \*k-taŋ; C kótəŋ, K taŋ, G taŋ; A/Se katang ‘dao’; PS \*katang; PTB —

<sup>注25</sup> C は「母を『姉・妹』とよぶような男性」なら誰でもよい。たとえば「母の兄弟」や「義理の父母」などがありうる。K/G は「自分が『姉』とよびうる女性」なら誰でもよい。たとえば「姉」のほかに「夫の妻」などがありうる。C と K/G とでは意味がかなりことなるけれども、語形がよく対応するので同源形式としてあげておく。

<sup>注26</sup> この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

(48) ‘lips/mouth’ PL \*s-tún; C ʔasətún, K s<sup>h</sup>ətún, G s<sup>h</sup>ətún; A/Se shun; J n<sup>31</sup>ten<sup>33</sup>; PS \*sadün?; PTB \*m/s-d(y)u-l/r/n (STEDT #442: provisional)

(49) ‘insect’ PL \*k<sup>H</sup>-tunj; C kótunj ‘leech’, K kətòunj, G kətàunj; A/Se kotong; J lă<sup>31</sup>tuj<sup>33</sup>; PTB —

(50) ‘grandchild’ PL \*s-túnj; C ʔasətúnj, K s<sup>h</sup>ətóunj, G s<sup>h</sup>utóunj ~ s<sup>h</sup>utáunj; J kă<sup>31</sup>ju<sup>31</sup> ~ ju<sup>51</sup>; PTB —

(51) ‘short’ PL \*ton; C tunj, K ton, G tøn; A/Se ton; J kă<sup>31</sup>tun<sup>31</sup>; PTB \*(y)unj ≍ \*(y)un (STEDT #7173)

(52) の例は、C と K/G で声調以外はよく対応している。

(52) ‘smell (vt)’ PL PL \*tím? < \*tyúm?; C ʔátij, K túm, G túm; PTB —

注 C と K/G で声調があわない

(53) の例は、C/A と K/G/Se で頭子音が対応しないけれども、そのほかはよく対応している。

(53) ‘sit’ PL \*túnj ~ \*thúnj; C túnj, K t<sup>h</sup>óunj, G t<sup>h</sup>áunj; A tong, Se thong; J tunj<sup>33</sup>; PTB \*tu:ŋ ≍ \*du:ŋ

注 C/A と K/G/Se で頭子音が対応しないけれども、PTB を参考に PL \*tunj ~ \*t<sup>h</sup>unj を再構する。

C/K/A で共通するものとして (54) がある。

(54) ‘hand’ PL \*t-hów < \*t-khów < \*tak-khów; C təhú, K təhú, G (t<sup>h</sup>ɔ); A takhu, Se tahu; J ta<sup>255</sup>, lă<sup>31</sup>ta<sup>255</sup>; PS \*tak?u; PTB \*k(r)ut (STEDT #712: provisional)

注 C/K tə-は (44) ‘finger’ などにみられる PL \*tak が弱化した形式とおもわれる。PL \*tak は PTB \*lak (STEDT #695: provisional) ないし PTB \*d-yak HAND/ARM/LEAF (STEDT #699: provisional) に関連するとおもわれる。PTB \*l-が C/K/G などで t-で対応する例は散見される。そのような語例は馬提索夫 [2006] に多数あがる。傾向としては、たんに\*l-というだけでなく、\*lj-ないし\*s-l-という条件がある。ただしルイ語群の形式はそのような環境にはない。

C/K/A/Se で共通するものとして (55) がある。

(55) ‘language’ PL \*tu; C tú, K tú, G (təpáuj?ká); A/Se tu a-bu ‘dumb’; PS \*tu; PKC \*thuu (STEDT #4371)

注 A/Se は tu ‘language’ + a- ‘negative.prefix-’ + bu ‘emerge’ と分析できるものとおもわれる。

C/A/Se で共通するものとして (56) ~ (57) がある。

(56) ‘knee’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C ʔátəhvú, K (tə<sup>h</sup>u), G (tuʔ<sup>h</sup>u); A tankhu, Se takhu; J lǎ<sup>31</sup>phut<sup>31</sup>; PTB \*(m)ku:(k/ŋ) (STEDT #1251: provisional)

(57) ‘nine’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C təhvú, K (kàuʔ), G (kò); A/Se tuhu; J tǎ<sup>31</sup>khu<sup>31</sup>; WrB {kV:}; PS \*taku; PTB \*d-kuw = \*d-kəw ~ \*d-gew (STEDT #2364)  
注 K/G は Shan kaw<sup>3</sup> からの借用語。

K/G/A/Se で共通するものとして (15) ‘calf (of leg)’ \*t-pók のほかに (58) ~ (62) がある。

(58) ‘thigh’ PL \*t-kíyʔ; C (ʔátəkəboʔ), K (təci), G təkí; A tanghī, Se tangé; J mā<sup>31</sup>kji<sup>33</sup>; PTB —

注 PL \*k-が母音 i に先行しているので K c-で実現している。(56) ‘knee’ を参考にすれば、A は tan.ghī、Se は tan.gé と分節されるものと推定される。

(59) ‘right (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-ha < \*t<sup>h</sup>-kha; C (púʔsəláʔ)<sup>注27</sup>, K təhà, G tək<sup>h</sup>a; A laha, Se tauwa; J khǝa<sup>55</sup>; PTB \*g-ya ~ \*g-ra (STEDT #2786)

注 PL \*t-は PL \*tak- ‘hand’ が弱化したものと推定される。頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

(60) ‘bow’ PL \*t<sup>h</sup>-li(t/k)?; C (leháʔ), K tələt ~ tələiʔ, G təliʔ; A/Se tīrīt; J (kuŋ<sup>33</sup>li<sup>33</sup>); WrB ({le:}); PTB \*(d/s-ləy (STEDT #2411))

(61) ‘strike/hit’ PL \*tán; C —, K tán, G tán; A/Se tan; J tan<sup>31</sup>; PTB \*dan CUT (STEDT #3563)

(62) ‘big/great’ PL \*túŋʔ; C —, K tóuŋ, G tóuŋ; A/Se tong; PTB —

K/G/Se で共通するものとして (63) ~ (64) がある。

(63) ‘search/seek’ PL \*tam; C —, K tam, G tam; A (thamang), Se tam; J tam<sup>33</sup>; PTB —

<sup>注27</sup> ‘cooked rice’ púʔ + ‘eat’ sa + ‘hand’ láʔ と分析できる可能性がある。

- (64) ‘pull’ PL \*tún; C —, K tún, G tún; A (kong), Se tun; J tun<sup>33</sup>; PTB \*don ~ \*ton  
(STEDT #2199: provisional)

K/A/Se で共通するものとして次の例がある。

- (16) ‘left (hand)’ PL \*t<sup>H</sup>-pay < \*t<sup>H</sup>-pway?; C (belá?), K tɔpɛ̀, G (pɛ); A téwe, Se tewé;  
J (pai<sup>33</sup>); WrB ({bhay’}); PTB \*bay ~ \*bway (STEDT #2154)

注 PL \*t-は PL \*tak- ‘hand’ が弱化したものと推定される。頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

G/A/Se で共通するものとして (65) がある。

- (65) ‘man’ PL \*C<sup>H</sup>-tik-(sa); C (lú), K (təmis<sup>h</sup>a), G tì?s<sup>h</sup>a; A tĩksahora, Se tĩkhora; PTB  
—

C ky-に対して K/G が t-が対応する例がある。(66) ~ (68) にしめす三例が確認されている。いずれの例も韻母は-i である。PL \*ti → C ti を想定できる例がないので、PL \*ti → C kyi そのものが規則的な対応とかがえられる<sup>注28</sup>。

- (66) ‘sweet’ PL \*ti; C kyi, K tí, G tí; A/Se tĩ; J tui<sup>31</sup>; PS \*tui?; PTB \*twi(y) (STEDT #2721)

- (67) ‘egg’ PL \*ti; C ?ákyi, K tɔti, G titti; J tí<sup>31</sup>; WrB {u}; PS \*tui; PTB \*(w)əy  
(STEDT #300)

注 Sak wa-tí [Hodgson 1853: 8]。

- (68) ‘penis’ PL \*tí; C ?akyí, K tí, G tí; PTB \*ti-k (STEDT #641), \*dzi (STEDT #1601)

### 3.1.5 PL \*d-

C d-に対して K/G が t-が対応するばあい、PL \*d-を再構する。ただし適当な例は (69) ~ (70) にしめす二例しか確認されていない。

<sup>注28</sup> Yu [2012: 32–33] によるとアルス祖語 (Proto-Ersuic) で \*st-と再構しうるのが、リュズ語 (Lizu) では k-で対応している。そして語例をみるかぎり、すべて \*sti-にさかのぼる。この音対応は、ルイ祖語とチャック語との対応に類似する。

なお、以下にあげるルイ語群における語例はおおよそ PTB \*t/dwi と再構される。祖語の \*dw-が k-で対応する例は、印欧祖語の \*dw-がアルメニア語において erk-で対応する例をも想起させる [Meillet 1925: 5–6]。PL \*twi と再構しうるかもしれない。

(69) ‘moon’ PL \*s-dá < \*s-lá; C sǝdá, K s<sup>h</sup>ǝtá, G s<sup>h</sup>ǝtá; A/Se satha; J jā<sup>33</sup>tā<sup>33</sup>; PS \*sada; PTB \*s-(g)la (STEDT #1016)

注 PTB で \*l があるので、有声性が保持されて C で d がでているのかもしれない。ただし、類例の (43) ‘lick’ では t がでている。先行する接頭辞の性質が影響している可能性がある。

(70) ‘neck’ PL \*k<sup>H</sup>-duk; C ʔákəduʔ, K kətòuʔ, G kətàuʔ; A/Se kotok; J tuʔ<sup>31</sup>; PTB \*tuk ≍ twak (STEDT #359)

注 PTB で \*w がありうるので、有声性が保持されて C で d がでているのかもしれない。

C d-に対して K/G/A/Se t-が対応するばあい、PL \*d-を再構する。ただし適当な例は (71) にしめす一例しか確認されていない。

(71) ‘porcupine’ PL \*p/k<sup>H</sup>-duw-k; C pədvu, K kətùsipáuj, G kətùʔ; A/Se kutuk; J tu<sup>55</sup>; PTB —

K/G t-に対して A/Se d-が対応するばあい、PL \*d-を再構する。ただし適当な例は (72) にしめす一例しか確認されていない。

(72) ‘cooked rice’ PL \*dá < \*táʔ; C (púʔ), K ʔǝtá, G ʔǝtá; A onda, Se konda; PTB —  
注 A/Se は先行する n-の影響で有声化している可能性があり、本来は PL \*t-であるかもしれない。

### 3.1.6 PL \*th-

C/K/G において共通して t<sup>h</sup>-があらわれる形式には、PL として \*th-を再構する。(73) ~ (80) のような例が確認されている。

(73) ‘thick’ PL \*r<sup>H</sup>-thay; C rǝt<sup>h</sup>e, K t<sup>h</sup>è ~ ʔǝt<sup>h</sup>è, G t<sup>h</sup>è; A/Se the; J that<sup>31</sup>; PTB \*r-tas (STEDT #178)

(74) ‘dig’ PL \*thu; C t<sup>h</sup>u, K t<sup>h</sup>u, G t<sup>h</sup>u; J thu<sup>31</sup>; PTB \*tu ≍ \*s/m-du (STEDT #3573)

(75) ‘grind’ PL \*thuw; C t<sup>h</sup>vu, K t<sup>h</sup>u, G t<sup>h</sup>u; PTB —

(76) ‘arrive’ PL \*thuk; C t<sup>h</sup>uʔ, K t<sup>h</sup>ouʔ, G t<sup>h</sup>ouʔ; A/Se thok; J tu<sup>31</sup>; PTB —

- (77) ‘spit (v)’ PL \*thók; C t<sup>h</sup>óʔ, K t<sup>h</sup>áuʔ, G t<sup>h</sup>áuʔ; J mā<sup>31</sup>tho<sup>55</sup>注29; PTB \*m-tu(:)k ɤ \*s-t/du(:)k (STEDT #601)
- (78) ‘village’ PL \*thiŋ; C t<sup>h</sup>iŋ, K t<sup>h</sup>iŋ, G t<sup>h</sup>eiŋ; A/Se theng; J thiŋ<sup>31</sup>ko<sup>33</sup> ‘household’注30; PS \*thing?; PTB —
- (79) ‘black’ PL \*thím? < \*thyúm?; C t<sup>h</sup>ɪŋ, K t<sup>h</sup>úm, G t<sup>h</sup>úm; A tum, Se thum; PS \*thüm?; PTB \*s(y)im (STEDT #2672), PKC \*dum (STEDT #4062: provisional)
- (80) ‘mortar’ PL \*thum; C t<sup>h</sup>uŋ, K t<sup>h</sup>om, G t<sup>h</sup>om; J thum<sup>31</sup>; PTB \*tsum = \*tśrum (STEDT #2742)

K/G/A/Se で共通するものとして (81) がある。

- (81) ‘near’ PL \*tham; C (cu), K t<sup>h</sup>am, G t<sup>h</sup>am; A tham, Se tham; J (ni<sup>31</sup>); PTB —

### 3.1.7 PL \*c-

C c-に対して K/G が s-が対応するばあい、閉鎖音から摩擦音への変化のほうがより自然であるから、PL \*c-を再構する注31。(6) ‘mosquito’ PL \*p-cík のほか、(82) ~ (92) のような例が確認されている。

- (82) ‘sun’ PL \*c-mík; C cəmiʔ, K səmiʔ, G səmiʔ; A/Se chamī; J tʃan<sup>33</sup>; PS \*camit; PTB \*tsyar (STEDT #2753)
- (83) ‘burn/roast’ PL \*cu; C cu, K su, G su; J tʃu<sup>31</sup>; PTK \*cow (STEDT #6828)
- (84) ‘chilly’ PL \*C<sup>h</sup>-cap; C caʔ, K sàp, G sàp; J tʃap<sup>31</sup>; WrB {cap’}; PTB —  
注 K/G が低声調であらわれているので、通時的には高声調の要素が先行していたと推定される。
- (85) ‘suck’ PL \*cúp; C cúʔ, K súp, G súp; J tʃup<sup>31</sup>; PTB \*m-dzup (STEDT #76)
- (86) ‘plant (v)’注32 PL \*cuk; C cuʔ, K souʔ, G souʔ; PTB \*dzu[:]k (STEDT #2218)

注29 この形式は査読者 A の教示による。

注30 この形式は査読者 A の教示による。

注31 PL \*ch-と再構しうる適当な対応例は確認されていない。C c<sup>h</sup>-に対して K/G s<sup>h</sup>-が対応している例としては、‘shop’ C c<sup>h</sup>aiŋ, K s<sup>h</sup>aiŋ, G s<sup>h</sup>aiŋ という対応がある。ただし C は M c<sup>h</sup>oiŋ、K/G は SpB s<sup>h</sup>ain からの借用語であることがあきらかである。したがって PL \*ch-を本稿では再構しない。

注32 この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

(87) ‘milk’ PL \*cuk-si; C cəʔú, K souʔei, G sauʔs<sup>hi</sup>; A chokchoksī; PTB \*dzyuk (HPTB)

注 C cə-は PL \*cuk が弱化したものと推定される。

(88) ‘long/tall’ PL \*cók; C cóʔ, K sáúʔ, G sóúʔ; A chok ‘high’; M cəʔ; PTB —

注 C は M からの借用語である可能性もたかい。

(89) ‘sister’ PL \*cán < \*cálʔ; C ʔacáin, K sán, G sán; A lu-chölo; J tjan<sup>33</sup>; PS \*cal; PTB \*dzar (STEDT #2215)

(90) ‘ask for’ PL \*ciŋ; C ciŋ, K seiŋ, G seiŋ; A cheng-, Se ching-; PTB —

(91) ‘-CAUSATIVE’ PL \*-cíŋ; C -cíŋ, K -síŋ, G -síŋ; PTB —

(92) ‘far’ PL \*car; C caiŋ, K sa, G sa; A lam je, Se lam ja; J tsan<sup>33</sup>; PTB \*dzyal (STEDT #1779)

注 A/Se j-なので PL \*j-とすべきかもしれない。ただし、いずれも lam ‘road’ のあとであらわれているために有声化しているだけという可能性がある。そこで PL \*c-のままとしておく。

C/K で共通するものとして (93) がある。

(93) ‘Cak/Sak’ PL \*cak; C ʔácaʔ, K ʔəsàʔ, G —; WrB ({sak’}); PS \*cak; PTB —

注 PBG \*sak ‘CL:man’ [Wood 2008: 72] が関係している可能性がある。

C/G で共通するものとして (94) がある。

(94) ‘dub/strike’ PL \*cuw; C cvu, K —, G sú; WrB {thV:}; PTB —

K/G s-に A ch-が対応するばあいも PL \*c-を再構しうる。(95) のような例がある。

(95) ‘hard/solid’ PL \*C<sup>h</sup>-cak; C —, K ʔəsàʔ, G sàʔ; A chak; J tjaʔ<sup>31</sup>; PTB \*tsak-t (STEDT #186: provisional)

(96) ~ (100) の例は、PTB まで考慮すると、PL \*g-r(-y)-と再構しうる<sup>注33</sup>。

(96) ‘light (weight)’ PL \*ca < \*r-ya; C rəca, K sənà, G sənà; Se cha; J tsaj<sup>33</sup>; PTB \*r-yaŋ (STEDT #2789)

<sup>注33</sup> つまり、ここまでにあげた語例のなかにも、さらに\*gry-にさかのぼるものがありうるということになる。

注 K/G sə は PL \*ca が接頭辞化したものである可能性がたかい。

(97) ‘stand’ PL \*cap < \*ryap; C caʔ, K sap, G sap; A/Se chap; J tsap<sup>55</sup>; PS \*cap; PTB \*g-ryap (STEDT #145)

(98) ‘eight’ PL \*cat < \*ryat; C ʔácaɪʔ, K (pət), G (pət); A/Se chat; J mā<sup>31</sup>tsat<sup>55</sup>; WrB {rhac’}, OB {yhat, rhac, rhec} [Nishi 1999: 38]<sup>注34</sup>; PS \*cat; PTB \*b-r-gyat = \*(b-)g-ryat (STEDT #2259)

注 K/G は Shan pət<sup>2</sup> からの借用語。

(99) ‘fear’ PL \*C<sup>H</sup>-cak < \*g<sup>H</sup>-rakʔ; C ʔácaʔ, K sàʔ, G kəsàʔ; A/Se achak; PTB —  
注 PTB \*k/grok ≅ \*k/grak FEAR/FRIGHTEN (STEDT #2249) が関係している可能性はある。

(100) ‘salt’ PL \*cimʔ < \*ryumʔ; C ciŋ, K sum, G sum; A/Se chum; J tʃum<sup>31</sup>; PS \*sum; PTB \*g-ryum = \*gryum (STEDT #2644)

### 3.1.8 PL \*j-

C j-に対して G s-が対応する例が、(101) にしめす一例だけ確認されている。かりに PL \*j-を再構する。

(101) ‘deer’<sup>注35</sup> PL \*k<sup>H</sup>-juk; C kəjuʔ, K —, G kəsàʔ; J khji<sup>31</sup>tut<sup>55</sup>; PTB \*d-yuk (STEDT #2794)

C c/j-に対して A/Se j-が対応する例が、(102) にしめす一例だけ確認されている。かりに PL \*j-を再構する。

(102) ‘ten’ PL \*jí, \*sí; C cí/jí/(sí), K (cip), G (s<sup>h</sup>ip); A/Se (shêt), (shī-), -jī; J (jī<sup>33</sup>); PS \*chi; PTB \*ts(y)i(y) ~ \*tsyay (STEDT #2478)

注 C の形式は異形態。K/G は Shan s<sup>h</sup>ip<sup>4</sup> からの借用語。

K/G s-に対して A/Se j-が対応する例が、(103) にしめす一例だけ確認されている。かりに PL \*j-を再構する。

<sup>注34</sup> 査読者 B によれば、異綴字をふまえて Nishi [1999: 106] では OB \*rhyat が再構されている。

<sup>注35</sup> この例は Matisoff [2012: 39] の指摘による。

- (103) ‘bird’ PL \*u-jík-sa < \*u-cík-sa?; C (ʔusi), K ʔusiʔs<sup>h</sup>à ~ ʔusiʔs<sup>h</sup>à, G ʔusiʔs<sup>h</sup>à; A/Se ujík-sa; J (u<sup>31</sup>); PS \*-cik-?; PTB \*wu (STEDT #301)

注 A/Se では語中なので j があらわれているだけであり、PL \*c- にさかのぼりうるといふ可能性は十分にある。

K/G s- に対して Se j- が対応する例が、(104) にしめす一例だけ確認されている。かりに PL \*j- を再構する。

- (104) ‘cat’ PL \*hán-ji-k < \*hál-ji-k? < \*hál-ci-k?; C (háinj), K hançi, G hánsiʔ; A (hʌnggen), Se hʌljik; PS \*hal; PTB —

注 K s- は i の前で ç- となる。Se を考慮すると PL \*hál という可能性はある。Se では語中なので j があらわれているだけであり、PL \*c- にさかのぼりうるといふ可能性は十分にある。

### 3.1.9 PL \*k-

C/K/G において共通して k があらわれる形式には、PL として \*k- を再構する。(17) ‘ashes’ PL \*k-but、(18) ‘ringworm’ PL \*k<sup>H</sup>-bun、(23) ‘lizard’ PL \*k-phóy、(49) ‘insect’ PL \*k<sup>H</sup>-tuŋ、(58) ‘thigh’ PL \*t-kíy?、(70) ‘neck’ PL \*k<sup>H</sup>-duk のほかに、(105) ~ (126) のような例が確認されている。

- (105) ‘mushroom’ PL \*k-mú; C kəmúkaiŋ, K kəmú, G kúʔmú; J k̄<sup>33</sup>mu<sup>33</sup>; PTB \*g-muw = \*g-məw (STEDT #2472)

- (106) ‘ear’ PL \*k-ná; C ʔakəná, K kəná, G kəná; A/Se kana; J na<sup>33</sup>; PS \*kana; PTB \*r/g-na (STEDT #811)

- (107) ‘tiger’ PL \*k<sup>H</sup>-sa; C kəsa, K kəs<sup>h</sup>à, G kəs<sup>h</sup>à; A (höl); PS \*kasa; PTB —  
注 Jilí kasá.

- (108) ‘back’ PL \*k-sáj; C ʔakəsáj, K kəs<sup>h</sup>áj, G kəs<sup>h</sup>áj; J fɪŋ<sup>31</sup>ma<sup>33</sup>, n<sup>31</sup>faj<sup>33</sup> ‘waist’; PTB —

- (109) ‘frog’ PL \*k<sup>H</sup>-suk; C kəsuʔ, K kəs<sup>h</sup>ouʔ, G kəs<sup>h</sup>auʔ; J fu<sup>31</sup>; PTB —

- (110) ‘root’ PL \*k-rat; C ʔákratʔ, K təklat, G təkát; A (kaké), Se (taha); PTB —  
注 K の形式は接中辞-l- がはいた形式と推定される。

- (111) ‘monkey’ PL \*k-wóy; C kəví, K kwé, G kwé; A koi; J woi<sup>33</sup>; PS \*kawoi; PTB \*b/d/g-woy-n (STEDT #2782)

- (112) ‘rat’ PL \*k<sup>H</sup>-yuw-k; C kəyvu, K kəyù, G cù?; A/Se kuyuk; J ju<sup>55</sup>; PTB \*b-yəw-n (STEDT #2796), PKC \*yuu (STEDT #2796)  
注 G c-は PL \*k-が y-の影響で硬口蓋化したためと推定される。
- (113) ‘earth’ PL \*ka; C kəjá?, K ka, G ka; A/Se ka; J ka<sup>55</sup>; PS \*ka; PTB \*r-ga (STEDT #2284)
- (114) ‘hot’ PL \*ká; C ká, K ká, G ká; Se ka; PTB —  
注 J ka<sup>33</sup> ‘dry’ や PTB \*s-ka DRY UP が関係しているかもしれない。
- (115) ‘bridge’ PL \*t/r-ká?; C rəká, K təká, G təká; PTB —
- (116) ‘dry’ PL \*r-ków; C rəkú, K ?əkú, G kó; PTB —
- (117) ‘steal’ PL \*kuw-k; C kvu, K ku, G ku?; A/Se kuk; J lä<sup>31</sup>ku<sup>55</sup>; WrB {khV:}; PTB \*r-kuw = \*r-kəw (STEDT #2365)
- (118) ‘bathe’ PL \*krúw; C krvú, K kú, G kú; J khʒut<sup>31</sup> ‘wash’; WrB {khyV:}, OB {khluiw} [Nishi 1999: 1]<sup>注36</sup>; PTB \*kruw = \*krəw (STEDT #2344)
- (119) ‘wing’ PL \*Cén-kV?; C ʔayáɪŋkó, K témkú, G lénkú; A lingo, Se ningko; J siŋ<sup>31</sup>ko<sup>33</sup>; PTB \*ko (STEDT #716: provisional), \*m/s-lam (STEDT #768)  
注 K ténkú [Sangdong 2012: 518]があるので、第一音節の韻母は\*-én と再構築する。K/G で t/l の対応をしめすものは多数あるけれども C y で対応するものは未確認である。また、第二音節の母音も対応しない。そこで全体としては、PL \*Cén-kV とする。
- (120) ‘run/flee’ PL \*kat; C kai?, K kat, G kat; A/Se kat; J kat<sup>31</sup>; PTB \*gan ≈ \*k(y)at (STEDT #6705)
- (121) ‘want to do’ PL \*kak; C ka?, K ka?, G ka?; PTB —  
注 PLB \*r-ga ≈ \*N-ga ≈ \*d-ga ≈ \*s-ga COPULATE/LOVE/WANT (STEDT #1646) と関係があるかもしれない。
- (122) ‘warm oneself’ PL \*kup; C ku?, K kop, G kəp; PTB —
- (123) ‘wear a bracelet’ PL \*kók; C kó?, K káu?, G káu?; PTB —

<sup>注36</sup> この形式は査読者 B の教示による。

(124) ‘bite’ PL \*kán; C ?akáij, K kán, G kán; A kan, Se klan; PTani \*gam (~ \*gjam?)  
(STEDT #6317)

(125) ‘pick up’ PL \*kun; C kuŋ, K kun, G kun; PTB —

(126) ‘old’ PL \*kaŋ; C kaŋ ‘be satisfied’, K kaŋtola, G kaŋ; A kangta, Se kangaga; PTB  
\*b-gaŋ FULL/SATIATED (STEDT #135: provisional)

注 K の形式は接中辞-l-がはいった形式と推定される。Se の語形はどのように分節できるか不明。ただし kang-の部分が ‘old’ と関係があることはまちがいないとおもわれる。

C/G/A で共通するものに (127) が確認されている。

(127) ‘lame’ PL \*koŋ; C koŋdo? ‘bent/crooked’, K —, G po?klaun; A taka kong; PTB  
—

注 G の形式は接中辞-l-がはいった形式と推定される。

C/A/Se で共通するものに (128) ~ (131) が確認されている。

(128) ‘long’ PL \*kréy; C kří, K —, G —; A/Se ke; J (kǎ<sup>31</sup>lu<sup>31</sup>); PTB (\*low (STEDT  
#2418))

(129) ‘bamboo’ PL \*kro; C kro, K (ləpou?), G (təpəu?); A ko, Se koa; J kǎ<sup>55</sup>wa<sup>55</sup>; WrB  
{waa}; PS \*krua; PTB \*g-pwa (STEDT #2549)

(130) ‘six’ PL \*kruk; C kru?, K (hou?), G (hou?); A/Se kok; J kʒu<sup>55</sup>; PS kruk; PTB  
\*d-ruk (STEDT #2621)

注 K/G は Shan hok<sup>4</sup> からの借用語。

(131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si?; C səkáijsi, K (?uluçi), G (?unuŋs<sup>h</sup>i); A/Se  
sangansī; J ǰǎ<sup>33</sup>kan<sup>33</sup>; PS \*sakan-si; PTB \*s-kar = \*s-kər (STEDT #2300)

C/Se で共通するものに (132) が確認されている。

(132) ‘firewood’ PL \*k-rók; C kəró?, K (p<sup>h</sup>ón), G (p<sup>h</sup>ón); A (phol ‘wood’), Se karak;  
PTB —

K/G/A/Se で共通するものに (133) ~ (134) が確認されている。

(133) ‘bone’ PL \*ma(ŋ/k)-kV-k; C (?áməra), K ma?ku, G maŋku?; A/Se mangko; J  
(n<sup>31</sup>ʒa<sup>33</sup>); PTB —

注 PL の韻母を再構することがむずかしい。

- (134) ‘beautiful’ PL \*C<sup>h</sup>-kam; C (kənáŋ)<sup>注37</sup>, K kətəm, G kləm; A kam ‘handsome’, kAM  
‘good’, Se kAM ‘handsome’; PTB —

注 A/Se の形式を考慮すると、K -t および G -l は接中辞にみえる。しかし、K/G  
における接中辞は -l が原則であるから、K -t は不規則である<sup>注38</sup>。

K/A/Se で共通するものに (135) が確認されている。

- (135) ‘two’ PL \*kíŋ; C (níŋ), K klíŋ, G (kε); A/Se kīŋ; PTB —

注 K の形式は接中辞 -l がはいた形式と推定される。K kəliŋ [Sangdong 2012:  
494] という形式も記録される。声調はことなっているかもしれない。

K/G/Se で共通するものに (136) ~ (137) が確認されている。

- (136) ‘tail’ PL \*mV(ŋ/k)-kV; C (ʔáləmuŋ), K maiʔkú, G miʔk<sup>h</sup>ú; A (mīyo), Se mingko;  
J n<sup>31</sup>mai<sup>31</sup>; PTB —

注 PL の韻母を再構することがむずかしい。

- (137) ‘shoot’ PL \*káp; C —, K káp, G káp; Se kAP sī ‘kill’; J kap<sup>31</sup>; PTB \*ga:p (STEDT  
#2232)

注 Se kAP ‘shoot’ + sī ‘die’ とおもわれる。G káp s<sup>h</sup>í ‘kill’ という形式も存在  
する。

K/G では前舌母音の前で \*k- > c- となる。(138) ~ (142) が確認されている。

- (138) ‘dog’ PL \*kuy; C kvu, K ci, G ci; A/Se kī; J kui<sup>31</sup>; WrB {khwe:}, OB {khuy}  
[Nishi 1999: 39]; PS \*kui; PTB \*d-kwəy-n (STEDT #1764)

- (139) ‘elephant’ PL \*kúy; C ʔukvú ~ wvukvú, K ʔəcí, G ʔəcí; A/Se kī; J mə<sup>31</sup>kui<sup>33</sup>; PS  
\*-kui; PTB \*(m-)gwi(y) (STEDT #2257: provisional)

<sup>注37</sup> A/Se の形式から判断すると、この語は本来一音節語であるはずである。すなわち n- が接  
中辞ということになる。しかし、C に接中辞は確認されていない。また、主音節の頭子音  
も声調も、K や G と対応しない。したがって同源形式とはかながえない。だが、K/G の  
主音節の頭子音が接中辞によらないものであるとすれば、C も同源形式といえるかもしれ  
ない。ただし同源形式であったとしても、声調が対応しないという問題はのこる。

<sup>注38</sup> ただし K t- に対して G l- が対応する例は散見される。たとえば ‘=ACCUSATIVE’ K =te  
vs. G =le。

(140) ‘buffalo’ PL \*k-réy; C krí, K cé, G cé; A/Se ké; J wǎ<sup>33</sup>loi<sup>33</sup>; WrB {kywaY}, OB {klway} [Nishi 1999: 68] ; PS \*kloi; PTB \*lwa:y (STEDT #2427)

注 Proto-Tai \*grwaay < Siamese khwaay (GSTC #75)。Matisoff [1985: 33] によれば、東南アジア大陸部での地域語。

(141) ‘mango’ PL \*krék-si; C krái?si, K cai?éi, G cái?s<sup>h</sup>i ~ céi?s<sup>h</sup>i; A/Se kèksī; PTB —

(142) ‘house’ PL \*kím; C kíj, K cém, G cím ~ kím; A/Se kem; WrB {@im’}; PS \*kyim; PTB \*k-yim ≍ k-yum (STEDT #1612)

C/K/Se で共通するものとして (143) がある。

(143) ‘blind’ PL \*kre; C kre, K mí? cè, G —; Se mīt ké; J mji?<sup>31</sup>kjo<sup>31</sup>; PTB \*(m-)gwi(y) (STEDT #2257)

C/K k-/c-に対して G/A/Se k<sup>h</sup>-/h-が対応する不規則なものが、(144) にしめす一例だけ確認されている。

(144) ‘-PLURAL (+v)’ PL \*-kí ~ \*-hí < \*-k<sup>h</sup>í; C -kí, K -cí, G -k<sup>h</sup>í; A so-hī ‘quarrel’, Se kutto-hī ‘quarrel’; PTB —

注 ‘quarrel’ は複数の参加者がいなければなりたない行為である。G の形式を参考にすれば、A/Se -hīを複数動作主の標識とかがえうる。なお G -k<sup>h</sup>íは代表形式であり、実際には先行する音にしたがって連声する。

C/G k-に対して、A/Se g-で対応しているものがある。A/Se では k-が予想されるところで、語中では g-になる傾向にある。したがって PL \*k-を再構することもできる。ただし (145) にしめす一例については、無声閉鎖音のあとでも g-である。そこで、かりに PL \*k/g-を再構する。

(145) ‘=NOMINALIZER’ PL \*=k/gá; C =gá/=ká<sup>注39</sup>, K —, G =ká; A/Se -ga ‘GENITIVE’; PTB —

注 G k-は先行する音におうじてさまざまに連声する。K =káは原因・理由をあらわす従属節標識としてもちいられる。名詞化とも関連があるとおもわれる。

K k-に対して、Se g-で対応しているものが (146) にしめす一例だけ確認されている。(145) との平行性から、ここでもかりに PL \*k/g-を再構する。

注39 C は属格標識としてももちいられる。また、-?のあとで=ká、そのほかの環境では=gáがあらわれる。C/G とともに未来標識としてももちいられうる。

(146) ‘=FUTURE’ PL \*=k/gú; C (=gá/=ká), K =ku, G (=ká); Sc -gu; PTB —

### 3.1.10 PL \*kh-

C f-に対して K c<sup>h</sup>-, G h-が対応するばあい、いずれも前舌母音が後続している。PL \*k-が前舌母音の前で K/G c-で対応していたこととの平行関係から、PL \*kh-を再構する。PL \*kh-は、J や PTB ともよく対応する。ただし適当な例は (147) ~ (148) にしめす二例しか確認されていない。

(147) ‘barking deer’ PL \*khí; C ʔifí, K ʔəc<sup>h</sup>í, G ɲəhí; J tʃǎ<sup>33</sup>khji<sup>31</sup>; WrB {khye}; PTB \*d-kəy (STEDT #2313)

(148) ‘shit/feces’ PL \*khyi-k; C ʃi, K c<sup>h</sup>i, G hiʔ; J khji<sup>55</sup>; PTB \*kləy (STEDT #572)

(149) の例は K の対応がないけれども、同様に再構しうる。

(149) ‘sell’ PL \*C<sup>h</sup>-khe; C ʔáfe, K (ma), G ɲəhè; A/Se he; PTB —

注 C/G/A/Se の形式は、あるいは Shan k<sup>h</sup>aaʃ<sup>1</sup> ‘sell’ と関係があるかもしれない。

PL \*khr-が再構されうるばあいには、C h-があらわれる。ただし適当な例は (150) ~ (151) にしめす二例しか確認されていない。ここでも前舌母音があらわれている。

(150) ‘wash (clothes)’ PL \*khri; C hri, K c<sup>h</sup>i, G hi; PTB —

注 ‘bathe/wash’ PTB \*kruw ≍ \*krəw (STEDT #2344) と関係があるかもしれないけれども、この形式に直接対応するのは (118) ‘bathe’ C krvúである。

(151) ‘sour’ PL \*hrí < khrí; C hrí, K c<sup>h</sup>í, G hí; J khʒi<sup>33</sup>; PTB \*m/s-kri(y)-s (STEDT #227)

### 3.1.11 PL \*khy-

C f-に対して K/G が h-が対応するばあい、PL \*khy-を再構する。ただし適当な例は (152) ~ (154) にしめす三例しか確認されていない。

(152) ‘red’ PL \*khyá; C ʃá, K há, G há; A/Se ha; J khje<sup>33</sup>; PTB —

注 PTB \*kyeŋ RED; ASHAMED (STEDT #2377) と関係があるかもしれない<sup>注40</sup>。

(153) ‘climb/get on’ PL \*khye; C ʃe, K he, G he; PKC \*ka(a)y ≍ \*ka(a)l (STEDT #4252)

<sup>注40</sup> 査読者 A によると、J 中国恩昆方言以外は J のどの方言でも末子音-ŋがある。ただし、末子音-ŋをもたない形式がよりふるい形式である可能性もあるとのことである。

(154) ‘shout’ PL \*khyák; C jáʔ, K háʔ, G háʔ; PTB —

## 3.2 摩擦音

### 3.2.1 PL \*s-

C s-に対して K/G が s<sup>h</sup>-が対応するばあい、PL \*s-を再構する。(103) ‘bird’ PL \*u-jík-sa、(107) ‘tiger’ PL \*k<sup>h</sup>-sa、(108) ‘back’ PL \*k-sáj、(109) ‘frog’ PL \*k<sup>h</sup>-suk、(141) ‘mango’ PL \*krék-si のほかに、(155) ~ (178) のような例が確認されている。

(155) ‘tongue’ PL \*s-lí-k; C ʔasəlíʔ, K s<sup>h</sup>əlí, G s<sup>h</sup>əlí; J jɪŋ<sup>31</sup>let<sup>31</sup>; WrB {lhyaa}; PS \*-ti; PTB \*s-lyak (STEDT #629)

注 この語は PTB \*l-が分派諸言語の一部において t/d-で実現するものであり、そのための条件にも合致している [馬提索夫 2006]。しかし、ルイ語群では l-のままである。ただし、G. Brown [1920: 16] では K s<sup>h</sup>ədi<sup>h</sup> と記録される。また、同根とみられる (43) ‘lick’ では t/d-で実現する。

(156) ‘nose’ PL \*s<sup>h</sup>-na; C ʔasəkənú, ʔəsəna ‘apex’, K s<sup>h</sup>ənà, G s<sup>h</sup>ənà; PTB \*s-na ≍ \*s-nar (STEDT #803)

(157) ‘tooth’ PL \*s-wá; C ʔasəvá, K s<sup>h</sup>wá, G s<sup>h</sup>wá; A sho, Se shoa; J (wa<sup>33</sup>); WrB {swaa:}; PS \*sawà; PTB \*s-wa (STEDT #632)

注 K/G の形式はビルマ語からの借用である可能性もある。

(158) ‘daughter’ PL \*s-ik ; C ʔásəʔiʔ, K s<sup>h</sup>əʔeiʔ, G s<sup>h</sup>eiʔ; J ʃǎ<sup>31</sup>ji<sup>33</sup>ʃa<sup>31</sup> ‘young woman’; PTB —

(159) ‘son’ PL \*sa; C ʔása, K s<sup>h</sup>a, G s<sup>h</sup>a; A saijahora, Se sahora; J ʃa<sup>51</sup> ‘child’; WrB {saa:}; PS \*sà; PTB \*tsa-n ≍ \*za-n (STEDT #428)

(160) ‘fat’ PL \*sáw; C ʔasá, K s<sup>h</sup>əló, G s<sup>h</sup>əló; A/Se sa; J sau<sup>55</sup>; PTB \*sa:w (STEDT #60)

注 K/G にみられる-l-は接中辞であるという [Sangdong 2012: 158–160]。

(161) ‘blood’ PL \*se; C se, K s<sup>h</sup>ε, G s<sup>h</sup>e; A/Se shé; J sai<sup>31</sup>; WrB {swe:}; PS \*se; PTB s-hywəy-t (STEDT #230)

(162) ‘husked rice’ PL \*sat; C kvúsaiʔ, K ʔəs<sup>h</sup>at, G ʔəs<sup>h</sup>at; A hwīsat ‘rice’, Se usat ‘rice’; J ʃat<sup>31</sup> ‘cooked.rice’; PS \*-sat; PTB —

注 J ʃat<sup>31</sup> は ʃa<sup>55</sup> ‘eat’ に名詞化接尾辞-t がついたものであるという [Matisoff 2003: 454, 倉部 2011: 20]。ルイ語群の形式にも、同様の可能性がある。

- (163) ‘scatter’<sup>注41</sup> PL \*sát/sít?; C sáiʔ, K s<sup>h</sup>ét, G s<sup>h</sup>át; PTB \*sywar ≈ \*g/b-sywa-n/t (STEDT #2680)
- (164) ‘take a rest’ PL \*sak; C saʔ, K s<sup>h</sup>aʔ, G s<sup>h</sup>aʔ; J saʔ<sup>55</sup>; PTB —
- (165) ‘breath’ PL \*sak; C svusaʔ káŋ, K ʔəs<sup>h</sup>áʔ s<sup>h</sup>án, G s<sup>h</sup>aʔs<sup>h</sup>án; J n<sup>31</sup>saʔ<sup>31</sup>; PTB \*N-sak (STEDT #32)
- (166) ‘get down/descend’ PL \*sat; C saiʔ, K s<sup>h</sup>at, G s<sup>h</sup>at; PTB —
- (167) ‘louse’ PL \*sik; C siʔ, K s<sup>h</sup>eiʔ, G s<sup>h</sup>iʔkɛ; J ts̥iʔ<sup>55</sup>; PTB \*s-r(y)ik (STEDT #2609)
- (168) ‘cough’ PL \*suk; C kruʔsuʔ, K cis<sup>h</sup>ouʔ s<sup>h</sup>ouʔ, G s<sup>h</sup>auʔs<sup>h</sup>auʔ; A/Se t̥insok su; J (tʃä<sup>31</sup>khʒu<sup>31</sup>); PST \*suk ≈ \*su(w) (STEDT #1794)
- (169) ‘shrimp’ PL \*r-i-sík? < \*r-i-syúk?; C ʔisiʔ, K ʔis<sup>h</sup>úʔ, G ʔis<sup>h</sup>úʔ; PTB —  
注 K の声調が対応しない。
- (170) ‘tear (v)’<sup>注42</sup> PL \*sék; C sáiʔ, K s<sup>h</sup>áiʔ, G s<sup>h</sup>áiʔ; A kong sek, Se tun sek; PTB —  
注 Matisoff [2012: 38] は PTB \*dzyut ≈ \*dzyit (HPTB) をあげる。しかし、韻母があわない。
- (171) ‘meat’ PL \*san; C ʔásaiŋ, K s<sup>h</sup>ələn, G s<sup>h</sup>ələn; A (aksal) ‘flesh’, Se sen ‘flesh’; J fan<sup>31</sup>; PTB \*sya-n (STEDT #34)  
注 K/G とともに複合語では s<sup>h</sup>an となる。K/G にみられる-lは接中辞であるという [Sangdong 2012: 158–160]。
- (172) ‘enter’ PL \*saŋ; C saŋ, K s<sup>h</sup>aŋ, G s<sup>h</sup>aŋ; J faŋ<sup>31</sup>; PTK \*tsaŋ (STEDT #6887), PTB \*s-waŋ [Matisoff 2012: 31]
- (173) ‘onion’ PL \*sún; C súŋ, K s<sup>h</sup>ún, G s<sup>h</sup>ún; PTB \*swa-n (HPTB)
- (174) ‘garlic’ PL \*sún-; C súŋp<sup>h</sup>ro, K s<sup>h</sup>únçilúŋ, G s<sup>h</sup>únłúŋ; J la<sup>31</sup>son<sup>33</sup>; PTB \*swa-n (HPTB)  
注 C/K/G とともに ‘onion’ + ‘white’ という語構成をしている。K çil (190) ‘fruit’ が高声調のあとで変調したもの。
- (175) ‘sew’ PL \*sún; C súŋ, K s<sup>h</sup>ún, G s<sup>h</sup>ún; PTB —

<sup>注41</sup> この例は Matisoff [2012: 39] の指摘による。

<sup>注42</sup> この例は Matisoff [2012: 38] の指摘による。

(176) ‘iron’ PL \*sen < \*sel?; C sɨŋ, K s<sup>h</sup>en, G s<sup>h</sup>en; A sên, Se sél; WrB {saM}; PS \*sil;  
PTB \*sya:l ≍ \*syi:r (STEDT #2673), \*syam (STEDT #2676)

(177) ‘finish/end’ PL \*sum; C suŋ, K s<sup>h</sup>om, G s<sup>h</sup>om; PTB —

(178) ‘three’ PL \*súm; C súŋ, K s<sup>h</sup>óm, G s<sup>h</sup>óm; A/Se shom; J mā<sup>31</sup>sum<sup>33</sup>; PS \*sùm; PTB  
\*g-sum (STEDT #2666)

(179) の例は G の韻母があわないほかは、C/K/G でよく対応する。

(179) ‘wash’ PL \*sen? < \*sel?; C saiŋ, K s<sup>h</sup>en, G s<sup>h</sup>em; J kǎ<sup>31</sup>fin<sup>31</sup>; PTB \*m/b-s(y)il ≍  
\*m/b-syal (STEDT #2671)

(180) の例は K の声調が不規則な点をのぞけば、C/K/G/A/Se でよく対応している。

(180) ‘live’ PL \*sén? < \*syán?; C síŋ, K s<sup>h</sup>èiŋ ~ ?ə<sup>h</sup>èiŋ, G s<sup>h</sup>áiŋ; A seng, Se sheng; J  
tsiŋ<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-riŋ ≍ \*s-r(y)aŋ (STEDT #71)

C/K で共通するものとして (181) がある。

(181) ‘rob’<sup>注43</sup> PL \*s<sup>h</sup>-nan; C sənaiŋ, K s<sup>h</sup>ənàn, G —; J fǎ<sup>31</sup>njen<sup>31</sup>; PTB \*s-nyen (STEDT  
#181)

C/G で共通するものとして (182) ~ (183) がある。

(182) ‘-DIMINUTIVE’ PL \*-sa; C -sa, K (-sa), G -s<sup>h</sup>a; J (ja<sup>31</sup>); PTK \*tsa (Mortensen 2012)  
注 (159) ‘son’ と語家族をなす。

(183) ‘search for’ PL \*sóp; C ?asó?, K —, G s<sup>h</sup>óp; PTB —

C/G/A/Se で共通するものとして (184) が確認されている。

(184) ‘feel sleepy’ \*ip-sim? < \*ip-syum?; C ?i?siŋ, K —, G ?eps<sup>h</sup>um; A eksum ‘sleep’,  
Se īsum ‘sleep’; PTB —

C/A/Se で共通するものとして (102) が確認されている。

(102) ‘ten’ PL \*jí, \*sí; C (cǐ/jǐ)/sí, K (cip), G (s<sup>h</sup>ip); A/Se (shêt), shī-, (-jī); J fi<sup>33</sup>; PS  
(\*chi); PTB (\*ts(y)i(y) ~ \*tsyay) (STEDT #2478)

注 C の形式は異形態。K/G は Shan s<sup>h</sup>ip<sup>4</sup> からの借用語。

<sup>注43</sup> この例は Matisoff [2012: 31] の指摘による。

さらに (185) ~ (187) のような例が確認されている。

- (185) ‘seven’ PL \*s-ni-ŋ; C səniŋ, K (set), G (sit); A/Se sīnī; J sǎ<sup>31</sup>nit<sup>31</sup>; PS \*sani(t); PTB \*s-ni-s (STEDT #2505)

注 K/G は Shan tset<sup>4</sup> からの借用語。

- (186) ‘eat’ PL \*sa; C sa, K (you?), G (you?); A shai, Se sa; J ja<sup>55</sup>; PTB \*dz(y)a-k/n/t/s (STEDT #36)

- (187) ‘tobacco’ PL \*sík; C síʔk<sup>h</sup>əlíʔ, (səlíʔ), K (s<sup>h</sup>élíʔ), G (s<sup>h</sup>əlíʔ); A/Se sík; PTB —  
注 C səlíʔ は声調の対応からすると M c<sup>h</sup>əlóiʔ からの借用である可能性があるけれども、頭子音の対応からすると本来語である。K/G はビルマ語からの借用語。

K/G/A/Se で共通するものとして (188) が確認されている。

- (188) ‘bear’ PL \*k<sup>h</sup>-sap; C (lúwaiŋ), K kəs<sup>h</sup>àp, G kəs<sup>h</sup>àp; A/Se sɔpɔm; J tsap<sup>55</sup>; PTB —  
注 PL \*s- に J ts- が対応するばあい、PTB \*s-ry- あるいは \*ts- である。類例に (167) ‘louse’、(180) ‘live’、(193) ‘medicine’ がある。

K/G/Se で共通するものとして (189) が確認されている。

- (189) ‘green’ PL \*C<sup>h</sup>-seŋʔ < \*C<sup>h</sup>-syaŋʔ; C —, K kəs<sup>h</sup>èiŋ, G s<sup>h</sup>àiŋ; Se seng; J tsɿŋ<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-riŋ ɹ \*s-r(y)aŋ (STEDT #71)

注 (180) ‘live’ と語家族をなすとおもわれる。

-i が後続するとき、K ɸ- となる。(87) ‘milk’ PL \*cuk-si、(131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si? のほかに、(190) ~ (195) のような例がある。

- (190) ‘fruit’ PL \*si; C ʔási, K ɸəci, G s<sup>h</sup>iʔs<sup>h</sup>i; A/Se sījī; J si<sup>31</sup>; WrB {@a\_sii:}; PS \*si; PTB \*sey (STEDT #1019)

- (191) ‘younger brother’ PL \*n<sup>h</sup>ísi; C ʔanési, K nəci, G nəš<sup>h</sup>i; A nasī, Se násī; J nau<sup>33</sup>; PTB \*na:w YOUNGER SIBLING, relative (STEDT #2492)

- (192) ‘die’ PL \*sí; C sí, K cí, G s<sup>h</sup>i; A sī, Se shī; J si<sup>33</sup>; WrB {se}, OB {siy}; PTB \*səy (STEDT #27: provisional)

- (193) ‘medicine’ PL \*si-k; C si, K ci, G s<sup>h</sup>iʔ; J tsi<sup>31</sup>; PTB \*r-tsəy (HPTB)

- (194) ‘comb’ PL \*C<sup>h</sup>-si-k; C húsi, K wəci, G hós<sup>h</sup>iʔ; J pǎ<sup>55</sup>si<sup>55</sup>, má<sup>31</sup>sit<sup>31</sup>; PTB \*m-si(y)-t (STEDT #1219: provisional)

注 G からは PL \*k が推定される。ただし PTB を参考にすれば、PL \*-it を推定しうる。PKC \*thi? (STEDT #4380) が同源形式である可能性もある。

- (195) ‘cold’ PL \*sim; C siŋ, K ɕim, G s<sup>h</sup>im; J khjen<sup>33</sup> ‘snow’<sup>注44</sup>; WrB {khyam’}; PTB \*kyam (STEDT #2374)

C/K で共通するものとして (196) がある。

- (196) ‘liver’ PL \*C<sup>h</sup>-sen; C ʔáŋsiŋ, K ʔəs<sup>h</sup>èn, G (téci); J mǎ<sup>31</sup>sin<sup>31</sup>; PTB \*m-sin (STEDT #1390)

(196) と語家族をなすものに (197) がある。ただし C の韻母があわない。

- (197) ‘heart’ PL \*C<sup>h</sup>-sen; C ʔasésúʔ, K ʔəs<sup>h</sup>èn, G s<sup>h</sup>èn; J mǎ<sup>31</sup>sin<sup>31</sup>; PTB \*m-sin (STEDT #1390)

C j- に K ɕ- が対応する不規則な例に (44) が確認されている。

- (44) ‘finger’ PL \*tak-sirʔ; C taʔjiʔ, K taʔɕi, G t<sup>h</sup>oklat; A (takhutol), Se (khutpang); PTB \*si ɕ \*ser ɕ \*sor (STEDT #324: provisional)

注 PL \*tak- は (10) ‘palm’, (45) ‘nail’ と共通する。(54) ‘hand’ にみられる tə- は PL \*tak が弱化した形式と推定される。

### 3.2.2 PL \*h-

C/K/G において共通して h- があらわれる形式には、PL として \*h- を再構する<sup>注45</sup>。(104) ‘cat’ PL \*hán-ji-k < \*hál-ji-k? < \*hál-ci-k? 以外に (198) ~ (203) のような例が確認されている。

- (198) ‘ghost’ PL \*h-mán; C həməíŋ, K həmán, G həmán; PTB —

- (199) ‘walk/bring’ PL \*ha; C ha, K ha, G ha; A laha ‘bring’, shai ‘walk’, Se la ha ‘bring’, sa ‘walk’; J sa<sup>33</sup> ‘go/come’; WrB {swaa:} ‘go’; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)

注44 この形式は査読者 A の教示による。

注45 本稿で PL \*h- と再構している形式については、おおむね PTB \*k- が対応する。したがって PL \*kh- を再構しうる。ただし、PTB の接頭辞 \*s- が h- で対応するものも数例ある。だから、C/K/G の形式が確認されていても、他言語に同源形式をみだせなければ、PTB \*k- に由来するか PTB \*s- に由来するかを決定できない。そこで本稿では PL \*h- を再構するにとどめておく。

注 PKC \*kal GO/PACE/WALK (STEDT #4285) と関係があるようにみえるかもしれない。しかし、\*-al は C で -aiŋ、K/G では -an で対応するのが通則である。

(200) ‘raise/bring up’ PL \*hroy; C hrú, K hé, G hé ‘be born’; Se pung he ‘lift up’; PTB

—

注 Se pung ‘carry’ なので he には ‘raise’ に類する意味があると推定される。PTB \*hu BORN/BIRTH/REAR (STEDT #97) も同源形式かもしれないけれども、介子音も母音も対応しない。

(201) ‘cloud’ PL \*hráj; C hrájgri, K haŋc<sup>h</sup>i, G hánni?; A/Se haraŋg ‘sky’; J mã<sup>31</sup>ʒaŋ<sup>33</sup> ‘rain’; PTB \*m/s-raŋ RAIN (STEDT #3571)

注 G -n は同化による。

(202) ‘rain’ PL \*hráj wé; C hráj vé, K həláŋ wé, G həláŋ wé; A/Se haraŋg myo; J mã<sup>31</sup>ʒaŋ<sup>33</sup>; PTB \*k/r/s-wa (STEDT #2080)

注 K/G の形式は ‘sky’ háŋ に接中辞-l がはいた形式と推定される。

(203) ‘small chair’ PL \*hon; C laʔhoŋ, K taŋhôn, G təhôn; J (lǎ<sup>55</sup>khum<sup>55</sup>); PTB —

注 J の形式はむしろ C ʔúʔhuŋ ‘pillow’ と同源であるとおもわれる。

C/K/G において共通して h があらわれているけれども、A/J/M のいずれかで kh があらわれているばあいには、PL \*h がさらに \*kh に由来している可能性がある。(36) ‘red ant’ PL \*t<sup>h</sup>-hra < \*t<sup>h</sup>-khra、(54) ‘hand’ PL \*t-hów < \*t-khów < \*tak-khów、(57) ‘nine’ PL \*t-húw < \*t-khúw のほかに、(204) ~ (212) のような例が確認されている。

(204) ‘bitter’ PL \*ha < \*kha; C ha, K ha, G ha; A/Se ha; J kha<sup>55</sup>; WrB {khaa:}; PTB \*b-ka-(n/m/ŋ) (STEDT #229)

(205) ‘chin’<sup>注46</sup> PL \*C<sup>h</sup>-ha < \*C<sup>h</sup>-kha; C ʔahəbúʔ, K ʔəhà, G ŋəhàhuʔ; A/Se khadang; J n<sup>31</sup>kha<sup>55</sup>; PTB \*(m/s)-ka (STEDT #273: provisional)

(206) ‘crow’ PL \*u-há < \*u-khá; C ʔuhá, K ʔuhá, G ʔəhá; A uha; J u<sup>31</sup>kha<sup>33</sup>; PTB \*ka-n (STEDT #2279: provisional)

(207) ‘branch/twig’ PL \*C<sup>h</sup>-ha-k < \*C<sup>h</sup>-kha-k; C ʔáhaʔ, K həlàʔ, G hà; A/Se (musa); M ʔəkhaʔ; PTB \*s-ka(:)k (STEDT #1278)

<sup>注46</sup> この例は Matisoff [2012: 22] の指摘による。

注 C/K/G の証拠からだけでは PL の接頭辞を決定することはできない。しかし PTB も参考にすれば、おそらくは\*s<sup>h</sup>-を再構しうる。

- (208) ‘burn’ PL \*hru < \*khru; C hru, K hu, G hu; A/Se hu; J khɔu<sup>31</sup>; PTB —
- (209) ‘borrow’ PL \*hoy < \*khoy; C hu, K hɛ, G he-kam; J khoi<sup>31</sup>; WrB {khye:}, OB {khiy} [Nishi 1999: 102]<sup>注47</sup>; PTB s-kəy (STEDT #2314)
- (210) ‘cry/weep’ PL \*hrap < \*khrap; C hraʔ, K hap, G hap; A/Se hɔp; J khɔap<sup>31</sup>; PTB \*krap (STEDT #1103)
- (211) ‘astringent’ PL \*hup < \*khup; C huʔ, K hop, G hɔp; J khup<sup>31</sup>; PTB —
- (212) ‘crab’ PL \*a/n-har < \*a/n-khar; C nəhaiŋ, K ʔəha, G ʔəha; A aha, Se niha; J tʃã<sup>55</sup>khan<sup>51</sup>; PTB \*d-k(y)an (STEDT #248: provisional)

C/K/A で共通して h-があらわれ、WrB で kh-が対応する例として、(213) が確認されている。

- (213) ‘coffin’ PL \*hóŋ < \*khóŋ; C hóŋ, K háuŋ, G (ʔək<sup>h</sup>áuŋ); A hongbel, Se (ku); WrB {@a\_khong’}; PTB —

C/A で共通して h-があらわれ、J に kh-が対応する例として、(214) ~ (215) が確認されている。(214) と語家族をなす (216) ~ (217) については対応する J の形式が未確認であるけれども、類例とみてよいとおもわれる。

- (214) ‘head’ PL \*hów < \*khów; C ʔahú, K (həláj), G (həlájŋùʔ); A/Se huɾaŋ; J khaʔ<sup>31</sup>khu<sup>55</sup> ‘upstream’<sup>注48</sup>; PS \*khu; PTB \*m/s-gaw (STEDT #386)

注 K/G にみられる h-は PL \*hów が弱化した形式にみえるかもしれない。しかし、K/G の形式はむしろ ‘sky’ háj に接中辞-l-がはいった形式と推定される。

- (215) ‘twenty’ PL \*hól < \*khólʔ; C húŋ, K —, G —; A/Se hol; J khun<sup>33</sup>; PTB \*(m-)kul (STEDT #2355)

- (216) ‘CL:man’ PL \*hów < \*khów; C hú, K hò, hú, G hò, hó; PTB —

注 (214) ‘head’ と同源。

<sup>注47</sup> この形式は査読者 B の教示による。

<sup>注48</sup> この形式は査読者 A の教示による。

(217) ‘hair (head)’ PL \*hów < \*khów; C ?ahúmiŋ, K həláníhú, G hó; A/Se humī; J kǎ<sup>55</sup>ʒa<sup>55</sup>; PS \*kʔu-mi; PTB \*s-pu (STEDT #1228: provisional)

C/K/A/Se で対応するものとして (218) ~ (219) がある。

(218) ‘boat’ PL \*hó; C hó, K həlí, G (le); A/Se ho; J (li<sup>33</sup>); WrB ({lhe}); PTB —  
注 Shan hio<sup>4</sup> と関係があるかもしれない。

(219) ‘husk of rice’ PL \*hók < PL \*khók?; C yá?hó?, K yəháu?, G (?amlá?k<sup>h</sup>áu?); A/Se ɪhok; J (num<sup>55</sup>kho<sup>55</sup>); PTB —  
注 J の形式を考慮すると PL \*khók と再構できる可能性がある。

K/A h-に対して G/J k<sup>h</sup>/kh-が対応するものとして次の例がある。

(59) ‘right (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-ha < \*t<sup>h</sup>-kha; C (pú?səlá?), K təhà, G tək<sup>h</sup>a; A laha, Se (tauwa); J khʒa<sup>55</sup>; PTB \*g-ya ~ \*g-ra (STEDT #2786)  
注 頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

G の韻母が不規則なほかはよく対応する例として (220) がある。

(220) ‘scratch’ PL \*hré-t < \*khré-t; C ?ahré, K ?əhé, G hət; J khʒet<sup>31</sup> ‘grate, rasp’<sup>注49</sup>; PTB \*m-kret (STEDT #6131)

(221) ~ (222) の例では接頭辞として PL \*h-があったかもしれない。

(221) ‘sharp’ PL \*h-ráj; C ráŋ, K háŋ, G háŋ; A lang, a-rang ‘blunt’; PTB —  
注 PTB \*(s-)ryam SHARP (STEDT #2639: provisional) とは韻母があわない。A lang を考慮すると、PL \*hlaŋ というような形式が想定できるかもしれない。A a-rang ‘blunt’ は否定接頭辞 a-に rang が付加している。rang 単独では ‘sharp’ を意味すると推定される。なお A では語頭で l-、語中で r-になるものとかがえられる。

(222) ‘potato’ PL \*h-ráj-hú?; C ráŋhú, K háŋmú ‘yam?’, G háŋgú ‘yam?’; A/Se nanghu ‘yam’; PTB —  
注 A/Se の形式を考慮すると、PL \*hláj-hú というような形式が想定できるかもしれない。

<sup>注49</sup> この形式は査読者 A の教示による。

### 3.3 鼻音

#### 3.3.1 PL \*m-

C/K/Gにおいて共通して m-があらわれる形式には、PL として \*m-を再構する。(38) ‘ankle’ PL \*ta-mík、(45) ‘nail’ PL \*tak-miŋ < \*tak-min?、(82) ‘sun’ PL \*c-mík、(105) ‘mushroom’ PL \*k-mú、(133) ‘bone’ PL \*ma(ŋ/k)-kV-k、(136) ‘tail’ PL \*mV(ŋ/k)-kV、(198) ‘ghost’ PL \*h-mán のほかに、(223) ~ (239) のような例が確認されている。

(223) ‘buy’ PL \*m-rí; C mərí, K mí, G mí; A/Se mī; J mā<sup>31</sup>zi<sup>33</sup>; PTB \*g/m/s-lay (STEDT #2137)

(224) ‘capsicum’ PL \*m-ruk?; C məru?, K mou?nəci, G mú?; A mosī, Se moksī; PTB

—

注 C/K と G とで声調があわない。

(225) ‘good’ PL \*méy; C mí, K mé, G mé; J mai<sup>33</sup>; PTB \*ma:y (STEDT #2444)

(226) ‘water leech’<sup>注50</sup> PL \*C<sup>H</sup>-mo; C məyú?, K mò, G mò; M hgyö, WrB {mhyo.}; PTB —

注 ビルマ語の形式から判断すると、PTB で接頭辞 \*s<sup>H</sup>-があった可能性がある。C では PL の主音節が接頭辞としてのみのこっている。

(227) ‘forget’ PL \*mat; C mai?, K mat, G mat; J mat<sup>31</sup> ‘lose’; PTB \*ma-t (DPTB #79)

(228) ‘extinguish’ PL \*mit; C səmi?, K ləmet, G mət; J ǰǰ<sup>31</sup>mjit<sup>55</sup>注51; PTB \*s-mi:n × \*s-mirt (STEDT #31)

注 K ləmet の接頭辞 lə-は la ‘take’ に由来し、語根を他動詞化する。

(229) ‘eye’ PL \*mík; C ʔamí?, K mí?tù, G mí?tù; A/Se mīt; J mji?<sup>31</sup>; WrB {myak’ci}; PTB \*s-mik (STEDT #682)

(230) ‘cattle’ PL \*s-muk; C səmu?, K mou?, G mou?; A sok; PS \*samuk; Ptk \*muk (STEDT #7137: provisional)

(231) ‘thunder/sky’<sup>注52</sup> PL \*C<sup>H</sup>-muk; C kəmu? ‘thunder’, K həməu? ‘sky’, G həməu? ‘sky’; J mu?<sup>55</sup> ‘thunder’; PTB \*r/s-mu:k [Matisoff 2012: 35]

注50 この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

注51 この形式は査読者 A の教示による。

注52 この例は Matisoff [2012: 35] の指摘による。

- (232) ‘under/below’<sup>注53</sup> PL \*múk?; C ʔámúʔ, K həmúʔ ~ kəmúʔ, G həmúʔ; PTB —  
注 C と K/G で声調があわない。さらに韻母の対応も不規則。同源形式とはいえないかもしれない。
- (233) ‘allot’ PL \*man; C maɪŋ, K man, G man; PTB —
- (234) ‘face’ PL \*mán < \*mál?; C ʔamáɪŋ, K mán, G mán; A/Se man; J man<sup>33</sup>; PS \*mal;  
PTB \*s-myal (STEDT #1188: provisional)
- (235) ‘dream (n)’ PL \*ip-maŋ; C ʔiʔmaŋ, K ʔepmaŋ, G ʔemaŋ; J ju<sup>31</sup>maŋ<sup>33</sup>; PTB  
\*(s/r)-ma((ŋ/k)) (STEDT #126)  
注 G で -p があらわれていないのは、後続する m-の影響とおもわれる。
- (236) ‘ripe’ PL \*míŋ < \*mín?; C míŋ, K míŋ, G míŋ; A/Se míŋ, a-min ‘raw’; J mjín<sup>33</sup>;  
PTB \*s-min (STEDT #2449)  
注 A/Se a-min ‘raw’ は否定接頭辞 a-に min が付加している。min 単独では ‘ripe’  
を意味すると推定される。
- (237) ‘bark/sound’<sup>注54</sup> PL \*m-ríŋ; C məríŋ ‘bark’, K míŋ ‘sound’, G míŋ ‘sound’; J  
phǰíŋ<sup>33</sup>; PTB \*priŋ ≈ \*b-ríŋ (STEDT #2571)
- (238) ‘wind (n)’ PL \*mun; C muŋ, K mun (vi), G mun (vi); PTB —  
注 J n<sup>31</sup>puŋ<sup>33</sup> ‘wind (n)’ や PTB \*buŋ WIND (n) (STEDT #6128) は韻母があわないので  
同源形式ではないとおもわれる。
- (239) ‘hair (body)’ PL \*mun; C ʔámuŋ, K muŋku, G miŋku, miŋcu; J mun<sup>33</sup>; WrB  
{@a\_mwe:}; PTB \*s/r-m(u/i/ya)l (STEDT #363)  
注 K/G の -ŋ は後続する k-の影響。そこでこの例については例外的に J を参考にして  
PL \*mun を再構する。
- C/K で共通するものとして (240) がある。
- (240) ‘play a flute’ PL \*mut; C muʔ, K mot, G —; J kǎ<sup>31</sup>wut<sup>31</sup> ‘blow’; PTB \*k/s-mut  
(STEDT #503)
- K/G/A/Se で共通するものとして (241) がある。

<sup>注53</sup> この例は Matisoff [2012: 36] の指摘による。

<sup>注54</sup> この例は Matisoff [2012: 32] の指摘による。

(241) ‘mother’ PL \*a-me; C (?antú), K ?əme, G ?əme; A/Se amé; J (nu<sup>51</sup>); WrB {*@a.me*}; PS \*me, \*nü; PTB \*mi (STEDT #1618)

注 K/G/A の形式は Shan me<sup>3</sup> からの借用にみえるかもしれない。しかし親族名称をあらわす接頭辞が共通してみられるので、本来語とかんがえる。C/J の形式は PTB \*n(y)u (STEDT #1621) と関係する。

### 3.3.2 PL \*n-

C/K/Gにおいて共通して n-があらわれる形式には、PL として\*n-を再構する。(106) ‘ear’ PL \*k-ná, (156) ‘nose’ PL \*s<sup>H</sup>-na, (191) ‘younger brother’ PL \*n<sup>V</sup>si, (181) ‘rob’ PL \*s<sup>H</sup>-nan のほかに、(242) ~ (249) のような例が確認されている。

(242) ‘laugh’ PL \*níy-k?; C ?ané, K ní, G ní; Se nik; J mə<sup>31</sup>ni<sup>33</sup>; PTB \*m-nwi(y)-k (STEDT #1105)

(243) ‘night’ PL \*nak; C na?tai?, K na?ce, G naŋki; A/Se sanak; J ǰă<sup>31</sup>na<sup>55</sup>; PS \*-nat-?; PTB \*s-nak BLACK (STEDT #2483)

(244) ‘daughter-in-law’ PL \*nám; C ?anáŋ, K nám, G nám; J nam<sup>33</sup>; PS \*nám; PTB \*s-nam (STEDT #2486)

(245) ‘smell (v)’ PL \*nám; C náŋ, K nám, G nám; A (nam-to)<sup>注55</sup>, Se nam; J mə<sup>31</sup>nam<sup>55</sup>; PTB \*m/s-nam (STEDT #1415)

(246) ‘thou’ PL \*naŋ; C naŋ, K naŋ, G naŋ; A/Se nang; J naŋ<sup>33</sup>; PS \*nang; PTB \*na-ŋ (STEDT #2489)

(247) ‘you (pl)’ PL \*niŋ; C nóniŋ, K həniŋ, G niŋ; A/Se ning; PTB —

(248) ‘year’<sup>注56</sup> PL \*niŋ; C səniŋ, K yà?niŋ ‘this year’, G yəniŋ pí ‘this year’; J ǰă<sup>31</sup>niŋ<sup>33</sup>; PTB \*niŋ = \*s-niŋ (STEDT #2501)

(249) ‘heavy’ PL \*C<sup>H</sup>-ni(ŋ/k); C ?ániŋ, K nèi?, G ni?; A/Se nik; PTB —

注 C と K/G/A/Se で語末子音の対応が不規則。PTB \*s-na:ŋ HEAVY/THICK (of liquids)/VISCOUS (STEDT #698: provisional) が関係しているかもしれない。

<sup>注55</sup> A にみえる -to は、K/G からの類推でいえば、借用語動詞であることをしめす標識である。そして、nam はメイティ語からの借用語であると推定される。他方、Se の形式には借用語動詞をあらわす標識があらわれていない。だから本来語とかんがえることができる。

<sup>注56</sup> この例は Matisoff [2012: 33] の指摘による。

C/A/Se で共通するものとして (185) がある。

- (185) ‘seven’ PL \*s-ni-ŋ; C səniŋ, K (set), G (sit); A/Se sīnī; J sǎ<sup>31</sup>nit<sup>31</sup>; PS \*sani(t); PTB \*s-ni-s (STEDT #2505)

注 K/G は Shan tset<sup>4</sup> からの借用語。

K/G/A/Se で共通するものとして (250) ~ (251) がある。

- (250) ‘next/coming’ PL \*nap; C —, K napniŋ ‘next year’, G ʔənap ‘next year’; A nap, Se nap; PTB —

- (251) ‘bury’ PL \*C<sup>H</sup>-nup; C —, K nòp, G nòp; A/Se nup; J lup<sup>31</sup>; PTB \*klup (DPTB #138)

G/A/Se で共通するものとして (252) がある。

- (252) ‘push’ PL \*C<sup>H</sup>-no < \*C<sup>H</sup>-nor?; C —, K —, G nò; A/Se no; PCC \*nor (STEDT #4805: provisional)

C/K n-に対して G ñ-となるものが (253) の一例だけ確認されている。

- (253) ‘new’<sup>注57</sup> PL \*n-yár?; C náŋ, K nəyá, G ñá; J n<sup>31</sup>nan<sup>33</sup>; PTB —

注 Tangsa anal, Nocte anyian [Matisoff 2012: 39]。

### 3.3.3 PL \*ŋ-

C/K/Gにおいて共通して ŋ-があらわれる形式には、PL として\*ŋ-を再構する。(254) ~ (257) のような例が確認されている。

- (254) ‘I’ PL \*ŋa; C ŋa, K ŋa, G ŋa; A/Se nga; J ŋai<sup>33</sup>; PS \*nga; PTB \*ŋa (STEDT #2523)

- (255) ‘be/exist’ PL \*ŋa; C ŋa, K ŋa, G ŋa; A ngai ‘remain’, Se nga ‘remain’; J ŋa<sup>31</sup>; PTB —

- (256) ‘say’ PL \*ŋáw; C ŋá, K ŋó, G ŋó; A/Se nga; J ŋu<sup>55</sup>; PTB —

注 A/Se とともに ‘whisper’ という語の一部に nga があらわれており、‘say’ の意味であると推定される。

- (257) ‘bend down’ PL \*C<sup>H</sup>-ŋuk; C ŋuʔ, K ŋòuʔ, G ŋòʔ; PTB —

<sup>注57</sup> この例は Matisoff [2012: 39] の指摘による。

C/A/Se で共通するものとして (258) がある。

(258) ‘five’ PL \*ŋá; C ŋá, K (hà), G (hà); A/Se nga; J mǎ<sup>31</sup>ŋa<sup>33</sup>; PS \*ngà; PTB \*l/b-ŋa (STEDT #1306)

注 K/G は Shan haa<sup>3</sup> からの借用語。

C n-に対して K/G が ŋ-が対応するものが (32)、(259) にしめす二例確認されている。いずれも歯音の接頭辞により同化して C n-となっているものと推定される。

(32) ‘fish’ PL \*t<sup>h</sup>-ŋa; C tɔna, K táŋŋà ~ taŋŋà, G táŋŋà; A/Se tanga; J (ŋa<sup>55</sup>); PS \*tangà?; PTB \*s-ŋya (STEDT #1455)

注 K/G において接頭辞 t-に ŋ-が後続する例がない。K/G で taŋ-となっているのは接頭辞 t-に ŋ-が直接後続することをさけるために主音節の母音が挿入された結果と推定される。平行例として (34) ‘bee’ K túŋŋún がある。Jílí tangá。

(259) ‘drive/chase’ PL \*r<sup>h</sup>-ŋak; C rəna?, K ŋà?, G ŋà?; PTB —

### 3.4 流音

#### 3.4.1 PL \*l-

C/K/G において共通して l-があらわれる形式には、PL として \*l-を再構する。(33) ‘turtle’ PL \*t<sup>h</sup>-lip、(35) ‘stone’ PL \*t<sup>h</sup>-luŋ、(155) ‘tongue’ PL \*s-lí-k のほかに、(260) ~ (266) のような例が確認されている。

(260) ‘take’ PL \*la; C la, K la, G la; A laha, Se la; J la<sup>55</sup>; PKC \*laa (STEDT #5056: provisional); PTani \*laŋ (STEDT #6421: provisional)

注 A laha は la ‘take’ + ha ‘walk’ と分析できるとおもわれる。(199) ‘walk’ C/K/G ha。

(261) ‘cock’ PL \*u-la; C ?ula, K ?ula, G ?ula; J u<sup>31</sup>la<sup>31</sup>; PTB —

(262) ‘=QUESTION’ PL \*=lé; C =lé, K =lé, G =lé; WrB {laY}; PTB la-y (HPTB)

注 C/K/G ともに決定疑問文の標識としてもちいられうる。WrB {laY} は疑問語疑問文の標識。

(263) ‘get’ PL \*lu; C lu, K lu, G lu; J lu<sup>31</sup>; PTB —

(264) ‘skin’ PL \*lák; C ?alá?, K lá?k<sup>h</sup>áu?, s<sup>h</sup>ə̀lè, G lá?k<sup>h</sup>áu?; A laho, Se lɛkɛk; PS \*-lak?; PTB \*lak (STEDT #602: provisional)

(265) ‘road’ PL \*lám; C lán, K lám, G lám; A lam je ‘far’, Se lam ja ‘far’; J lam<sup>33</sup>; WrB {lam’}; PS \*lam; PTB \*lam (STEDT #1017)

(266) ‘warm’ PL \*lím? < \*lyúm?; C lún, K lóm, G lóm; J lum<sup>33</sup>; PTB \*s-lum ≍ \*s-lim (STEDT #2420)

C/K で共通するものとして (267) がある。

(267) ‘many’ PL \*lón; C lón, K kláun, G (nam); J loʔ<sup>55</sup>注58; PTB —

K/G/A で共通するものとして、(60) ‘bow’ PL \*t<sup>h</sup>-li(t/k)?のほかにも、(268) ~ (270) がある。

(268) ‘come’ PL \*li; C (vaiŋ), K li, G li; A/Se lí; WrB {laa}; PS \*li; PTB \*la-y ≍ \*ra (STEDT #3569: provisional)

注 C の形式は va + -aiŋ ‘-VENITIVE’ という複合形式に由来する。

(269) ‘creeper’ PL \*lu-k; C (?árəku?), K yəlu, G yəlu?; A luhuk, Se (urī); PTB —  
注 C -ku? と A -huk は同源形式であるかもしれない。K/G の接頭辞 yə- は PKC \*yuun (STEDT #5192: provisional) と関係しているとおもわれる。

(270) ‘white’ PL \*lVŋ; C (p<sup>h</sup>ro), K lún, G lún; A lun, Se lung; J (phʒo<sup>31</sup>); WrB ({phruu}), OB ({phlu}); PS \*phro; PTB —

注 C/J の形式も同源形式とすれば、PL \*plVŋ-ŋ のような形式を再構できるかもしれない。

### 3.4.2 PL \*r-

C r- に対して K/G Ø- が対応するばあい、PL \*r- を再構する。(4) ‘emerge’ PL \*pru、(14) ‘smooth’ PL \*pri-t、(22) ‘jump’ PL \*phró-k、(24) ‘full’ PL \*phríŋ、(36) ‘red ant’ PL \*t<sup>h</sup>-hra < \*t<sup>h</sup>-khra、(73) ‘thick’ PL \*r<sup>h</sup>-thay、(116) ‘dry’ PL \*r-ków、(118) ‘bathe’ PL \*krúw、(128) ‘long’ PL \*kréy、(130) ‘six’ PL \*kruk、(140) ‘buffalo’ PL \*k-réy、(151) ‘sour’ PL \*hrí < khrí、(200) ‘raise/bring up’ PL \*hroy、(201) ‘cloud’ PL \*hrán、(208) ‘burn’ PL \*hru < \*khru、(210) ‘cry/weep’ PL \*hrap < \*khrap、(221) ‘sharp’ PL \*h-rán、(222) ‘potato’ PL \*h-rán-hú、(223) ‘buy’ PL \*m-rí、(224) ‘capsicum’ PL \*m-ruk、(237) ‘bark/sound’ PL \*m-ríŋ のほかに、(271) のような例が確認されている。

(271) ‘cord’ PL \*ri; C ri, K ?i, G ?i; J ʒi<sup>31</sup>, sum<sup>33</sup>ʒi<sup>33</sup>; PTB \*s-rwəy (STEDT #533)

注58 この形式は査読者 A の教示による。

C r-に K ∅-が対応するものとして (220) ‘scratch’ PL \*hré-t < \*khré-t が確認されている。

C r-に K/Se ∅-が対応するものとして (143) ‘blind’ PL \*kre が確認されている。

C r-に A ∅-が対応するものとして、(2) ‘four’ PL \*pri、(129) ‘bamboo’ PL \*kro のような例が確認されている。

C r-に対して K/G y-が対応するものとして、(272) ~ (273) にしめす二例が確認されている。

(272) ‘shave’ PL \*rat/rit?; C rai?, K yat, G yet; PTB \*rit (STEDT #2615)

(273) ‘wake up’ PL \*réy-k?; C rí?, K yé, G yóu?; PTB —

### 3.5 半子音

#### 3.5.1 PL \*w-

C v-が K/G w-で対応するような形式には、PL \*w-を再構する。(111) ‘monkey’ PL k-wóy、(157) ‘tooth’ PL \*s-wá、(202) ‘rain’ PL \*hráj wéのほかにも、(274) ~ (281) のような例が確認されている。

(274) ‘father’ PL \*a-wá?; C ?avá, K ?əwà, G ?əwa; A apa, Se apo; J wa<sup>51</sup>; PS \*wa; PTB \*pa = \*pwa (STEDT #2546)

注 C/K/G で声調があわない。

(275) ‘husband’ PL \*h-lówa; C ?ahróva, K hələwá (male), G hələwà (male); A hora; PTB \*wa (STEDT #1639)

注 PL \*h-l- → C hr-と推定される。

(276) ‘water’ PL \*wé; C vé ‘rain (v)’, K wé, G wé; A/Se mè, A okwe ‘gravy’; PS \*wi?; PTB \*røy (STEDT #1013), \*m-t(w)əy ≈ \*m-ti-s (STEDT #298)

(277) ‘pig’ PL \*wak; C va?, K wa?, G wa?; A/Se wak; J wa?<sup>31</sup>; WrB {wak’}; PS \*wak; PTB \*p-wak (STEDT #1006)

(278) ‘wide’<sup>注59</sup> PL \*wák; C vá?, K wá?, G wá?; PTB —

(279) ‘fire’ PL \*wan < \*wal; C vaiŋ, K wan, G wan; A/Se wal; J wan<sup>31</sup>; PS \*wal; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)

<sup>注59</sup> この例は Matisoff [2012: 34] の指摘による。

- (280) ‘smoke’ PL \*wan- < \*wal-; C vaiŋhvu, K wans<sup>h</sup>uŋ, G wanŋu?; A walkhū, Se walhū; J wan<sup>31</sup>khut<sup>31</sup>注60 ‘fire’; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)
- (281) ‘cut’ PL \*wán; C váiŋ, K wán, G wán; J mon<sup>31</sup>; PTB \*mwan ≈ \*mwat (STEDT #475)

### 3.5.2 PL \*y-

C/K/Gにおいて共通して y-があらわれる形式には、PL として\*y-を再構する。(282) ~ (285) のような例が確認されている。

- (282) ‘watch’ PL \*yu; C yu, K yu, G yu; J ju<sup>33</sup>; PTB —
- (283) ‘fan (v)’ PL \*yap; C yaʔ, K yap, G yap; J kǎ<sup>31</sup>tsap<sup>31</sup> ‘winnow’; WrB {yap’}; PTB \*g-ya:p (STEDT #2790)
- (284) ‘fan (n)’注61 PL \*C<sup>h</sup>-yap; C kəyaʔ, K həyàp, G həyàp; WrB {yap’}; PTB \*g-ya:p (STEDT #2790)
- (285) ‘CL:day’ PL \*yak; C yaʔ, K yaʔ, G yaʔ; A (chamī); J jaʔ<sup>55</sup>; PS \*ya-; PTB \*s-r(y)ak (STEDT #2636)

## 3.6 その他

C/K/G で一定の対応がみられるものの、PL の頭子音を決定しにくいものとして、以下の例がある。

### 3.6.1 流音にかかわるもの

C r- に対して K y-, G が l- が対応するものとして、(286) ~ (288) にしめす三例が確認されている。PL には流音に準ずる形式があったと推定される。しかしながら、どのような頭子音を具体的に再構できるかはわかっていない注62。

- (286) ‘cross (river)’注63 PL \*Cap; C raʔ, K yap, G lap; J ʒap<sup>55</sup>; PTB —
- (287) ‘catch’ PL \*Cim; C riŋ, K yem, G ləm; J ʒim<sup>31</sup>; PTB \*s-grim (STEDT #6174)

注60 査読者 A によると J-khut<sup>31</sup> の部分は名詞化接尾辞-t が付加したものであり [Matisoff 2003: 454]、C-hvu に対応する。

注61 この例は Matisoff [2012: 36] の指摘による。

注62 PTB を参照すると PL \*gr- といった形式が再構できるかもしれない。

注63 この例は Matisoff [2012: 36] の指摘による。

(288) ‘horn’ PL \*Cúŋ; C ʔarúŋ, K yóuŋkán, G láuŋkán; A/Se nongnang; J n<sup>31</sup>ʒuŋ<sup>33</sup>; PS \*rung; PTB \*n/g-[r]u-(ŋ)/k ≈ \*n/g-[r]wa-ŋ/k (STEDT #814)

C r-に対して K t-, G が l-が対応するものとして、(289) にしめす一例が確認されている。この例に対してどのような頭子音を再構すべきかもわかっていない。

(289) ‘=PLURAL (+n)’ PL \*Cak; C =raʔ, K =taʔ, G =laʔ; PTB —  
注 Tripura rauʔ (STEDT Database) も同源とおもわれる。

### 3.6.2 入破音にかかわるもの

C ʃ-に対して K p-, G m-が対応する例がある。頭子音に両唇音がかかっていると推定されるけれども、具体的な音価は決定できない。(290) ~ (292) のような例がある。

(290) ‘rot’<sup>注64</sup> PL \*Cú; C bú, K kəpú, G mú; J phu<sup>33</sup>; PTB —  
注 ‘rot’ PTB \*m-bup (HPTB) は韻母があわない。

(291) ‘eggplant’ PL \*Cok; C ʃəʔóŋsi, K pauʔpəci, G mouʔsaps<sup>h</sup>i; A/Se mokminsī; PKC \*ʃok-ʃoon ≈ \*ʃuk-ʃu (STEDT #4010)

(292) ‘muddy/cloudy’ PL \*Cón; C búŋ, K pón, G món; PTB —  
注 PTB \*muŋ CLOUDY, DARK; SULLEN (STEDT #2468) は韻母があわない。

C ʃ-に K p-が対応しているようにみえる例として (293) が確認されている。G の形式は未確認であるけれども、前例と同様に具体的な音価は指定せずに再構しておく。

(293) ‘bubble’ PL \*Cót; C ʔasəbót, K s<sup>h</sup>əpót, G —; PTB —

対応する C の形式は確認されていないけれども、K p-に対して G m-が対応するものとして (294) がある。A/Se p-で対応するので、PL 再構の根拠とみなせる。ただし、頭子音は決定できない。

(294) ‘broad’ PL \*Cák; C —, K páʔ, G máʔ; A/Se paktong; PTB —  
注 A/Se tong は (62) ‘big/great’ とおなじ。

C d-に K/G t-が対応する例として (295) が確認されている。本稿では PL としてかりに \*d-を再構しておく。

<sup>注64</sup> この例は Matisoff [2012: 37] の指摘による。

(295) ‘put upon’ PL \**daŋʔ*; C *daŋ*, K *taŋ*, G *taŋ*; WrB {*tangʔ*}; PTB —

C *d-*に K/G *l-*が対応しているようにみえる例として (296) が確認されている。ただし、声調がうまく対応しないので、同源形式とはいえないかもしれない。

(296) ‘cockroach’ PL \**s-Cípʔ*; C *sidiʔ*, K *s<sup>h</sup>əlíp*, G *s<sup>h</sup>əlíp*; PTB —

C *d-*に K *t-*、G *l-*が対応するものとして (297) が確認されている。頭子音を再構できないので、かりに C-をたてる。

(297) ‘wrap’ PL \**Cip*; C *díʔ*, K *tep*, G *lep*; PTB —

注 PTB *típ* ≍ \**tup* ≍ \**tum* (HPTB) あるいは PTB \**klup* (STEDT #2321) と関係しているかもしれない。

## 4 韻母

### 4.1 開音節

#### 4.1.1 PL \*-a

C/K/G に共通して *-a* があらわれる形式には、PL \**-a* を再構する。PL \**-a* はもともと安定した母音である。これまでにあげてきた語例のなかでは、以下にあげるようなものが確認されている。

(1) ‘level’ PL \**pá*; C *pá-goʔ*, K *ləpá* ‘paddy field’, G *lətpá* ‘paddy field’; J *pa<sup>33</sup>*; PTB —

(20) ‘thin’ PL \**pha*; C *p<sup>h</sup>a*, K *p<sup>h</sup>a*, G *p<sup>h</sup>a*; Se *pha*; J *pha<sup>31</sup>*; PTB \**ba* (STEDT #2143)

(32) ‘fish’ PL \**t<sup>h</sup>-ŋa*; C *təna*, K *táŋgà* ~ *taŋgá*, G *táŋgà*; A/Se *tanga*; J *ŋa<sup>55</sup>*; PS \**tangàʔ*; PTB \**s-ŋya* (STEDT #1455)

注 Jilí *tangá*。

(36) ‘red ant’ PL \**t<sup>h</sup>-hra* < \**t<sup>h</sup>-khra*; C *təhra*, K *təhà*, G *təhà*; M *k<sup>h</sup>ra*; PTB —

(37) ‘foot/leg’ PL \**ta*; C *ʔáta*, K *ta*, G *ta*; A *taka* ‘foot’, *taka* ‘leg’, Se *taŋpha* ‘foot’, *taha* ‘leg’; J *lǎ<sup>31</sup>ko<sup>33</sup>*; PS \**t(l)a(k)ʔ*; PTB \**la* (STEDT #350), \**d-ya* (STEDT #888)

(38) ‘ankle’ PL \**ta-mík*; C *ʔátəmíʔ*, K *tamiʔtù*, G *tamíʔtù*; A (khujeng), Se *taŋmīt*; PTB —

注 (37) ‘foot’ PL \**ta* と (229) ‘eye’ PL \**mík* からなる複合語。

- (69) ‘moon’ PL \*s-dá < \*s-lá; C sǝdá, K s<sup>h</sup>ǝtá, G s<sup>h</sup>ǝtá; A/Se satha; J jā<sup>33</sup>ta<sup>33</sup>; PS \*sada; PTB \*s-(g)la (STEDT #1016)
- (106) ‘ear’ PL \*k-ná; C ʔakǝná, K kǝná, G kǝná; A/Se kana; J na<sup>33</sup>; PS \*kana; PTB \*r/g-na (STEDT #811)
- (107) ‘tiger’ PL \*k<sup>h</sup>-sa; C kǝsa, K kǝs<sup>h</sup>à, G kǝs<sup>h</sup>à; A (hǝl); PS \*kasa; PTB —  
 注 PKC kay (STEDT #4317): チン系言語では Mizo sà-kéi のように、sa に該当する要素が前にきて、k-に相当する要素が後にくる。Jilí kasá.
- (113) ‘earth’ PL \*ka; C kǝjáʔ, K ka, G ka; A/Se ka; J ka<sup>55</sup>; PS \*ka; PTB \*r-ga (STEDT #2284)
- (114) ‘hot’ PL \*ká; C ká, K ká, G ká; Se ka; PTB —  
 注 J ka<sup>33</sup> ‘dry’ や PTB \*s-ka DRY UP が関係しているかもしれない。
- (115) ‘bridge’ PL \*t/r-ká?; C rǝká, K tǝká, G tǝká; PTB —
- (145) ‘=NOMINALIZER’ PL \*=k/gá; C =gá/=ká, K —, G =ká; A/Se -ga ‘GENITIVE’; PTB —  
 注 K =káは原因・理由をあらわす従属節標識としてもちいられる。名詞化とも関連があるとおもわれる。
- (152) ‘red’ PL \*khyá; C já, K há, G há; A/Se ha; J khje<sup>33</sup>; PTB —  
 注 PTB \*kyeŋ RED;ASHAMED (STEDT #2377) と関係があるかもしれない。
- (156) ‘nose’ PL \*s<sup>h</sup>-na; C (ʔasǝkǝnú), ʔásǝna ‘apex’, K s<sup>h</sup>ǝnà, G s<sup>h</sup>ǝnà; PTB \*s-na ≍ \*s-na:r (STEDT #803)
- (157) ‘tooth’ PL \*s-wá; C ʔasǝvá, K s<sup>h</sup>wá, G s<sup>h</sup>wá; A sho, Se shoa; J wa<sup>33</sup>; WrB {swaa:}; PS \*sawà; PTB \*s-wa (STEDT #632)  
 注 K/G の形式はビルマ語からの借用である可能性もある。
- (159) ‘son’ PL \*sa; C ʔása, K s<sup>h</sup>a, G s<sup>h</sup>a; A saijahora, Se sahora; J ja<sup>51</sup> ‘child’; WrB {saa:}; PS \*sà; PTB \*tsa-n ≍ \*za-n (STEDT #428)
- (182) ‘-DIMINUTIVE’ PL \*-sa; C -sa, K -ǝa, G -s<sup>h</sup>a; J ja<sup>31</sup>; Ptk \*tsa (Mortensen 2012)  
 注 (159) ‘son’ と語家族をなす。

- (186) ‘eat’ PL \*sa; C sa, K (youʔ), G (youʔ); A shai, Se sa; J ja<sup>55</sup>; PTB \*dz(y)a-k/n/t/s (STEDT #36)  
 注 他言語で-a におわる動詞は、A -ai となっている。McCulloch [1859] におけるほかの語例も考慮すると、語末の-i は述部標識が縮約したものである可能性がある。
- (199) ‘walk/bring’ PL \*ha; C ha, K ha, G ha; A laha ‘bring’, shai ‘walk’, Se la ha ‘bring’, sa ‘walk’; J sa<sup>33</sup> ‘go/come’; WrB {swaa:} ‘go’; PTB s-wa BE IN MOTION, GO, COME (STEDT #2774)  
 注 PKC \*kal GO/PACE/WALK (STEDT #4285) と関係があるようにみえるかもしれない。しかし、\*-al は C で-aiŋ、K/G では-an で対応するのが通則である。
- (204) ‘bitter’ PL \*ha < \*kha; C ha, K ha, G ha; A/Se ha; J kha<sup>55</sup>; WrB {khaa:}; PTB \*b-ka-(n/m/ŋ) (STEDT #229)
- (205) ‘chin’ PL \*C<sup>H</sup>-ha < \*C<sup>H</sup>-kha; C ʔahəbúʔ, K ʔəhà, G ʔəhàhuʔ; A/Se khadang; J n<sup>31</sup>kha<sup>55</sup>; PTB \*(m/s)-ka (STEDT #273: provisional)
- (206) ‘crow’ PL \*u-há < \*u-khá; C ʔuhá, K ʔuhá, G ʔəhá; A uha; J u<sup>31</sup>kha<sup>33</sup>; PTB \*ka-n (STEDT #2279: provisional)
- (254) ‘I’ PL \*ŋa; C ŋa, K ŋa, G ŋa; A/Se nga; J ŋai<sup>33</sup>; PS \*nga; PTB \*ŋa (STEDT #2523)
- (255) ‘be/exist’ PL \*ŋa; C ŋa, K ŋa, G ŋa; A ngai ‘remain’, Se nga ‘remain’; J ŋa<sup>31</sup>; PTB —
- (258) ‘five’ PL \*ŋá; C ŋá, K (hà), G (hà); A/Se nga; J mǎ<sup>31</sup>ŋa<sup>33</sup>; PS \*ngà; PTB \*1/b-ŋa (STEDT #1306)  
 注 K/G は Shan haa<sup>3</sup> からの借用語。
- (260) ‘take’ PL \*la; C la, K la, G la; A laha, Se la; J la<sup>55</sup>; PKC \*laa (STEDT #5056: provisional); PTani \*laŋ (STEDT #6421: provisional)  
 注 A laha は la ‘take’ + ha ‘walk’ と分析できるとおもわれる。(199) ‘walk’ C/K/G ha。
- (261) ‘cock’ PL \*u-la; C ʔula, K ʔula, G ʔula; J u<sup>31</sup>la<sup>31</sup>; PTB —
- (274) ‘father’ PL \*a-wáʔ; C ʔavá, K ʔəwà, G ʔəwa; A apa, Se apo; J wǎ<sup>51</sup>; PS \*wa; PTB \*pa = \*pwa (STEDT #2546)

注 C/K/G で声調があわない。

- (275) ‘husband’ PL \*h-lówa; C ʔahróva, K hólówá (male), G hólówà (male); A hora; PTB \*wa (STEDT #1639)

C/Se で共通するものとして次のような例がある。

- (96) ‘light (weight)’ PL \*ca < \*r-ya; C rəca, K (sə̀nà), G (sə̀nà); Se cha; J tsə̀j<sup>33</sup>; PTB \*r-ya:ŋ (STEDT #2789)

注 K/G sə̀-は PL \*ca が接頭辞化したものである可能性がたかい。

K/G/A/Se で共通するものとして次のような例がある。

- (72) ‘cooked rice’ PL \*dá < \*táʔ; C (púʔ), K ʔətá, G ʔətá; A onda, Se konda; PTB —  
 (103) ‘bird’ PL \*u-jík-sa < \*u-cík-saʔ; C (ʔusi), K ʔusiʔs<sup>h</sup>à ~ ʔusiʔs<sup>h</sup>á, G ʔusiʔs<sup>h</sup>à; A/Se ujík-sa; J (u<sup>31</sup>); PS \*-cik-ʔ; PTB \*wu (STEDT #301)

K/G/A で共通するものとして次のような例がある。

- (59) ‘right (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-ha < \*t<sup>h</sup>-kha; C (púʔsəláʔ), K tə̀hà, G tək<sup>h</sup>a; A laha, Se (tauwa); J khɜ̀a<sup>55</sup>; PTB \*g-ya ~ \*g-ra (STEDT #2786)

注 頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

このほか、(298) ~ (301) のような例が確認されている。いずれも機能語であり、先行する環境によって頭子音が変化する。ここでは韻母のみをあげておく。

- (298) ‘CL-one’ PL \*-a; C -a, K -a, G -a; A/Se -ta; PTB —

- (299) ‘-ANDATIVE’ PL \*-a; C -a, K -a, G -a; PTB —

- (300) ‘=ALLATIVE’ PL \*=C<sup>h</sup>a; C =a, K =pà, G =à; PTB —

- (301) ‘=LOCATIVE’ PL \*=aʔ; C =a, K (=pe), G =á; A/Se -a; PTB —

注 C と G で声調が対応しない。K =pe は \*=pa-i といった形式に由来するかもしれない。

#### 4.1.2 PL \*-ay

C -e に対して K/G が -ɛ が対応する例がある。PL \*-ɛ を再構することもできる。しかし、母音の体系から判断すれば、PL \*-ay を再構できるようにおもわれる。ただし、

C/K/G で対応する例は、次にあげる二例しか確認されていない<sup>注65</sup>。

(73) ‘thick’ PL \*r<sup>h</sup>-thay; C rə<sup>h</sup>e, K t<sup>h</sup>ɛ̃ ~ ʔət<sup>h</sup>ɛ̃, G t<sup>h</sup>ɛ̃; A/Se the; J that<sup>31</sup>; PTB \*r-tas (STEDT #178)

(302) ‘turmeric’ PL \*k-áy?; C kəʔé, K haʔcətʔé, hákcè [Sangdong 2012: 490], G haʔcé ~ haʔké; A/Se kunghé; PKC \*ʔaay (STEDT #4504: provisional)

次の例も類例といえる。

(16) ‘left (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-pay < \*t<sup>h</sup>-pway?; C (beláʔ), K təpè, G (pɛ); A téwe, Se tewew; J pai<sup>33</sup>; WrB ({bhay’}); PTB \*bay ~ \*bway (STEDT #2154)

#### 4.1.3 PL \*-aw

C -a に対して K/G が-ɔ が対応するばあい、PL \*-aw を再構する。ただし適当な例は次にしめす二例しか確認されていない。

(160) ‘fat’ PL \*sáw; C ʔasá, K s<sup>h</sup>əló, G s<sup>h</sup>əló; A/Se sa; J sau<sup>55</sup>; PTB \*sa:w (STEDT #60)  
注 K/G にみられる-l は接中辞であるという [Sangdong 2012: 158–160]。

(256) ‘say’ PL \*ŋáw; C ŋá, K ŋó, G ŋó; A/Se nga; J ŋu<sup>55</sup>; PTB —  
注 A/Se とともに ‘whisper’ という語の一部に nga があらわれており、‘say’ の意味であると推定される。

#### 4.1.4 PL \*-i

C/K/G において共通して-i があらわれる形式には、PL として\*-i を再構する。これまでにあげてきた語例には以下の六例がある。

(66) ‘sweet’ PL \*ti; C kyi, K ti, G ti; A/Se tī; J tui<sup>31</sup>; PS \*tui?; PTB \*twi(y) (STEDT #2721)

(67) ‘egg’ PL \*ti; C ʔákyi, K tətí, G tittí; J ti<sup>31</sup>; WrB {u}; PS \*tui; PTB \*(w)əy (STEDT #300)  
注 Sak wa-tí [Hodgson 1853: 8]。

(68) ‘penis’ PL \*tí; C ʔakyí, K tí, G tí; PTB \*ti-k (STEDT #641), \*dzi (STEDT #1601)

<sup>注65</sup> 頭子音が相補分布しているので、PL \*-ey と再構できる可能性もある。なお、K/G で-ɛ があらわれる例そのものは散見される: ‘navel’ K pott<sup>h</sup>é, G pott<sup>h</sup>é; ‘vomit’ K/G céなど。

- (144) ‘-PLURAL (+v)’ PL \*-kí ~ \*-hí < \*-k<sup>h</sup>í; C -kí, K -cí, G -k<sup>h</sup>í; A so-hī ‘quarrel’, Se kutto-hī ‘quarrel’; PTB —
- (147) ‘barking deer’ PL \*khí; C ʔíʔí, K ʔəc<sup>h</sup>í, G ɲəhí; J tʃǎ<sup>33</sup>khjǐ<sup>31</sup>; WrB {khye}; PTB \*d-kəy (STEDT #2313)
- (268) ‘come’ PL \*li; C (vaiŋ), K li, G li; A/Se lī; WrB {laa}; PS \*li; PTB \*la-y ≈ \*ra (STEDT #3569: provisional)  
 注 C の形式は va + -aiŋ ‘-VENITIVE’ という複合形式に由来する。
- K/G/A で共通するものとして、次の例がある。
- (87) ‘milk’ PL \*cuk-si; C (cəʔú), K souʔci, G sauʔs<sup>h</sup>i; A chokchoksī; PTB \*dzyuk (HPTB)
- このほかに、(303) のような例がある。
- (303) ‘give’ PL \*i; C ʔi, K ʔi, G ʔi; A/Se ī; J ja<sup>33</sup>; PS \*i; PTB \*ya-k (STED #3549)  
 注 PS \*yan [Löffler 1964: 103] は、動詞に助動詞がついた形式が一語となったものであり、‘give’ そのものの形式としては適当でない。
- PL \*-i は、C では s/c/j- のあとで -i になる。
- (102) ‘ten’ PL \*jí, \*sí; C cí/jí/sí, K (cip), G (sh<sup>h</sup>ip); A/Se (shèt), shī-, -jī; J jí<sup>33</sup>; PS \*chi; PTB \*ts(y)i(y) ~ \*tsyay (STEDT #2478)  
 注 C の形式は異形態。K/G は Shan s<sup>h</sup>ip<sup>4</sup> からの借用語。
- (131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si?; C səkáŋsi, K ʔuluçi, G ʔunuŋs<sup>h</sup>i; A/Se sangansī; J ʃǎ<sup>33</sup>kan<sup>33</sup>; PS \*sakan-si; PTB \*s-kar = \*s-kər (STEDT #2300)
- (141) ‘mango’ PL \*krék-si; C kráiʔsi, K caiʔci, G cáíʔs<sup>h</sup>i ~ céiʔs<sup>h</sup>i; A/Se kèksī; PTB —
- (190) ‘fruit’ PL \*si; C ʔási, K cəci, G s<sup>h</sup>iʔs<sup>h</sup>i; A/Se sījī; J si<sup>31</sup>; WrB {@a\_sii:}; PS \*sì; PTB \*sey (STEDT #1019)
- (191) ‘younger brother’ PL \*n<sup>h</sup>ísi; C ʔanési, K nəci, G nəš<sup>h</sup>i; A nasī, Se násī; J nau<sup>33</sup>; PTB \*na:w YOUNGER SIBLING, relative (STEDT #2492)
- (192) ‘die’ PL \*sí; C sí, K cí, G s<sup>h</sup>í; A sī, Se shī; J si<sup>33</sup>; WrB {se}, OB {siy}; PTB \*səy (STEDT #27: provisional)

- (193) ‘medicine’ PL \*si-k; C si, K ci, G s<sup>h</sup>iʔ; J tsi<sup>31</sup>; PTB \*r-tsəy (HPTB)  
 PL \*i は、C では r-のあとでも i になる。
- (2) ‘four’ PL \*p<sup>h</sup>ri; C p<sup>h</sup>ri, K (ci), pí [Sangdong 2012: 511], G pí; A pī; J mā<sup>31</sup>li<sup>33</sup>;  
 PTB \*b-ləy (STEDT #2409)
- (14) ‘smooth’ PL \*p<sup>h</sup>ri-t; C p<sup>h</sup>ri, K pi, G pit; A pī; J p<sup>h</sup>si<sup>33</sup>; PTB —  
 注 G で t があらわれている点が不規則。
- (150) ‘wash (clothes)’ PL \*khri; C hri, K c<sup>h</sup>i, G hi; PTB —  
 注 ‘bathe/wash’ PTB \*kruw ≍ \*krəw (STEDT #2344) と関係があるかもしれないけれども、この形式に直接対応するのは (118) ‘bathe’ C krvú である。
- (151) ‘sour’ PL \*h<sup>h</sup>ri < kh<sup>h</sup>ri; C h<sup>h</sup>ri, K c<sup>h</sup>i, G hí; J kh<sup>h</sup>si<sup>33</sup>; PTB \*m/s-kri(y)-s (STEDT #227)
- (223) ‘buy’ PL \*m-rí; C mərí, K mí, G mí; A/Se mī; J mā<sup>31</sup>zi<sup>33</sup>; PTB \*g/m/s-lay (STEDT #2137)
- (271) ‘cord’ PL \*ri; C ri, K ʔi, G ʔi; J ʔi<sup>31</sup>, sum<sup>33</sup>zi<sup>33</sup>; PTB \*s-rwəy (STEDT #533)  
 次にあげる例では、C で PL \*r-があらわれていないけれども、母音が i になっているところに残滓があるとかんがえうる<sup>注66</sup>。K/G では r-があらわれない。
- (169) ‘shrimp’ PL \*r-i-sík? < \*r-i-syúk?; C ʔisiʔ, K ʔis<sup>h</sup>úʔ, G ʔis<sup>h</sup>úʔ; PTB —  
 注 K の声調が対応しない。
- C/K -i に対して G が -iʔ が対応する例がある。このような例に対しては PL \*-i-k を再構する。次にしめす三例が確認されている。
- (148) ‘shit/feces’ PL \*khyi-k; C ji, K c<sup>h</sup>i, G hiʔ; J khji<sup>55</sup>; PTB \*kləy (STEDT #572)
- (193) ‘medicine’ PL \*si-k; C si, K ci, G s<sup>h</sup>iʔ; J tsi<sup>31</sup>; PTB \*r-tsəy (HPTB)
- (194) ‘comb’ PL \*C<sup>h</sup>-si-k; C húsi, K wəci, G hós<sup>h</sup>iʔ; J pǎ<sup>55</sup>si<sup>55</sup>, mā<sup>31</sup>sit<sup>31</sup>; PTB \*m-si(y)-t (STEDT #1219: provisional)  
 注 G からは PL \*k が推定される。ただし PTB を参考にすれば、PL \*-it を推定しうる。PKC \*thiʔ (STEDT #4380) が同源形式である可能性もある。

<sup>注66</sup> 平行例としては ‘water’ C ʔi < PL \*r-i < PTB \*rəy がかんがえられる。

C -i? に対して K -i が対応している例が一例確認されている。

- (44) ‘finger’ PL \*tak-sir?; C taʔjiʔ, K taʔci, G tʰəklat; PTB \*si ≍ \*ser ≍ \*sor (STEDT #324: provisional)

注 C -i? に K/G -i が対応することから、PTB も考慮すると PL では語末に -ir があつた可能性がある。類例には (155) ‘tongue’ もかんがえられる。

#### 4.1.5 PL \*-iy

C -e に対して K/G -i が対応するばあい、かりに PL \*-iy を再構する<sup>注67</sup>。次にあげる二例が確認されている。

- (29) ‘kick’ PL \*phiy?; C kəp<sup>h</sup>e, K p<sup>h</sup>i, G (suʔ); PTB —

- (242) ‘laugh’ PL \*níy-k?; C ʔané, K ní, G ní; Se nik; J mā<sup>31</sup>ni<sup>33</sup>; PTB \*m-nwi(y)-k (STEDT #1105)

K/G/A -i に対して Se -éが対応している例がある。C -e に対して K/G -i が対応するものと同類とみなし、かりに PL \*-iy を再構する<sup>注68</sup>。

- (58) ‘thigh’ PL \*t-kíy?; C (ʔátəkəboʔ), K (təci), G təkí; A tanghī, Se tangé; J mā<sup>31</sup>kji<sup>33</sup>; PTB —

#### 4.1.6 PL \*-e

C/G -e に対して K -ε が対応するばあい、PL \*-e を再構する。以下にあげるような例が確認されている。

- (21) ‘shoulder (v)’ PL \*phé; C p<sup>h</sup>é, K p<sup>h</sup>é, G p<sup>h</sup>é; J phai<sup>33</sup>, phye<sup>55</sup>; PKC \*paay ≍ \*pooy (STEDT #4135: provisional)

- (153) ‘climb/get on’ PL \*khye; C fe, K he, G he; PKC \*ka(a)y ≍ \*ka(a)l (STEDT #4252)

- (161) ‘blood’ PL \*se; C se, K s<sup>h</sup>e, G s<sup>h</sup>e; A/Se shé; J sai<sup>31</sup>; WrB {swe:}; PS \*se; PTB s-hywəy-t (STEDT #230)

<sup>注67</sup> 本稿では K/G の母音や PTB を参考に PL \*-iy をたてた。しかし、C の母音を参考にすれば、PL \*-ey を再構しうる。どちらの再構がより妥当であるかは、今後の課題とする。

<sup>注68</sup> PL \*-i とすべきである可能性も十分にある。平行例がさらにあつまれば、よりよい形式を再構できるとおもわれる。今後の課題とする。

- (202) ‘rain’ PL \*hráj wé; C hráj vé, K hóláj wé, G hóláj wé; A/Se (harɔŋ mɔ); J (mä<sup>31</sup>ʒaj<sup>33</sup>); PTB \*k/r/s-wa (STEDT #2080)

注 K/G の形式は ‘sky’ háj に接中辞-lがはいった形式と推定される。

- (276) ‘water’ PL \*wé; C vé ‘rain (v)’, K wé, G wé; A/Se mè, A okwe ‘gravy’; PS \*wi?; PTB \*rəy (STEDT #1013), \*m-t(w)əy ≍ \*m-ti-s (STEDT #298)

C/G/A/Se で共通するものとして次の例がある。

- (149) ‘sell’ PL \*C<sup>H</sup>-khe; C ʔáfe, K (ma), G ɲòhè; A/Se he; PTB —

注 C/G/A/Se の形式は、あるいは Shan k<sup>h</sup>aaj<sup>1</sup> ‘sell’ と関係があるかもしれない。

C-e、K-e に対して G-et が共通するものとして次の例がある。

- (220) ‘scratch’ PL \*hré-t < \*khré-t; C ʔahré, K ʔəhé, G het; J khʒet<sup>31</sup> ‘grate, rasp’; PTB \*m-kret (STEDT #6131)

C/K/Se で共通するものとして次の例がある。

- (143) ‘blind’ PL \*kre; C kre, K míʔcè, G —; Se mīt ké; J mjiʔ<sup>31</sup>kjo<sup>31</sup>; PTB \*(m-)gwi(y) (STEDT #2257)

K/G/A で共通するものとして次の例がある。

- (241) ‘mother’ PL \*a-me; C (ʔantú), K ʔəme, G ʔəme; A/Se amé; J (nu<sup>51</sup>); WrB {@a.me}; PS \*me, \*nü; PTB \*mi (STEDT #1618)

注 K/G/A の形式は Shan mɛ<sup>3</sup> からの借用にみえるかもしれない。しかし親族名称をあらわす接頭辞が共通してみられるので、本来語とかがえる。

C/K/G において共通して-e があらわれる形式が二例確認されている。かりに PL \*-e を再構する。

- (39) ‘elder sister’<sup>注69</sup> PL \*a-té; C ʔaté ‘uncle’, K ʔaté, G ʔaté; PTB —

- (262) ‘=QUESTION’ PL \*=lé; C =lé, K =lé, G =lé; WrB {laY}; PTB la-y (HPTB)

<sup>注69</sup> この語の意味については注 25 を参照。

#### 4.1.7 PL \*-ey

C-i に対して K -ε、G -e が対応するばあい、かりに PL \*-ey を再構する<sup>注70</sup>。次にあげる二例が確認されている。

(3) ‘put’ PL \*péy; C pí, K pé, G pé; A/Se pe ‘put down’; PTB \*s-bəy-n/k GIVE (STEDT #2158)

(225) ‘good’ PL \*méy; C mí, K mé, G mé; J mai<sup>33</sup>; PTB \*mary (STEDT #2444)

r-のあとでは C -i となる。次の二例が確認されている。

(128) ‘long’ PL \*kréy; C krí, K —, G —; A/Se ke; J (kǎ<sup>31</sup>lu<sup>31</sup>); PTB (\*low (STEDT #2418))

注 対応する K/G が無いけれども、A/Se -e であるから、かりに PL \*-ey としておく。

(140) ‘buffalo’ PL \*k-réy; C krí, K cé, G cé; A/Se ké; J wǎ<sup>33</sup>loi<sup>33</sup>; WrB {kywaY}, OB {klway} [Nishi 1999: 68] ; PS \*kloi; PTB \*lway (STEDT #2427)

注 Proto-Tai \*grwaay < Siamese khwaay (GSTC #75)。Matisoff [1985: 33] によれば、東南アジア大陸部での地域語。

次の例は C と G で末子音があり K にはないという不規則があるけれども、C -i < -i に K -ε が対応しているので、かりに PL \*-ey を再構する。

(273) ‘wake up’ PL \*réy-k?; C rí?, K yé, G (yóu?); PTB —

注 G の韻母の形式は不規則であるとおもわれる。

#### 4.1.8 PL \*-u

C/K/G に共通して -u があらわれる形式には、PL \*-u を再構する。これまでにあげてきた語例には以下のようなものがある。

(4) ‘emerge’ PL \*pru; C pru, K pu, G pu; A/Se tu a-bu ‘dumb’; J pru<sup>33</sup>; PTB —

注 A/Se は tu ‘language’ + a- ‘negative.prefix-’ + bu ‘emerge’ と分析できるものとおもわれる。PTB \*s-pro-k COME OUT/EMERGE/BRING OUT (STEDT

<sup>注70</sup> 本稿では K/G の母音を参考に PL \*-ey をたてた。しかし、C の母音を参考にすれば、PL \*-iy を再構しうる。頭子音が相補分布しているので、PL \*-ay と再構できる可能性もある。いずれの再構がより妥当であるかは、今後の課題とする。

#2573) もおそらく関係している。

- (7) ‘horse’ PL \*s<sup>h</sup>-pu-k; C (məráj), K s<sup>h</sup>əpù, G s<sup>h</sup>əpùʔ; A/Se shuruk; PS \*sapu; PTB

—  
注 C はマルマ語からの借用。アラカンの Sak については Hodgson [1853: 5] に sapú という形式が記録されている。そこで PL \*s-pu を再構する。Maring sapuk (STEDT Database)。

- (55) ‘language’ PL \*tu; C tú, K tú, G (təpáʔká); A/Se tu a-bu ‘dumb’; PS \*tu; PKC \*thuu (STEDT #4371)

注 A/Se は tu ‘language’ + a- ‘negative.prefix-’ + bu ‘emerge’ と分析できるものとおもわれる。

- (74) ‘dig’ PL \*thu; C t<sup>h</sup>u, K t<sup>h</sup>u, G t<sup>h</sup>u; J thu<sup>31</sup>; PTB \*tu ≈ \*s/m-du (STEDT #3573)

- (83) ‘burn/roast’ PL \*cu; C cu, K su, G su; J tʃu<sup>31</sup>; PTK \*cow (STEDT #6828)

- (103) ‘bird’ PL \*u-jík-sa < \*u-cík-saʔ; C ʔusi, K ʔusiʔs<sup>h</sup>à ~ ʔusiʔs<sup>h</sup>â, G ʔusiʔs<sup>h</sup>à; A/Se ujiksa; J u<sup>31</sup>; PS \*-cik-ʔ; PTB \*wu (STEDT #301)

- (105) ‘mushroom’ PL \*k-mú; C kə múkaiŋ, K kə mú, G kúʔmú; J kã<sup>33</sup>mu<sup>33</sup>; PTB \*g-muw = \*g-məw (STEDT #2472)

- (208) ‘burn’ PL \*hru < \*khru; C hru, K hu, G hu; A/Se hu; J khʒu<sup>31</sup>; PTB —

- (222) ‘potato’ PL \*h-ráŋ-húʔ; C ráŋhú, K háŋmú ‘yam?’, G háŋŋú ‘yam?’, A/Se nlanghu ‘yam’; PTB —

注 A/Se の形式を考慮すると、PL \*hláŋ-hú というような形式が想定できるかもしれない。

- (261) ‘cock’ PL \*u-la; C ʔula, K ʔula, G ʔula; J u<sup>31</sup>la<sup>31</sup>; PTB —

- (263) ‘get’ PL \*lu; C lu, K lu, G lu; J lu<sup>31</sup>; PTB —

- (282) ‘watch’ PL \*yu; C yu, K yu, G yu; J ju<sup>33</sup>; PTB —

- (290) ‘rot’ PL \*Cú; C bú, K kəpú, G mú; J phu<sup>33</sup>; PTB —

注 ‘rot’ PTB \*m-bup (HPTB) は韻母があわない。

このほかに、(304) ~ (305) のような例が確認されている。

(304) ‘drink’ PL \*u; C ʔu, K ʔu, G ʔu; A/Se u; PS \*u; PTB —

(305) ‘fowl’ PL \*u; C ʔu, K ʔu, G ʔu; A/Se u; J u<sup>31</sup>; PS \*wu; PTB \*wa ʔ wu (STEDT #1603)

C/A で対応するものとして (306) のようなものが確認されている。

(306) ‘banana’ PL \*ú-si; C cəʔúsi, K (s<sup>h</sup>ə̀là), G (s<sup>h</sup>ə̀là); A/Se usī; PS \*(ca)u; PTB —  
注 (87) ‘milk’ C cəʔú と関係があるかもしれない。

K/Se で共通するものに次の例がある。

(146) ‘=FUTURE’ PL \*=k/gú; C (=gá/=ká), K =ku, G (=ká); Se -gu; PTB —

C/K では ʔu- であるのに対し、G で ʔ- となっているものが一例確認されている。

(206) ‘crow’ PL \*u-há < \*u-khá; C ʔuhá, K ʔuhá, G ʔohá; A uha; J u<sup>31</sup>kha<sup>33</sup>; PTB \*ka-n (STEDT #2279: provisional)

注 C/K/A/J の (ʔ)u-、G ʔ- はいずれも「鳥」であることをしめす接頭辞的要素。

K/A -u に対して G -uʔ が対応しているものがある。かりに PL \*-u-k を再構する。

(269) ‘creeper’ PL \*lu-k; C (ʔárəkuʔ), K yəlu, G yəluʔ; A luhuk, Se (urī); PTB —  
注 C -kuʔ と A -huk は同源形式であるかもしれない。

#### 4.1.9 PL \*-uy

C -vu に対して K/G -i が対応するばあい、J を参考にして PL \*-uy を再構する。次の二例が確認されている。いずれも初頭子音が k- である。

(138) ‘dog’ PL \*kuy; C kvu, K ci, G ci; A/Se kī; J kui<sup>31</sup>; WrB {khwe:}, OB {khuy} [Nishi 1999: 39]; PS \*kui; PTB \*d-kwəy-n (STEDT #1764)

(139) ‘elephant’ PL \*kúy; C ʔukvú ~ wvukvú, K ʔəcí, G ʔəcí; A/Se kī; J mā<sup>31</sup>kui<sup>33</sup>; PS \*-kui; PTB \*(m-)gwi(y) (STEDT #2257: provisional)

#### 4.1.10 PL \*-uw

C -vu に対して K/G -u が対応するばあい、PTB を参考にして PL \*-uw を再構する。次の六例が確認されている。

(27) ‘open (umbrella)’ PL \*phúw; C ʔəhvú, K p<sup>h</sup>ú, G p<sup>h</sup>ú; PTB —

注 PTB \*ʔ-bu ≍ \*pu BORN/BIRTH/BUD/BLOOM (STEDT #1811) と関係している可能性がある。K/G には ‘wear’ という意味もあり、J pu<sup>31</sup> や PTB \*bu(w) (STEDT #2180) に対応する。

(28) ‘snake’ PL \*k-phúw; C kəhví, K kəp<sup>h</sup>ú, G kəp<sup>h</sup>ú; A kuphu; J lá<sup>33</sup>pu<sup>33</sup>; PS \*kaphu; PTB \*bəw (STEDT #2178)

注 (23) ‘lizard’ と語家族をなすとおもわれる。

(75) ‘grind’ PL \*thuw; C t<sup>h</sup>vu, K t<sup>h</sup>u, G t<sup>h</sup>u; PTB —

(94) ‘dub/strike’ PL \*cuw; C cvu, K —, G sú; WrB {thV:}; PTB —

(117) ‘steal’ PL \*kuw-k; C kvu, K ku, G kuʔ; A/Se kuk; J lá<sup>31</sup>ku<sup>55</sup>; WrB {khV:}; PTB \*r-kuw = \*r-kəw (STEDT #2365)

(118) ‘bathe’ PL \*krúw; C krví, K kú, G kú; J khɜt<sup>31</sup> ‘wash’; WrB {khyV:}, OB {khluiw} [Nishi 1999: 1] ; PTB \*kruw = \*krəw (STEDT #2344)

C -vu に対して A/Se -u が対応するばあいも、PTB を参考にして PL \*-uw を再構する。次の二例が確認されている。

(56) ‘knee’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C ʔátəhví, K (tə<sup>h</sup>u), G (tuʔt<sup>h</sup>u); A tankhu, Se takhu; J lá<sup>31</sup>phut<sup>31</sup>; PTB \*(m)ku(:)((k/ŋ)) (STEDT #1251: provisional)

(57) ‘nine’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C təhví, K (kàʔ), G (kò); A/Se tuhu; J tǎ<sup>31</sup>khu<sup>31</sup>; WrB {kV:}; PS \*taku; PTB \*d-kuw = \*d-kəw ~ \*d-gew (STEDT #2364)

注 K/G は Shan kaw<sup>3</sup> からの借用語。

C -vu に対して K -u、G -uʔ、A/Se -uk が対応する例がある。ここでは PL \*-uw-k と再構しておく。次の二例が確認されている。

(71) ‘porcupine’ PL \*p/k<sup>h</sup>-duw-k; C pədvu, K kətùsipáuw, G kətùʔ; A/Se kutuk; J tu<sup>55</sup>; PTB —

(112) ‘rat’ PL \*k<sup>h</sup>-yuw-k; C kəyvu, K kəyù, G cùʔ; A/Se kuyuk; J ju<sup>55</sup>; PTB \*b-yəw-n (STEDT #2796), PKC \*yuu (STEDT #2796)

#### 4.1.11 PL \*-o

C -o vs. K/G -o という対応がみられる形式には、PL として \*-o を再構する。ただし、適当な例は (307) しか確認されていない。

(307) ‘call’ PL \*k-o; C ʔo, K kə, G kə; J kau<sup>33</sup>; WrB {kho’}; PTB \*gaw (STEDT #2235)

C/A(/Se) に共通して-o があらわれる形式にも、PL \*-o を再構しておく。

(129) ‘bamboo’ PL \*kro; C kro, K (ləpouʔ), G (təpəuʔ); A ko, Se koa; J kǎ<sup>55</sup>wa<sup>55</sup>; WrB {waa}; PS \*krua; PTB \*g-pwa (STEDT #2549)

(218) ‘boat’ PL \*hó; C hó, K həlí, G (le); A/Se ho; J (li<sup>33</sup>); WrB ({lhe}); PTB —  
注 Shan hio<sup>4</sup> と関係があるかもしれない。

C は接頭辞化しているけれども、K/G に-o がのこる例が一例確認されている。

(226) ‘water leech’ PL \*C<sup>H</sup>-mo; C məyúʔ, K m̀, G m̀; M hgyǒ, WrB {mhyo.}; PTB —

注 ビルマ語の形式から判断すると、PTB で接頭辞 \*s<sup>H</sup>-があった可能性がある。  
C では PL の主音節が接頭辞としてのみのこっている。

G-o に対して A/Se -o が対応するものにも PL \*-o を再構しておく。

(252) ‘push’ PL \*C<sup>H</sup>-no < \*C<sup>H</sup>-norʔ; C —, K —, G ǹ; A/Se no; PCC \*nor (STEDT #4805: provisional)

#### 4.1.12 PL \*-oy

C -u に対して K -ε、G -ε/e が対応するばあい、J/A を参考にして PL \*-oy を再構する。次の四例が確認されている。

(23) ‘lizard’ PL \*k-phóy; C kəp<sup>h</sup>ú, K kəp<sup>h</sup>é, G kəp<sup>h</sup>é; PTB —

注 (28) ‘snake’ と語家族をなすとおもわれる。

(111) ‘monkey’ PL \*k-wóy; C kəvú, K kwé, G kwé; A koì; J woi<sup>33</sup>; PS \*kawoi; PTB \*b/d/g-woy-n (STEDT #2782)

(200) ‘raise/bring up’ PL \*hroy; C hrú, K hé, G hé ‘be born’; Se pung he ‘lift up’; PTB —

注 PTB \*hu BORN/BIRTH/REAR (STEDT #97) も同源形式かもしれないけれども、介子音も母音も対応しない。

(209) ‘borrow’ PL \*hoy < \*khoy; C hu, K hε, G he-kam; J khoi<sup>31</sup>; WrB {khye.}, OB {khiy} [Nishi 1999: 102] ; PTB s-kəy (STEDT #2314)

## 4.1.13 PL \*-ow

C/K -u に対して G -o が対応する例がある。本稿ではかりに PL \*-ow を再構する。次のような例がある。

(54) ‘hand’ PL \*t-hów < \*t-khów < \*tak-khów; C tǎhú, K tǎhú, G t<sup>h</sup>ɔ; A takhu, Se tahu; J (ta<sup>ʔ</sup>55, lǎ<sup>31</sup>ta<sup>ʔ</sup>55); PS \*takʔu; PTB \*k(r)ut (STEDT #712: provisional)

(116) ‘dry’ PL \*r-ków; C rǎkú, K ʔǎkú, G kó; PTB —

(216) ‘CL:man’ PL \*hów < \*khów; C hú, K hò, hú, G hò, hó; PTB —

注 (214) ‘head’ と同源。

(217) ‘hair (head)’ PL \*hów < \*khów; C ʔahúmiŋ, K həláŋhú, G hó; A/Se humī; J kǎ<sup>55</sup>ʒa<sup>55</sup>; PS \*kʔu-mi; PTB \*s-pu (STEDT #1228: provisional)

(216) ‘CL:man’ や (217) ‘hair (head)’ と語家族をなす (214) は、G -o があらわれていないけれども、同様に PL \*-ow を再構しておく。

(214) ‘head’ PL \*hów < \*khów; C ʔahú, K (həláŋ), G (həláŋhùʔ); A/Se huɾaŋ; J kha<sup>ʔ</sup>31khu<sup>55</sup> ‘upstream’; PS \*khu; PTB \*m/s-gaw (STEDT #386)

注 K/G にみられる hə- は PL \*hów が弱化した形式にみえるかもしれない。しかし、K/G の形式はむしろ ‘sky’ háŋ に接中辞 -l- がはいつた形式と推定される。

## 4.2 閉音節

## 4.2.1 閉鎖音

## 4.2.1.1 PL \*-ap

C -aʔ に対して K/G -ap が対応するばあい、PL \*-ap を再構する。次にしめす七例が確認されている。

(40) ‘leaf’ PL \*tap; C ʔátaʔ, K tǎlap ~ tǎtap, G tǎlap; A/Se tatap; J lap<sup>31</sup>; PS \*-tap; PTB \*s-lap (STEDT #824)

注 PTB の形式は \*l → t の条件にあっているけれども [馬提索夫 2006]、PL では接頭辞として \*s- を想定する根拠がない。なお K/G にみられる -l- は接中辞であるという [Sangdong 2012: 158–160]。

(84) ‘chilly’ PL \*C<sup>h</sup>-cap; C caʔ, K sàp, G sàp; J tfap<sup>31</sup>; WrB {cap’}; PTB —

注 K/G が低声調であらわれているので、通時的には高声調の要素が先行していたと推定される。

- (97) ‘stand’ PL \*cap < \*ryap; C caʔ, K sap, G sap; A/Se chap; J tsap<sup>55</sup>; PS \*cap; PTB \*g-ryap (STEDT #145)
- (210) ‘cry/weep’ PL \*hrap < \*khrap; C hraʔ, K hap, G hap; A/Se hlap; J khzap<sup>31</sup>; PTB \*krap (STEDT #1103)
- (283) ‘fan (v)’ PL \*yap; C yaʔ, K yap, G yap; J kǎ<sup>31</sup>tsap<sup>31</sup> ‘winnow’; WrB {yap’}; PTB \*g-ya:p (STEDT #2790)
- (284) ‘fan (n)’ PL \*C<sup>H</sup>-yap; C kəyaʔ, K həyàp, G həyàp; WrB {yap’}; PTB \*g-ya:p (STEDT #2790)
- (286) ‘cross (river)’ PL \*Cap; C raʔ, K yap, G lap; J zap<sup>55</sup>; PTB —

K/G/A/Se で-ap が共通するものとして次の例がある。

- (188) ‘bear’ PL \*k<sup>H</sup>-sap; C (lúwainj), K kəs<sup>h</sup>àp, G K kəs<sup>h</sup>àp; A/Se sɔpmo; J tsap<sup>55</sup>; PTB —
- (250) ‘next/coming’ PL \*nap; C —, K napniŋ ‘next year’, G ʔənap ‘next year’; A nɔp, Se nap; PTB —

K/G -ap に Se -ɔp が対応するものにも PL \*-ap を再構する。

- (137) ‘shoot’ PL \*káp; C —, K káp, G káp; Se kɔp sī ‘kill’; J kap<sup>31</sup>; PTB \*ga:p (STEDT #2232)

#### 4.2.1.2 PL \*-at

C -aiʔ に対して K/G -at が対応するばあい、PL \*-at を再構する。次にしめす五例が確認されている。

- (110) ‘root’ PL \*k-rat; C ʔákraiʔ, K təklat, G təkát; A (kaké), Se (taha); PTB —  
注 K の形式は接中辞-l-がはいった形式と推定される。
- (120) ‘run/flee’ PL \*kat; C kaiʔ, K kat, G kat; A/Se kat; J kat<sup>31</sup>; PTB \*gan ∅ \*k(y)at (STEDT #6705)
- (162) ‘husked rice’ PL \*sat; C kvúsaiʔ, K ʔəs<sup>h</sup>at, G ʔəs<sup>h</sup>at; A hwīsát ‘rice’, Se usat ‘rice’; J jat<sup>31</sup> ‘cooked.rice’; PS \*-sat; PTB —

注 J jat<sup>31</sup> は ja<sup>55</sup> ‘cat’ に名詞化接尾辞-t がついたものであるという [Matisoff 2003: 454, 倉部 2011: 20]。ルイ語群の形式にも、同様の可能性がある。

(166) ‘get down/descend’ PL \*sat; C saiʔ, K s<sup>h</sup>at, G s<sup>h</sup>at; PTB —

(227) ‘forget’ PL \*mat; C maiʔ, K mat, G mat; J mat<sup>31</sup> ‘lose’; PTB \*ma-t (DPTB #79)

C -aiʔ に対して A/Se -at が対応する例も類例とかがえてよい。次の例がある。

(98) ‘eight’ PL \*cat < \*ryat; C ʔácaiʔ, K (pət), G (pət); A/Se chat; J mā<sup>31</sup>tsat<sup>55</sup>; WrB {rhac’}, OB {yhat, rhac, rhec} [Nishi 1999: 38] ; PS \*cat; PTB \*b-r-gyat = \*(b-)g-ryat (STEDT #2259)

注 K/G は Shan pət<sup>2</sup> からの借用語。

C -aiʔ に対して K -at、G -ət が対応する例がある。PL \*-at あるいは PL \*-it が再構しうるものとかんがえる。次の例がある。

(272) ‘shave’ PL \*rat/ritʔ; C raiʔ, K yat, G yet; PTB \*rit (STEDT #2615)

C -aiʔ に対して K -ət、G -at が対応する例がある。この例も PL \*-at あるいは PL \*-it が再構しうるものとかんがえる。次の例がある。

(41) ‘listen’ PL \*tát/títʔ; C táiʔ ‘hear’, K tét, G tát; A/Se tat ‘hear’; J mā<sup>31</sup>tat<sup>31</sup>; PTB \*s-ta-s ≈ \*ta-n (STEDT #1408)

(163) ‘scatter’ PL \*sát/sítʔ; C táiʔ, K s<sup>h</sup>ét, G s<sup>h</sup>át; PTB \*sywar ≈ \*g/b-sywa-n/t (STEDT #2680)

#### 4.2.1.3 PL \*-ak

C -aʔ に対して K/G -aʔ が対応するばあい、PL \*-ak を再構する<sup>注71</sup>。次にしめす例が確認されている。

(5) ‘vagina’ PL \*pak; C ʔápaʔ, K paʔ, G paʔ; PTB —

注 PTB \*b(y)at (STEDT #662) は韻母があわない。Usoi Tripura ʃipauʔ も同源とおもわれる。

<sup>注71</sup> C/K/G で共通して -aʔ であるから、PL \*-aʔ とすべきかもしれない。しかし PL \*-ap や \*-at があることを考慮すると、PL \*-ak をたてたほうが体系的である。ほかの類例も同様の理由で PL \*-ik、\*-uk、\*-ok などを再構する。

- (10) ‘palm’ PL \*tak-prár; C taʔpráinj, K taʔpá, G taʔpá; J lä<sup>31</sup>phan<sup>31</sup>; PKC \*baar (STEDT #4027: provisional)  
 注 PL \*tak-は (44) ‘finger’, (45) ‘nail’ と共通する。
- (42) ‘weave’ PL \*tak; C taʔ, K taʔ, G taʔ; J taʔ<sup>31</sup>; PTB \*tak = \*trak (STEDT #2686)
- (43) ‘lick’ PL \*á-tak; C ʔátaʔ, K tàʔ ~ ʔətàʔ, G tàʔ; J mǎ<sup>31</sup>taʔ<sup>55</sup>; PTB m-lyak ≅ \*s-lyak ≅ \*g-lyak (STEDT #629)
- (44) ‘finger’ PL \*tak-sirʔ; C taʔfiʔ, K taʔçi, G tʰoklat; A (takhutol), Se (khutpang); PTB \*si ≅ \*ser ≅ \*sor (STEDT #324: provisional)  
 注 PL \*tak-は (10) ‘palm’, (45) ‘nail’ と共通する。(54) ‘hand’ にみられる tə- は PL \*tak が弱化した形式と推定される。C -iʔ に K -i が対応することから、PTB も考慮すると PL では語末に -ir があった可能性がある。類例には (155) ‘tongue’ もかんがえられる。
- (45) ‘nail’ PL \*tak-miŋ < \*tak-minʔ; C taʔmiŋ, K taʔmiŋ, G taʔmiŋ; A/Se takmeng; J lä<sup>31</sup>mjin<sup>33</sup>; PTB \*min ~ \*myen (STEDT #513: provisional)  
 注 PL \*tak-は (10) ‘palm’, (44) ‘finger’ と共通する。
- (93) ‘Cak/Sak’ PL \*cak; C ʔácaʔ, K ʔəsàʔ, G —; WrB ({sakʔ}); PS \*cak; PTB —  
 注 PBG \*sak ‘CL:man’ [Wood 2008: 72] が関係している可能性がある。
- (99) ‘fear’ PL \*C<sup>h</sup>-cak < \*g<sup>h</sup>-rakʔ; C ʔácaʔ, K sàʔ, G kəsàʔ; A/Se achak; PTB —  
 注 PTB \*k/grok ≅ \*k/grak FEAR/FRIGHTEN (STEDT #2249) が関係している可能性がある。
- (121) ‘want to do’ PL \*kak; C kaʔ, K kaʔ, G kaʔ; PTB —  
 注 PLB \*r-ga ≅ \*N-ga ≅ \*d-ga ≅ \*s-ga COPULATE/LOVE/WANT (STEDT #1646) と関係があるかもしれない。
- (154) ‘shout’ PL \*khyák; C jáʔ, K háʔ, G háʔ; PTB —
- (164) ‘take a rest’ PL \*sak; C saʔ, K s<sup>h</sup>aʔ, G s<sup>h</sup>aʔ; J saʔ<sup>55</sup>; PTB —
- (165) ‘breath’ PL \*sak; C svusaʔ kɨŋ, K ʔəs<sup>h</sup>áʔ s<sup>h</sup>án, G s<sup>h</sup>aʔs<sup>h</sup>án; J n<sup>31</sup>saʔ<sup>31</sup>; PTB \*N-sak (STEDT #32)
- (243) ‘night’ PL \*nak; C naʔtaiʔ, K naʔce, G naŋki; A/Se sanak; J jǎ<sup>31</sup>naʔ<sup>55</sup>; PS \*-nat-ʔ; PTB \*s-nak BLACK (STEDT #2483)

- (259) ‘drive/chase’ PL \*r<sup>h</sup>-ɲak; C rənaʔ, K ɲàʔ, G ɲàʔ; PTB —
- (264) ‘skin’ PL \*lák; C ʔaláʔ, K láʔk<sup>h</sup>áuʔ, s<sup>h</sup>əlè, G láʔk<sup>h</sup>áuʔ; A laho, Se lakra:k; PS \*-lakʔ; PTB \*lak (STEDT #602: provisional)
- (277) ‘pig’ PL \*wak; C vaʔ, K waʔ, G waʔ; A/Se wak; J waʔ<sup>31</sup>; WrB {wak’}; PS \*wak; PTB \*p-wak (STEDT #1006)
- (278) ‘wide’ PL \*wák; C váʔ, K wáʔ, G wáʔ; PTB —
- (285) ‘CL:day’ PL \*yak; C yaʔ, K yaʔ, G yaʔ; A (chamīt); J jaʔ<sup>55</sup>; PS \*ya-; PTB \*s-r(y)ak (STEDT #2636)
- (289) ‘=PLURAL (+n)’ PL \*Cak; C =raʔ, K =taʔ, G =laʔ; PTB —  
 注 Tripura rauʔ (STEDT Database) も同源とおもわれる。

K/G/A で共通するものとして次の例がある。

- (95) ‘hard/solid’ PL \*C<sup>h</sup>-cak; C —, K ʔəsàʔ, G sàʔ; A chak; J tʃaʔ<sup>31</sup>; PTB \*tsak-t (STEDT #186: provisional)

K/G/A/Se で共通するものとして次の例がある。

- (294) ‘broad’ PL \*Cák; C —, K páʔ, G máʔ; A/Se paktong; PTB —  
 注 A/Se tong は (62) ‘big/great’ とおなじ。

C/K -aʔ に対して G -a が対応する例として次の一例が確認されている。

- (207) ‘branch/twig’ PL \*C<sup>h</sup>-ha-k < \*C<sup>h</sup>-kha-k; C ʔáhaʔ, K həlàʔ, G hà; A/Se (musa); M ʔəkhaʔ; PTB \*s-ka(:)k (STEDT #1278)  
 注 C/K/G の証拠からだけでは PL の接頭辞を決定することはできない。しかし PTB も参考にすれば、おそらくは\*s<sup>h</sup>-を再構しうる。

#### 4.2.1.4 PL \*-ip

C -iʔ に対して K -ep、G -ep が対応する例がある。K/G では-ip はほぼ借用語にのみあらわれるので、PL \*-ip を再構する。次にしめす二例が確認されている。

- (33) ‘turtle’ PL \*t<sup>h</sup>-lip; C təliʔ, K tələp, G tələp; WrB {lip’}; PTB —
- (297) ‘wrap’ PL \*Cip; C diʔ, K tep, G lep; PTB —

このほかに、(308) のような例が確認されている。

(308) ‘sleep’ PL \*ip; C ʔiʔ, K ʔep, G ʔep; A eksum, Se īsum; J jup<sup>55</sup>; WrB {@ip’};  
PTB \*s-yip ≍ s-yup (STEDT #127)

(184) や (235) は (308) と語家族をなすと推定される。

(184) ‘feel sleepy’ PL \*ip-simʔ < \*ip-syumʔ; C ʔiʔsiŋ, K —, G ʔeps<sup>h</sup>um; A eksum  
‘sleep’, Se īsum ‘sleep’; PTB —

(235) ‘dream (n)’ PL \*ip-maj; C ʔiʔmaj, K ʔepmaj, G ʔemaj; J jup<sup>31</sup>maj<sup>33</sup>; PTB  
\*(s/r)-ma((ŋ/k)) (STEDT #126)

注 G で-p があらわれていないのは、後続する m-の影響とおもわれる。

C -iʔ に対して K/G が-ip が対応しているようにみえる例として、次の例がある。ただし、頭子音や声調がうまく対応しないので、同源形式とはいえないかもしれない。

(296) ‘cockroach’ PL \*s-Cípʔ; C sidíʔ, K s<sup>h</sup>əlíp, G s<sup>h</sup>əlíp; PTB —

#### 4.2.1.5 PL \*-it

C -iʔ に対して K -et、G -et が対応する例がある。K/G では-it はほぼ借用語にのみあらわれるので、PL \*-it を再構する。次にしめす一例が確認されている。

(228) ‘extinguish’ PL \*mit; C səmiʔ, K ləmet, G mət; J ʃǎ<sup>31</sup>mjit<sup>55</sup>; PTB \*s-mi:n ≍ \*s-mi:t (STEDT #31)

注 K ləmet の接頭辞 lə- は la ‘take’ に由来し、語根を他動詞化する。

K -et なので PL \*-it を再構しうるものとして次のものがある。

(60) ‘bow’ PL \*t<sup>h</sup>-li(t/k)?; C (leháʔ), K təlèt (~ təlèiʔ), G (təlìʔ); A/Se tīrīt; J  
(kuŋ<sup>33</sup>li<sup>33</sup>); WrB ({le:}); PTB (\*d/s-ləy (STEDT #2411))

注 PL の韻母が\*-it か\*-ik かを決定できない。本稿ではかりに PL \*-i(t/k) としている。

#### 4.2.1.6 PL \*-ik

C/K/G において共通して-iʔ があらわれる形式には、PL として\*-ik を再構する。次の四例が確認されている。

- (6) ‘mosquito’ PL \*p-cík; C pəcíʔ, K pəsíʔsáuʔ, G pəsíʔ; A/Se pu; J tʃiʔ<sup>31</sup>kʒoŋ<sup>31</sup>, tʃiʔ<sup>31</sup>nu<sup>31</sup> ‘fly (n)’, mə<sup>55</sup>tʃi<sup>51</sup> ‘fly (n)’; PS \*puʔ-chitʔ; PTB —
- (38) ‘ankle’ PL \*ta-mík; C ʔátəmíʔ, K tamiʔtù, G tamiʔtù; A (khujeng), Se tɔmīt; PTB —
- 注 (37) ‘foot’ PL \*ta と (229) ‘eye’ PL \*mík からなる複合語。
- (82) ‘sun’ PL \*c-mík; C cə míʔ, K sə míʔ, G sə míʔ; A/Se chamīt; J tʃan<sup>33</sup>; PS \*camit; PTB \*tsyar (STEDT #2753)
- (229) ‘eye’ PL \*mík; C ʔamiʔ, K míʔtù, G míʔtù; A/Se mīt; J mjiʔ<sup>31</sup>; WrB {myak’ci}; PTB \*s-mik (STEDT #682)

K/G/A/Se で共通するものとして次の二例がある。

- (103) ‘bird’ PL \*u-jík-sa < \*u-cík-saʔ; C (ʔusi), K ʔusiʔs<sup>h</sup>à ~ ʔusiʔs<sup>h</sup>à, G ʔusiʔs<sup>h</sup>à; A/Se ujiksa; J (u<sup>31</sup>); PS \*-cik-ʔ; PTB \*wu (STEDT #301)
- (249) ‘heavy’ PL \*C<sup>h</sup>-ni(ŋ/k); C (ʔániŋ), K nèiʔ, G niʔ; A/Se nik; PTB —
- 注 C と K/G/A/Se で語末子音の対応が不規則。PTB \*s-na:ŋ HEAVY/THICK (of liquids)/VISCOUS (STEDT #698: provisional) が関係しているかもしれない。

G/A/Se で共通するものとして次の例がある。

- (65) ‘man’ PL \*C<sup>h</sup>-tik-(sa); C (lú), K (təmis<sup>h</sup>a), G tìʔs<sup>h</sup>a; A tıksahora, Se tıkhora; PTB —

G/Se で共通するものとして次の例がある。

- (104) ‘cat’ PL \*hán-ji-k < \*hál-ji-kʔ < \*hál-ci-kʔ; C (háin), K (hancí), G hánsiʔ; A (hɔnggen), Se hɔljik; PS \*hal; PTB —

C/G -iʔ に対して K -eiʔ が対応する例がある。C/K/G において共通して -iʔ があらわれる形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで、ここでも PL \*-ik を再構する。次にしめす一例が確認されている。

- (167) ‘louse’ PL \*sik; C siʔ, K s<sup>h</sup>eiʔ, G s<sup>h</sup>iʔkə; J tsj<sup>55</sup>; PTB \*s-r(y)ik (STEDT #2609)

C -iʔ に対して K/G -eiʔ が対応する例がある。C/K/G において共通して -iʔ があらわれる形式および C/G -iʔ に対して K -eiʔ が対応する形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで、ここでも PL \*-ik を再構する。次の二例が確認されている。

(46) ‘pot’ PL \*tik; C tiʔ, K teiʔci, G teiʔs<sup>h</sup>i; J tiʔ<sup>31</sup>pu<sup>33</sup>; PTB —

(158) ‘daughter’ PL \*s-ik; C ʔásəʔiʔ, K s<sup>h</sup>əʔeiʔ, G s<sup>h</sup>eiʔ; J ʃa<sup>31</sup>ji<sup>33</sup>ʃa<sup>31</sup> ‘young woman’;  
PTB —

C/A/Se で共通するものとして次の例がある。

(187) ‘tobacco’ PL \*sík; C síʔk<sup>h</sup>əlíʔ, (səlíʔ), K (s<sup>h</sup>éleíʔ), G (s<sup>h</sup>əlíʔ); A/Se sík; PTB —  
注 C səlíʔ は声調の対応からすると M c<sup>h</sup>əloiʔ からの借用である可能性があるけれども、頭子音の対応からすると本来語である。K/G はビルマ語からの借用語。

K-eiʔ、G-iʔ があらわれる例は、PL \*-ik を再構しうる。

(60) ‘bow’ PL \*t<sup>h</sup>-li(t/k)?; C (leháʔ), K (təlèt ~) təlèiʔ, G təlìʔ; A/Se (tīrīt); J (kuŋ<sup>33</sup>li<sup>33</sup>); WrB ({le:}); PTB (\*d/s-ləy (STEDT #2411))

注 PL の韻母が\*-it か\*-ik かを決定できない。本稿ではかりに PL \*-i(t/k) としている。

さらに、(309) ~ (310) にしめす例が確認されている。(310) については、頭子音を決定できない。

(309) ‘wife’ PL \*ik; C ʔaʔiʔdá, K ʔeiʔ, G ʔeiʔ; PTB —

注 C と K/G では声調が対応しない。ただし、意味的にみても (158) ‘daughter’ と関係があり、‘female’ PL \*ik といった形式を再構しうる。

(310) ‘swidden’ PL \*Cik; C ʔiʔpra, K yeiʔ, G ŋeiʔ; J jiʔ<sup>55</sup>; WrB {yaa}, OB {rya}; PS \*iʔ; PTani \*ruuk (STEDT #6588)

#### 4.2.1.7 PL \*-ek

C/K/G において共通して-aiʔ があらわれる形式がある。(141) における A -ék を参考に、PL としてかりに\*-ek を再構する。次の二例が確認されている。

(141) ‘mango’ PL \*krék-si; C kráiʔsi, K caiʔci, G cáiʔs<sup>h</sup>i ~ céiʔs<sup>h</sup>i; A/Se kéksī; PTB —

(170) ‘tear (v)’ PL \*sék; C sáiʔ, K s<sup>h</sup>áiʔ, G s<sup>h</sup>áiʔ; A kong sek, Se tun sek; PTB —

注 Matisoff [2012: 38] は PTB \*dzyut ≍ \*dzyit (HPTB) をあげる。しかし、韻母があわない。

#### 4.2.1.8 PL \*-up

C-u? に対して K/G -up が対応するばあい、PL \*-up を再構する。次にしめす一例が確認されている。

(85) ‘suck’ PL \*cúp; C cú?, K súp, G súp; J tʃup<sup>31</sup>; PTB \*m-dzup (STEDT #76)

C-u? に対して K -op、G -ɔp が対応する例がある。(85) ‘suck’ と比較して、頭子音の分布がかさなっていない。そこで PL \*-up を再構する。次のような例がある。

(122) ‘warm oneself’ PL \*kup; C ku?, K kop, G kɔp; PTB —

(211) ‘astringent’ PL \*hup < \*khup; C hu?, K hop, G hɔp; J khup<sup>31</sup>; PTB —

K-op に対して G -ɔp、A/Se -up が対応する例についても、PL \*-up を再構する。

(251) ‘bury’ PL \*C<sup>H</sup>-nup; C —, K nòp, G nɔp; A/Se nup; J lup<sup>31</sup>; PTB \*klup (DPTB #138)

#### 4.2.1.9 PL \*-ut

C-u? に対して K -ot、G -ɔt が対応するばあい、PL \*-ut を再構する<sup>注72</sup>。次のような例がある。

(17) ‘ashes’ PL \*k-but; C taʔkəbuʔ, K kəpɔt, G kəpɔt; PTB —

注 \*hot (STEDT #3514: provisional) は声母も韻母もあわない。

(240) ‘play a flute’ PL \*mut; C muʔ, K mot, G —; J kǎ<sup>31</sup>wut<sup>31</sup> ‘blow’; PTB \*k/s-mut (STEDT #503)

#### 4.2.1.10 PL \*-uk

C-u? に対して K/G -ou? が対応するばあい、PL \*-uk を再構する。次の三例が確認されている。

(76) ‘arrive’ PL \*thuk; C t<sup>h</sup>uʔ, K t<sup>h</sup>ouʔ, G t<sup>h</sup>ouʔ; A/Se thok; J tu<sup>31</sup>; PTB —

(86) ‘plant (v)’ PL \*cuk; C cuʔ, K souʔ, G souʔ; PTB \*dzu[:]k (STEDT #2218)

<sup>注72</sup> K/G で-ut が共通するものは散見され、たとえば ‘edge (v)’ K/G nít という例がある。しかし、C もふくめて対応するとおもわれる例がみつかっていない。

(230) ‘cattle’ PL \*s-muk; C səmuʔ, K mouʔ, G mouʔ; A sok; PS \*samuk; PTK \*muk  
(STEDT #7137: provisional)

C -uʔ に対して K -ouʔ、G -auʔ が対応する例がある。C -uʔ に対して K/G が -ouʔ が対応する形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで PL \*-uk を再構しておく。これまでにあげた語例のなかでは、次の五例が確認されている。

(8) ‘hatch’ PL \*puk; C puʔ, K pouʔ, G pauʔ; PTB \*puk ≍ \*buk (STEDT #3488)

(70) ‘neck’ PL \*k<sup>h</sup>-duk; C ʔákəduʔ, K kətòuʔ, G kətàuʔ; A/Se kotok; J tuʔ<sup>31</sup>; PTB \*tuk  
≍ twak (STEDT #359)

(101) ‘deer’ PL \*k<sup>h</sup>-juk; C kəjuʔ, K —, G kəsàuʔ; J khji<sup>31</sup>tut<sup>55</sup>; PTB \*d-yuk (STEDT  
#2794)

(109) ‘frog’ PL \*k<sup>h</sup>-suk; C kəsʉʔ, K kəs<sup>h</sup>òuʔ, G kəs<sup>h</sup>àuʔ; J fuʔ<sup>31</sup>; PTB —

(168) ‘cough’ PL \*suk; C kruʔsuʔ, K cis<sup>h</sup>ouʔ s<sup>h</sup>ouʔ, G s<sup>h</sup>auʔs<sup>h</sup>auʔ; A/Se tinsok su; J  
(tjã<sup>31</sup>khɣu<sup>31</sup>); PST \*suk ≍ \*su(w) (STEDT #1794)

K -ouʔ に対して G -auʔ、A -ok が対応する例も、類例とおもわれる。

(87) ‘milk’ PL \*cuk-si; C (cəʔú), K souʔci, G sauʔs<sup>h</sup>i; A chokchoksi; PTB \*dzyuk  
(HPTB)

注 C ə- は PL \*cuk が弱化したものと推定される。

このほかに (311) のような例がある。

(311) ‘grandfather’ PL \*úk; C ʔaʔúʔ, K ʔouʔ<sup>注73</sup>, G ʔáuʔt<sup>h</sup>ò; PTB —

注 K の声調があわない。

C/G -uʔ に対して K -ouʔ が対応する例がある。(230) ‘cattle’ と分布が近似しており、主音節の頭子音が共通するという問題もあるけれども、本稿ではかりに PL \*-uk を再構しておく。次の二例が確認されている。

(224) ‘capsicum’ PL \*m-rukʔ; C məruʔ, K mouʔnɛci, G múʔ; A mosī, Se moksī; PTB  
—

注 C/K と G とで声調があわない。

<sup>注73</sup> Benedict [2008: 159] によると K ʔouʔ は Shan ok に由来する。

(231) ‘thunder/sky’ PL \*C<sup>H</sup>-muk; C kəmuʔ ‘thunder’, K həməuʔ ‘sky’, G həməuʔ ‘sky’;  
J muʔ<sup>55</sup> ‘thunder’; PTB \*r/s-mu:k [Matisoff 2012: 35]

C -uʔ に対して K/G -uʔ が対応する例がある。(230) ‘cattle’ や (231) ‘thunder/sky’ と分布が近似しており、主音節の頭子音が共通するという問題もあるけれども、本稿ではかりに PL \*-uk を再構しておく。次の一例が確認されている。

(232) ‘under/below’ PL \*múkʔ; C ʔámuʔ, K həmúʔ ~ kəməúʔ, G həməúʔ; PTB —

注 C と K/G で声調があわない。さらに韻母の対応も不規則。同源形式とはいえないかもしれない。

C -uʔ に対して K -ouʔ、G -oʔ が対応する例がある。C -uʔ に対して K/G が -ouʔ が対応する形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで PL \*-uk を再構しておく。次のような例がある。

(257) ‘bend down’ PL \*C<sup>H</sup>-ŋuk; C ŋuʔ, K ŋòuʔ, G ŋòʔ; PTB —

C -uʔ に対して A/Se -ok が対応する例がある。J や PTB の形式も参考にし、PL \*-uk を再構しておく。次の一例が確認されている。

(130) ‘six’ PL \*kruk; C kruʔ, K (houʔ), G (houʔ); A/Se kok; J kʒuʔ<sup>55</sup>; PS kruk; PTB  
\*d-ruk (STEDT #2621)

注 K/G は Shan hok<sup>4</sup> からの借用語。

#### 4.2.1.11 PL \*-ikʔ < \*-yukʔ

C -iʔ に対して K/G -uʔ が対応する例が、次にあげる二例確認されている。かりに PL \*-ik を再構する<sup>注74</sup>。

(9) ‘belly’ PL \*píkʔ < \*pyúkʔ; C ʔapíʔ, K púʔ, G púʔ; A/Se puk; J pu<sup>31</sup> ‘intestine’;  
WrB {bVkʔ}; PS \*pük; PTB \*s-bu-k (STEDT #258)

(169) ‘shrimp’ PL \*r-i-síkʔ < \*r-i-syúkʔ; C ʔisíʔ, K ʔis<sup>h</sup>úʔ, G ʔis<sup>h</sup>úʔ; PTB —

注 K の声調が対応しない。

<sup>注74</sup> 開音節で PL \*-i と再構しうる例が確認されていないにもかかわらず、閉音節で PL \*-ik を再構することは不自然におもわれる。なんらかの母音の前後に y が介在している可能性がある。4.2.2.11 PL \*-imʔ < \*-yumʔ を参考にすれば、ここでも PL \*-yukʔ と再構できる可能性がある。

#### 4.2.1.12 PL \*-op

C -oʔ に対して G -op が対応する例がある。PL \*-op を再構する。次のような例がある。

(183) ‘search for’ PL \*sóp; C ʔasóʔ, K —, G s<sup>h</sup>óp; PTB —

#### 4.2.1.13 PL \*-ot

C -oʔ に対して K -ot が対応しているようにみえる例がある。ここでも、かりに PL \*-ot を再構する<sup>注75</sup>。

(293) ‘bubble’ PL \*Cót; C ʔasəðóʔ, K s<sup>h</sup>əpót, G —; PTB —

#### 4.2.1.14 PL \*-ok

C -oʔ に対して K/G が -auʔ が対応するばあい、PL \*-ok を再構する。次のような例が確認されている。

(77) ‘spit (v)’ PL \*thók; C t<sup>h</sup>óʔ, K t<sup>h</sup>áuʔ, G t<sup>h</sup>áuʔ; J mǎ<sup>31</sup>tho<sup>55</sup>; PTB \*m-tu(:)k ≍ \*s-t/du(:)k (STEDT #601)

(123) ‘wear a bracelet’ PL \*kók; C kóʔ, K káuʔ, G káuʔ; PTB —

C -o に対して K/G が -auʔ が対応する例が一例確認されている。

(22) ‘jump’ PL \*phró-k; C p<sup>h</sup>ró, K p<sup>h</sup>áuʔ, G p<sup>h</sup>áuʔ; A/Se phok; PTB \*p(r)ok (STEDT #6707: provisional)

C -oʔ に対して K -auʔ、A/Se -ok が対応する例が一例確認されている。

(219) ‘husk of rice’ PL \*hók < PL \*khók?; C yáʔhóʔ, K yəháuʔ, G (?amláʔk<sup>h</sup>áuʔ); A/Se ɪhok; J (num<sup>55</sup>kho<sup>55</sup>); PTB —

注 J の形式を考慮すると PL \*khók と再構できる可能性がある。

このほかに、C/G で対応するものとして (312) のような例が確認されている。

(312) ‘open’ PL \*ók; C məʔóʔ, K —, G ʔáuʔ; PTB —

<sup>注75</sup> K -ot に対して G -ot が対応するものは散見され、たとえば ‘bore (v)’ K hot, G hot という例がある。しかし、C もふくめて対応するとおもわれる例がみつかっていない。

K/G -au? に対して A/Se -ok が対応するものについても、PL \*-ok を再構する。次の一例が確認されている。

- (15) ‘calf (of leg)’ PL \*t-pók; C (ʔátasəlún̄sa), K təpáuʔ, G təpáuʔhənnəs<sup>h</sup>i; A/Se tanpok; PTB —

C -o? に対して K -au?, G -ou? が対応している例がある。C -o? に対して K/G が -au? が対応する形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで、ここでも PL \*-ok を再構しておく。次のような例がある。

- (88) ‘long/tall’ PL \*cók; C cóʔ, K sáuʔ, G sóuʔ; A chok ‘high’; M cəʔ; PTB —

注 C は M からの借用語である可能性もたかい。

次の例では C で韻母が弱化しているけれども、K -au? に対して G -ou? が対応しており、A/Se -ok でもあるので、PL \*-ok を再構しうる。

- (291) ‘eggplant’ PL \*Cok; C bəʔóŋsi, K pauʔpəci, G mouʔsaps<sup>h</sup>i; A/Se mokminsī; PKC \*bok-boon ≈ \*buk-bu (STEDT #4010)

C -o? に Se -ak が対応する例が一例確認されている。かりに PL \*-ok を再構しておく。

- (132) ‘firewood’ PL \*k-rók; C kəróʔ, K (p<sup>h</sup>ón), G (p<sup>h</sup>ón); A (phol ‘wood’), Se karak; PTB —

## 4.2.2 鼻音

### 4.2.2.1 PL \*-am

C -aŋ vs. K/G -am という対応がみられる形式には、PL として \*-am を再構する。これまでにあげてきた語例のなかでは、次のような例が確認されている。

- (244) ‘daughter-in-law’ PL \*nám; C ʔanáŋ, K nám, G nám; J nam<sup>33</sup>; PS \*nàm; PTB \*s-nam (STEDT #2486)

- (245) ‘smell (v)’ PL \*nám; C náŋ, K nám, G nám; A (nam to)<sup>注76</sup>, Se nam; J mǎ<sup>31</sup>nam<sup>55</sup>; PTB \*m/s-nam (STEDT #1415)

- (265) ‘road’ PL \*lám; C láŋ, K lám, G lám; A lam je ‘far’, Se lam ja ‘far’; J lam<sup>33</sup>; WrB {lamː}; PS \*lam; PTB \*lam (STEDT #1017)

<sup>注76</sup> この語形については注 55 を参照。

K/G/A/Se で共通するものとして、次の例がある。

- (81) ‘near’ PL \*tham; C (cu), K t<sup>h</sup>am, G t<sup>h</sup>am; A tham, Se tham; J (ni<sup>31</sup>); PTB —  
 (134) ‘beautiful’ PL \*C<sup>h</sup>-kam; C (kəpáŋ), K kətám, G klám; A kam ‘handsome’, kám  
 ‘good’, Se kám ‘handsome’; PTB —

K/G/Se で共通するものとして、次の例がある。

- (63) ‘search/seek’ PL \*tam; C —, K tam, G tam; A (thamang), Se tam; J tam<sup>33</sup>; PTB  
 —

このほかに、(313) のような例が確認されている。

- (313) ‘paddy’ PL \*am; C ʔaŋ, K ʔam, G ʔam; A/Se am; J mam<sup>33注77</sup>; PS \*am; PTani  
 \*am-bum (STEDT #6243: provisional)

#### 4.2.2.2 PL \*-an

C -aiŋ vs. K/G -an という対応がみられる形式には、PL として\*-an を再構する。次のような例が確認されている。

- (89) ‘sister’ PL \*cán < \*cál?; C ʔacáŋ, K sán, G sán; A lu-chölo; J tjan<sup>33</sup>; PS \*cal;  
 PTB \*dzar (STEDT #2215)  
 (104) ‘cat’ PL \*hán-ji-k < \*hál-ji-k? < \*hál-ci-k?; C háŋ, K hanɛi, G hánsi?; A hanggen,  
 Se haljĩk; PS \*hal; PTB —  
 注 A -ng は同化による。Se を考慮すると PL \*hál という可能性がある。  
 (124) ‘bite’ PL \*kán; C ʔakáŋ, K kán, G kán; A kan, Se kán; PTani \*gam (~ \*gjam?)  
 (STEDT #6317)  
 (171) ‘meat’ PL \*san; C ʔásaiŋ, K s<sup>h</sup>əlan, G s<sup>h</sup>əlan; A (aksal) ‘flesh’, Se sen ‘flesh’; J  
 jan<sup>31</sup>; PTB \*sya-n (STEDT #34)  
 注 K/G とも複合語では s<sup>h</sup>an となる。K/G にみられる-l は接中辞であるという  
 [Sangdong 2012: 158–160]。  
 (181) ‘rob’ PL \*s<sup>h</sup>-nan; C sənaiŋ, K s<sup>h</sup>ənàn, G —; J ʃä<sup>31</sup>ŋjen<sup>31</sup>; PTB \*s-nyen (STEDT  
 #181)

注77 この形式は査読者 A の教示による。

- (198) ‘ghost’ PL \*h-mán; C həmə́iŋ, K həmán, G həmán; PTB —
- (233) ‘allot’ PL \*man; C maiŋ, K man, G man; PTB —
- (234) ‘face’ PL \*mán < \*mál?; C ʔamáŋ, K mán, G mán; A/Se man; J man<sup>33</sup>; PS \*mal; PTB \*s-myal (STEDT #1188: provisional)
- (279) ‘fire’ PL \*wan < \*wal; C vaiŋ, K wan, G wan; A/Se wal; J wan<sup>31</sup>; PS \*wal; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)
- (280) ‘smoke’ PL \*wan- < \*wal-; C vaiŋhvu, K wans<sup>h</sup>uŋ, G wanŋu?; A walkhū, Se walhū; J wan<sup>31</sup>khut<sup>31</sup> ‘fire’; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)
- (281) ‘cut’ PL \*wán; C váiŋ, K wán, G wán; J mon<sup>31</sup>; PTB \*mwan ≈ \*mwat (STEDT #475)

C/A/Se で共通するものとして次の例がある。

- (131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si?; C səkáŋsi, K (ʔuluçi), G (ʔunuŋs<sup>h</sup>i); A/Se sangANSĭ; J ʃa<sup>33</sup>kan<sup>33</sup>; PS \*sakan-si; PTB \*s-kar = \*s-kər (STEDT #2300)

K/G/A/Se で-an が共通するものとして次の例がある。

- (61) ‘strike/hit’ PL \*tán; C —, K tán, G tán; A/Se tan; J tan<sup>31</sup>; PTB \*dan CUT (STEDT #3563)

#### 4.2.2.3 PL \*-aŋ

C/K/G に共通して-aŋ があらわれる形式には、PL \*-aŋ を再構する。これまでにあげてきた語例のなかでは、次のような例が確認されている。

- (19) ‘cheek’ PL \*n/l-baŋ; C ʔanəbáŋ, K ləpàŋ, G nəpàŋ; A/Se nambɔŋ; PTB \*baŋ ≈ \*boŋ (STEDT #263: provisional)

注 C と K/G で声調があわないほかは、よく対応している。PL では声調を指定できない。

- (47) ‘knife’ PL \*k-taŋ; C kótəŋ, K taŋ, G taŋ; A/Se katang ‘dao’; PS \*katang; PTB —
- (108) ‘back’ PL \*k-sáŋ; C ʔakəsáŋ, K kəs<sup>h</sup>áŋ, G kəs<sup>h</sup>áŋ; J ʃiŋ<sup>31</sup>ma<sup>33</sup>, n<sup>31</sup>ʃaŋ<sup>33</sup> ‘waist’; PTB —

- (126) ‘old’ PL \*kaŋ; C kaŋ ‘be satisfied’, K kaŋtəlá, G kaŋ; A kangta, Se kangaga; PTB \*b-gaŋ FULL/SATIATED (STEDT #135: provisional)  
 注 Se の語形はどのように分節できるか不明。ただし kang-の部分が ‘old’ と関係があることはまちがいないとおもわれる。
- (172) ‘enter’ PL \*saŋ; C saŋ, K s<sup>h</sup>aŋ, G s<sup>h</sup>aŋ; J ʃaŋ<sup>31</sup>; PTK \*tsaŋ (STEDT #6887), PTB \*s-waŋ [Matisoff 2012: 31]
- (201) ‘cloud’ PL \*hráŋ; C hráŋgri, K haŋc<sup>h</sup>i, G háŋi?; A/Se haŋaŋ ‘sky’; J mǎ<sup>31</sup>ʒaŋ<sup>33</sup> ‘rain’; PTB \*m/s-raŋ RAIN (STEDT #3571)  
 注 G -n は同化による。
- (202) ‘rain’ PL \*hráŋ wé; C hráŋ vé, K həláŋ wé, G həláŋ wé; A/Se haŋaŋ myo; J mǎ<sup>31</sup>ʒaŋ<sup>33</sup>; PTB \*k/r/s-wa (STEDT #2080)  
 注 K/G の形式は ‘sky’ háŋ に接中辞-lがはいった形式と推定される。
- (221) ‘sharp’ PL \*h-ráŋ; C ráŋ, K háŋ, G háŋ; A lang, a-ɾaŋ ‘blunt’; PTB —  
 注 PTB \*(s-)ryam SHARP (STEDT #2639: provisional) とは韻母があわない。A lang を考慮すると、PL \*hlaŋ というような形式が想定できるかもしれない。A a-ɾaŋ ‘blunt’ は否定接頭辞 a-に ɾaŋ が付加している。ɾaŋ 単独では ‘sharp’ を意味すると推定される。なお A では語頭で l-、語中で r-になるものとかんがえられる。
- (222) ‘potato’ PL \*h-ráŋ-hú?; C ráŋhú, K háŋmú ‘yam?’, G háŋjú ‘yam?’; A/Se naŋhu ‘yam’; PTB —  
 注 A/Se の形式を考慮すると、PL \*hláŋ-hú というような形式が想定できるかもしれない。
- (235) ‘dream (n)’ PL \*ip-maŋ; C ʔiʔmaŋ, K ʔepmaŋ, G ʔemaŋ; J jup<sup>31</sup>maŋ<sup>33</sup>; PTB \*(s/r)-ma((ŋ/k)) (STEDT #126)  
 注 G で-p があらわれていないのは、後続する m-の影響とおもわれる。
- (246) ‘thou’ PL \*naŋ; C naŋ, K naŋ, G naŋ; A/Se naŋ; J naŋ<sup>33</sup>; PS \*naŋ; PTB \*na-ŋ (STEDT #2489)
- (295) ‘put upon’ PL \*daŋ?; C daŋ, K taŋ, G taŋ; WrB {tang’}; PTB —  
 G/A で共通するものとして次の例がある。

(31) ‘door’ PL \*k<sup>h</sup>-phaŋ; C (?ahá), K —, G kəp<sup>h</sup>àŋ; A kaphaŋ; J (tʃiŋ<sup>33</sup>kha<sup>33</sup>); PTB —

このほかに、(314) のような例が確認されている。この例は機能語であり、先行する環境によって頭子音が変化する。ここでは韻母のみをあげておく。

(314) ‘-COMPLETIVE’ PL \*-aŋ; C -aŋ, K -aŋ, G -aŋ; PTB —

#### 4.2.2.4 PL \*-im

C -iŋ に対して K/G が -im が対応するばあい、PL \*-im を再構する。

(195) ‘cold’ PL \*sim; C siŋ, K ɕim, G s<sup>h</sup>im; J khjen<sup>33</sup> ‘snow’; WrB {khyam’}; PTB \*kyam (STEDT #2374)

C -iŋ に対して K -em、G -im が対応する例がある。K -im と -em は先行する頭子音の種類にしたがって相補分布しているので、PL \*-im にまとめる。次のような例がある。

(142) ‘house’ PL \*kím; C kíŋ, K céŋ, G cím ~ kím; A kem; WrB {@im’}; PS \*kyim; PTB \*k-yim ≍ k-yum (STEDT #1612)

C -iŋ に対して K -em、G -em が対応する例がある。K -im と -em、G -im と -em は相補分布しているので、PL \*-im にまとめる。次のような例がある。

(287) ‘catch’ PL \*Cim; C riŋ, K yem, G læm; J ʒim<sup>31</sup>; PTB \*s-grim (STEDT #6174)

このほか、C -iŋ に対応する例として次のものがある。

(185) ‘seven’ PL \*s-ni-ŋ; C səniŋ, K (set), G (sit); A/Se sīnī; J sə<sup>31</sup>nit<sup>31</sup>; PS \*sani(t); PTB \*s-ni-s (STEDT #2505)

注 K/G は Shan tset<sup>4</sup> からの借用語。

#### 4.2.2.5 PL \*-in

PL \*-in が確実に再構しうるものは確認されていない。4.2.2.8 PL \*-iŋ で後述するように、PTB \*-in は C/K/G -iŋ で対応する傾向にある。

ただし、(315) にしめすように、C -aiŋ と K -iŋ、G -i が対応している例が一例確認されている。この例は機能語であり、先行する環境によって頭子音が変化する。ここでは韻母のみをあげておく。

(315) ‘-VENITIVE’ PL \*-i-n; C -aiŋ, K -iŋ, G -i; PTB —

#### 4.2.2.6 PL \*-en

C -ij に対して K -en、G -en が対応する例がある。本稿では、かりに PL \*-en を再構しておく。ただし PTB やセンマイ語の形式まで考慮すると、さらに PL \*-el にさかのぼる可能性がある。次のような例がある。

- (176) ‘iron’ PL \*sen < \*sel?; C sij, K s<sup>h</sup>en, G s<sup>h</sup>en; A sên, Se sél; WrB {saM}; PS \*sil; PTB \*sya:l ≍ \*syi:r (STEDT #2673), \*syam (STEDT #2676)

G の韻母が不規則であるけれども、類例に次のものがある。J の形式を考慮すると PL \*-in にさかのぼるとみたほうがいいかもしれない。

- (179) ‘wash’ PL \*sen? < \*sel?; C saiŋ, K s<sup>h</sup>en, G (s<sup>h</sup>em); J kǎ<sup>31</sup>jin<sup>31</sup>; PTB \*m/b-s(y)il ≍ \*m/b-syal (STEDT #2671)

対応に不規則がみられるけれども、語家族をなす次の二例にも PL \*-en を再構しうる。PTB を考慮すると、これらは PL \*-in にさかのぼるかもしれない。

- (196) ‘liver’ PL \*C<sup>H</sup>-sen; C ʔáŋsij, K ʔəs<sup>h</sup>èn, G (téci); J mǎ<sup>31</sup>sin<sup>31</sup>; PTB \*m-sin (STEDT #1390)

- (197) ‘heart’ PL \*C<sup>H</sup>-sen; C ʔasésúʔ, K ʔəs<sup>h</sup>èn, G s<sup>h</sup>èn; J mǎ<sup>31</sup>sin<sup>31</sup>; PTB \*m-sin (STEDT #1390)

注 C の韻母があわない。

#### 4.2.2.7 PL \*-en

C -aij に対して K/G -en が対応する例がある。本稿では、かりに PL \*-en を再構しておく<sup>注78</sup>。

- (119) ‘wing’ PL \*Cén-kǎʔ; C ʔayáŋkó, K témkú, G lénkú; A lingo, Se ningko; J sij<sup>31</sup>ko<sup>33</sup>; PTB \*ko (STEDT #716: provisional), \*m/s-lam (STEDT #768)

注 K témkú [Sangdong 2012: 518] があるので、第一音節の韻母は\*-én と再構しうる。K/G で t/l の対応をしめすものは多数あるけれども C y で対応するものは未確認である。また、第二音節の母音も対応しない。そこで全体としては、PL \*Cén-kǎʔ とする。

<sup>注78</sup> J の形式も考慮するなら、PL \*-in と再構できるかもしれない。

#### 4.2.2.8 PL \*-iŋ

C/K/Gにおいて共通して-iŋがあらわれる形式には、PLとして\*-iŋを再構する。ただし、PTB \*-inにさかのぼりうるものについては、PL \*-inとするべきであるかもしれない。次のような例が確認されている。

(45) ‘nail’ PL \*tak-miŋ < \*tak-min?; C taʔmiŋ, K taʔmiŋ, G taʔmiŋ; A/Se takmeng; J lǎ<sup>31</sup>mjin<sup>33</sup>; PTB \*min ~ \*myen (STEDT #513: provisional)

注 PTB \*-in は PL \*-iŋ で対応する。

(91) ‘-CAUSATIVE’ PL \*-ciŋ; C -ciŋ, K -síŋ, G -síŋ; PTB —

(236) ‘ripe’ PL \*míŋ < \*mín?; C míŋ, K míŋ, G míŋ; A/Se ming, a-min ‘raw’; J mjjin<sup>33</sup>; PTB \*s-min (STEDT #2449)

(237) ‘bark/sound’ PL \*m-ríŋ; C məríŋ ‘bark’, K míŋ ‘sound’, G míŋ ‘sound’; J phʒiŋ<sup>33</sup>; PTB \*priŋ ≈ \*b-riŋ (STEDT #2571)

(247) ‘you (pl)’ PL \*niŋ; C nóniŋ, K həniŋ, G niŋ; A/Se ning; PTB —

(248) ‘year’ PL \*niŋ; C səniŋ, K yàʔniŋ ‘this year’, G yəniŋ pí ‘this year’; J ʃǎ<sup>31</sup>niŋ<sup>33</sup>; PTB \*niŋ = \*s-niŋ (STEDT #2501)

次例については PL \*mun と PL \*miŋ の両方を再構しうる。

(316) ‘hair’ PL \*miŋ ~ \*mun; C ʔahúmiŋ ‘hair (head)’, K muŋku, G miŋku, miŋcu; A/Se humī ‘hair (head)’; J mun<sup>33</sup>; WrB {mwe:}; PS \*kʔu-mi; PTB \*s/r-m(u/i/ya)l (STEDT #363)

C/K -iŋ に対して G が -eiŋ が対応する例がある。これにも PL \*-iŋ を再構する。次のような例がある。

(78) ‘village’ PL \*thiŋ; C t<sup>h</sup>iŋ, K t<sup>h</sup>iŋ, G t<sup>h</sup>eiŋ; A/Se theng; J thiŋ<sup>31</sup>ko<sup>33</sup> ‘household’; PS \*thing?; PTB —

C -iŋ に対して K/G が -eiŋ が対応する例がある。これにも PL \*-iŋ を再構する。次のような例がある。

(24) ‘full’ PL \*phríŋ; C p<sup>h</sup>ríŋ, K p<sup>h</sup>éiŋ, G p<sup>h</sup>éiŋ; J phʒiŋ<sup>55</sup>; PTB \*p/blíŋ (STEDT #111)

(90) ‘ask for’ PL \*ciŋ; C ciŋ, K seiŋ, G seiŋ; A cheng-, Se ching-; PTB —

K -eiŋ に A/Se -iŋg が対応する例がある。これにも PL \*-iŋ を再構する。次のような例がある。

(135) ‘two’ PL \*kíŋ; C (níŋ), K kléiŋ, G (kε); A/Se kīŋg; PTB —

注 K の形式は接中辞-l がはいた形式と推定される。K kəliŋ [Sangdong 2012: 494] という形式も記録される。声調はことなっているかもしれない。G ke も同源形式とかがえるならば、PL \*ke-ŋ といった形式が再構できるかもしれない。

#### 4.2.2.9 PL \*-eŋ? < \*-yaŋ?

C -iŋ に対して K -eiŋ、G -aiŋ、A/Se -eŋg が対応する例が一例確認されている。本稿ではかりに PL \*-eŋ を再構する。ただし、PTB の形式まで参考にすれば、PL \*-yaŋ と再構しうる可能性もある。

(180) ‘live’ PL \*séŋ? < \*syáŋ?; C síŋ, K sh'èiŋ ~ ʔəsh'èiŋ, G sh'áiŋ; A seng, Se sheng; J tsij<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-riŋ ≍ \*s-r(y)aŋ (STEDT #71)

注 K の声調は不規則。

(180) と語家族をなすとおもわれる (189) にも PL \*-eŋ を再構しておく。

(189) ‘green’ PL \*C<sup>H</sup>-seŋ? < \*C<sup>H</sup>-syáŋ?; C —, K kəs<sup>h</sup>èiŋ, G sh'àiŋ; Se seng; J tsij<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-riŋ ≍ \*s-r(y)aŋ (STEDT #71)

#### 4.2.2.10 PL \*-um

C -uŋ に対して K -om、G -ɔm が対応するばあい、PL \*-um を再構しておく。次のような例がある。

(80) ‘mortar’ PL \*thum; C t<sup>h</sup>uŋ, K t<sup>h</sup>om, G t<sup>h</sup>ɔm; J thum<sup>31</sup>; PTB \*tsum = \*t<sup>h</sup>rum (STEDT #2742)

(177) ‘finish/end’ PL \*sum; C suŋ, K sh'om, G sh'ɔm; PTB —

(178) ‘three’ PL \*súm; C súŋ, K sh'óm, G sh'ɔm; A/Se shom; J mā<sup>31</sup>sum<sup>33</sup>; PS \*sùm; PTB \*g-sum (STEDT #2666)

#### 4.2.2.11 PL \*-im? < \*-yum?

C -ij に対して K/G が -um が対応するばあい、かりに PL \*-im を再構する。次のような例が確認されている<sup>注79</sup>。

(79) ‘black’ PL \*thím? < \*thyúm?; C t<sup>h</sup>ij, K t<sup>h</sup>úm, G t<sup>h</sup>úm; A tum, Se thum; PS \*thüm?; PTB \*s(y)im (STEDT #2672), PKC \*dum (STEDT #4062: provisional)

(100) ‘salt’ PL \*cim? < \*ryum?; C cij, K sum, G sum; A/Se chum; J t<sup>h</sup>um<sup>31</sup>; PS \*sum; PTB \*g-ryum = \*gryum (STEDT #2644)

C -ij に対して G/A/Se -um が対応する例が一例確認されている。

(184) ‘feel sleepy’ PL \*ip-sim? < \*ip-syum?; C ʔiʔsij, K —, G ʔeps<sup>h</sup>um; A eksum ‘sleep’, Se īsum ‘sleep’; PTB —

次の例は C と K/G で声調が対応しない点をのぞけば、意味も形式もよく対応している。

(52) ‘smell (vt)’ PL \*tím? < \*tyúm?; C ʔátij, K túm, G túm; PTB —

注 C と K/G で声調があわない

C -ij に対して K -om、G -om が対応する例もある。これにも PL \*-im を再構しておく。

(266) ‘warm’ PL \*lím? < \*lyúm?; C líj, K lóm, G lóm; J lum<sup>33</sup>; PTB \*s-lum ≍ \*s-lim (STEDT #2420)

#### 4.2.2.12 PL \*-un

C -uj に対して K/G が -un が対応するばあい、PL \*-un を再構する。次のような例が確認されている。

(25) ‘wear’ PL \*phun; C p<sup>h</sup>uj, K p<sup>h</sup>un, G p<sup>h</sup>un; J phun<sup>55</sup>; PTB \*pun (STEDT #2579)

(34) ‘bee’ PL \*t<sup>h</sup>-Cún; C təlúj, K təmún ~ túj<sup>h</sup>ún, G təmún; PTB —

(48) ‘lips/mouth’ PL \*s-tún; C ʔasətúj, K s<sup>h</sup>ətún, G s<sup>h</sup>ətún; A/Se shun; J n<sup>31</sup>ten<sup>33</sup>; PS \*sadün?; PTB \*m/s-d(y)u-l/r/n (STEDT #442: provisional)

<sup>注79</sup> 4.2.1.11 PL \*-ik と同様に、PL \*-im と再構することは不自然である。(100) ‘salt’ の PTB 形式を参考にすれば、PL \*-yum と再構できる可能性がある。

- (125) ‘pick up’ PL \*kun; C kuŋ, K kun, G kun; PTB —
- (173) ‘onion’ PL \*sún; C súŋ, K s<sup>h</sup>ún, G s<sup>h</sup>ún; J la<sup>31</sup>son<sup>33</sup> ‘garlic’; PTB \*swa-n (HPTB)
- (174) ‘garlic’ PL \*sún-; C súŋp<sup>h</sup>ro, K s<sup>h</sup>únçilún, G s<sup>h</sup>únlún; J la<sup>31</sup>son<sup>33</sup>; PTB \*swa-n (HPTB)  
 注 C/K/G とともに ‘onion’ + ‘white’ という語構成をしている。K çìは (190) ‘fruit’ が高声調のあとで変調したもの。
- (175) ‘sew’ PL \*sún; C súŋ, K s<sup>h</sup>ún, G s<sup>h</sup>ún; PTB —
- (238) ‘wind (n)’ PL \*mun; C muŋ, K mun (vi), G mun (vi); PTB —  
 注 J n<sup>31</sup>puŋ<sup>33</sup> ‘wind (n)’ や PTB \*buŋ WIND (n) (STEDT #6128) は韻母があわないので同源形式ではないとおもわれる。
- (239) ‘hair (body)’ PL \*mun; C ʔámuŋ, K muŋku, G miŋku, miŋcu; J mun<sup>33</sup>; WrB { @a.mwe: }; PTB \*s/r-m(u/i/ya)l (STEDT #363)  
 注 K/G の-ŋ は後続する k の影響。そこでこの例については例外的に J を参考にして PL \*mun を再構する。

K/G/Se で-un があらわれるものとして次の例がある。

- (64) ‘pull’ PL \*tún; C —, K tún, G tún; A (kong), Se tun; J tun<sup>33</sup>; PTB \*don ~ \*ton (STEDT #2199: provisional)

C -uŋ に対して K -on、G -un が対応する例がある。C -uŋ に対して K/G が-un が対応する形式と比較して、頭子音の分布がことなる。そこで PL \*-un を再構しておく。次のような例がある。

- (18) ‘ringworm’ PL \*k<sup>h</sup>-bun; C kəbuŋ, K kəpòn, G kəpùn; PTB —

#### 4.2.2.13 PL \*-uŋ

C -uŋ に対して K -ouŋ、G -auŋ が対応する例が多数ある。このような例に対し PL \*-uŋ を再構する。次のような例がある。

- (35) ‘stone’ PL \*t<sup>h</sup>-luŋ; C təluŋ, K təlouŋçiŋ, G təlàuŋ; A/Se torong; J n<sup>31</sup>luŋ<sup>31</sup>; PS \*talung; PTB \*r-luŋ (STEDT #1269)
- (49) ‘insect’ PL \*k<sup>h</sup>-tuŋ; C kətúŋ ‘leech’, K kətòuŋ, G kətàuŋ; A/Se kotong; J lă<sup>31</sup>túŋ<sup>33</sup>; PTB —

(50) ‘grandchild’ PL \*s-túnj; C ʔasətúnj, K s<sup>h</sup>ətóuj, G s<sup>h</sup>utóuj ~ s<sup>h</sup>utáuj; J kǎ<sup>31</sup>fu<sup>31</sup> ~ fu<sup>51</sup>; PTB —

(53) ‘sit’ PL \*túnj ~ \*thúnj; C túnj, K t<sup>h</sup>óuj, G t<sup>h</sup>áuj; A tong, Se thong; J tuŋ<sup>33</sup>; PTB \*tu:ŋ ≈ \*du:ŋ

注 C/A と K/G/Se で頭子音が対応しないけれども、PTB を参考に PL \*tuŋ ~ \*t<sup>h</sup>úŋ を再構する。

(288) ‘horn’ PL \*Cúnj; C ʔarúnj, K yóujkáj, G láujkáj; A/Se nongnɔŋ; J n<sup>31</sup>ʒuŋ<sup>33</sup>; PS \*rung; PTB \*n/g-[r]u-(ŋ)/k ≈ \*n/g-[r]wa-ŋ/k (STEDT #814)

K/G -ouj に対して A/Se -ong が対応する例がある。K -ouj となるのは PL \*-uŋ であるから、ここでもかりに PL \*-uŋ を再構する。

(62) ‘big/great’ PL \*túnj?; C —, K tóuj, G tóuj; A/Se tong; PTB —

C/K/G において共通して -uŋ があらわれる形式は確認されていない。次例では K/G/(A)/Se において共通して -uŋ があらわれている。PL \*-uŋ はすでに再構したので、ここではかりに \*-Vŋ を再構する。

(270) ‘white’ PL \*I’Vŋ; C (p<sup>h</sup>ro), K lúj, G lúj; A lun<sup>註80</sup>, Se lung; J (ph<sup>30</sup>); WrB ({phruu}), OB ({phlu}); PS \*phro; PTB —

注 C/J の形式も同源形式とすれば、PL \*plI’V-ŋ のような形式を再構できるかもしれない。

#### 4.2.2.14 PL \*-om

PL \*-om と再構しうる例は確認されていない。

#### 4.2.2.15 PL \*-on

C -uŋ に対して K -on、G -on が対応する例がある。本稿では PL \*-on を再構しておく<sup>註81</sup>。次のような例がある。

(26) ‘tree/firewood’ PL \*phón < \*phól; C p<sup>h</sup>új, K p<sup>h</sup>ón, G p<sup>h</sup>ón; A/Se phol; J phun<sup>55</sup>; PTB \*bul ≈ \*pul (STEDT #2176: provisional)

<sup>註80</sup> McCulloch [1859] において A の形容詞的な語には語尾に -shuma がついている。後続する sh の影響で PL \*-uŋ が -un となっている可能性がある。

<sup>註81</sup> (51) の PTB の形式を参照すると、PL \*-un にまとめられる可能性がある。

(51) ‘short’ PL \*ton; C tuŋ, K ton, G tɔn; A/Se ton; J kǎ<sup>31</sup>tun<sup>31</sup>; PTB \*(y)uŋ ≈ \*(y)un (STEDT #7173)

(292) ‘muddy/cloudy’ PL \*Cón; C búŋ, K pón, G món; PTB —

注 PTB \*mu:ŋ CLOUDY, DARK; SULLEN (STEDT #2468) は韻母があわない。

次例はCがうまく対応しない。K/G/A/Seで対応する。ただしA-olなので、PL \*-olにさかのぼる可能性がある。

(30) ‘tree’ PL \*phón < \*phól; C (?ap<sup>h</sup>áj, púŋp<sup>h</sup>áj), K p<sup>h</sup>ouŋklon, p<sup>h</sup>ón ‘firewood’, G p<sup>h</sup>óntòn; A/Se phol; J phun<sup>55</sup>; PS \*phül; PTB \*bul ≈ \*pul (STEDT #2176: provisional)

C-ouŋに対してK-on、G-onが対応する例がある。ここでもPL \*-onを再構する。次の一例のみが確認されている。

(203) ‘small chair’ PL \*hon; C laʔhoŋ, K taŋhôn, G tǎhòn; J (lǎ<sup>55</sup>khum<sup>55</sup>); PTB —

注 Jの形式はむしろC úʔhuŋ ‘pillow’ と同源であるとおもわれる。

#### 4.2.2.16 PL \*-ouŋ

C-ouŋに対してK-auŋが対応する例には、PL \*-ouŋが再構できるかもしれない。次にしめす二例が確認されている。

(213) ‘coffin’ PL \*hóŋ < \*khóŋ; C hóŋ, K háuŋ, G (?ǎk<sup>h</sup>áuŋ); A hongbel, Se (ku); WrB {@a\_khong’}; PTB —

(267) ‘many’ PL \*lóŋ; C lóŋ, K kláuŋ, G (nam); J (loʔ<sup>55</sup>); PTB —

C-ouŋに対してG-auŋが対応する例にもPL \*-ouŋが再構できるかもしれない。次にしめす一例が確認されている。

(127) ‘lame’ PL \*koŋ; C koŋdoʔ ‘bent/crooked’, K —, G pɔʔklaŋ; A taka kong; PTB —

### 4.2.3 流音

#### 4.2.3.1 PL \*-r

PL \*-rが再構しうる例は、C-ŋに対してK/Gでは-rが脱落する結果、開音節におおる点に特徴がある。

PL \*-arが再構されるものには次のものがある。

- (10) ‘palm’ PL \*tak-prár; C taʔpráinj, K taʔpá, G taʔpá; J lá<sup>31</sup>phan<sup>31</sup>; PKC \*baar (STEDT #4027: provisional)
- (11) ‘bloom’ PL \*pár; C páinj, K pá, G pá; PTB \*ba-r (STEDT #2153)
- (12) ‘flower’ PL \*pár; C ʔapáinj, K pəpá, G pəpá; A/Se paba; J nam<sup>31</sup>pan<sup>33</sup>; WrB {pan’:}; PTB \*ba-r (STEDT #2153)
- (92) ‘far’ PL \*car; C caij, K sa, G sa; A lam je, Se lam ja; J tsan<sup>33</sup>; PTB \*dzya:l (STEDT #1779)
- 注 (279) ‘fire’ にみられるように、PTB \*-al は PL \*-an で対応するのが通則である。
- (131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si?; C səkáinj, K (ʔuluçi), G (ʔunuŋ<sup>h</sup>i); A/Se sangansī; J ʃá<sup>33</sup>kan<sup>33</sup>; PS \*sakan-si; PTB \*s-kar = \*s-kər (STEDT #2300)
- (212) ‘crab’ PL \*a/n-har < \*a/n-khar; C nəhaij, K ʔəha, G ʔəha; A aha, Se niha; J tʃã<sup>55</sup>khan<sup>51</sup>; PTB \*d-k(y)an (STEDT #248: provisional)
- 注 PL \*-ar と再構しうるので、PTB の形式も \*-ar と再構すべきとおもわれる。
- (253) ‘new’ PL \*n-yár?; C náinj, K nəyá, G ñá; J n<sup>31</sup>nan<sup>33</sup>; PTB —
- 注 Tansa anal, Nocte anyian [Matisoff 2012: 39]。
- PL \*-ir が再構されるものには次のものがある。
- (13) ‘fly (v)’ PL \*pír; C páinj, K pí, G pí; J pjen<sup>33</sup>; PTB \*pur ≍ \*pir (STEDT #2580)
- 次の例は、PCC の形式を考慮すると、PL \*-or が再構されるかもしれない。
- (252) ‘push’ PL \*C<sup>H</sup>-no < \*C<sup>H</sup>-nor?; C —, K —, G nò; A/Se no; PCC \*nor (STEDT #4805: provisional)

#### 4.2.3.2 PL \*-l

C/K/G の証拠だけから PL \*-l を再構することはできない。しかし、A/Se や PTB を参照することにより、PL \*-l であった可能性がある語をあげることはできる。

PL \*-al でありうるものには次のものがある。

- (89) ‘sister’ PL \*cán < \*cál?; C ʔacáinj, K sán, G sán; A lu-chölo; J tjan<sup>33</sup>; PS \*cal; PTB \*dzar (STEDT #2215)

(104) ‘cat’ PL \*hán-ji-k < \*hál-ji-k? < \*hál-ci-k?; C háin, K hançî, G hánsi?; A hɔŋgen, Se hɔŋjɪk; PS \*hal; PTB —

(234) ‘face’ PL \*mán < \*mál?; C ?amáin, K mán, G mán; A/Se man; J man<sup>33</sup>; PS \*mal; PTB \*s-myal (STEDT #1188: provisional)

(279) ‘fire’ PL \*wan < \*wal; C vaiŋ, K wan, G wan; A/Se wal; J wan<sup>31</sup>; PS \*wal; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)

(280) ‘smoke’ PL \*wan- < \*wal-; C vaiŋhvu, K wans<sup>h</sup>uŋ, G wanŋu?; A walkhū, Se walhū; J wan<sup>31</sup>khut<sup>31</sup> ‘fire’; PTB \*pwár ≈ bwár (STEDT #2152)

PL \*-el でありうるものには次のものがある<sup>注82</sup>。

(176) ‘iron’ PL \*sen < \*sel?; C siŋ, K s<sup>h</sup>en, G s<sup>h</sup>en; A sên, Se sél; WrB {saM}; PS \*sil; PTB \*sya:l ≈ \*syi:r (STEDT #2673), \*syam (STEDT #2676)

(179) ‘wash’ PL \*sen? < \*sel?; C saiŋ, K s<sup>h</sup>en, G (s<sup>h</sup>em); J kã<sup>31</sup>jin<sup>31</sup>; PTB \*m/b-s(y)il ≈ \*m/b-syal (STEDT #2671)

PL \*-ol でありうるものには次のものがある<sup>注83</sup>。

(26) ‘tree/firewood’ PL \*phón < \*phól; C (p<sup>h</sup>úŋ), K p<sup>h</sup>ón, G p<sup>h</sup>ón; A/Se phol; J phun<sup>55</sup>; PTB \*bul ≈ \*pul (STEDT #2176: provisional)

(30) ‘tree’ PL \*phón < \*phól; C (?ap<sup>h</sup>áŋ, púŋp<sup>h</sup>áŋ), K p<sup>h</sup>ouŋklon, p<sup>h</sup>ón ‘firewood’, G p<sup>h</sup>óntòn; A phol; J phun<sup>55</sup>; PS \*phül; PTB \*bul ≈ \*pul (STEDT #2176: provisional)

(215) ‘twenty’ PL \*hól < \*khól?; C húŋ, K —, G —; A/Se hol; J khun<sup>33</sup>; PTB \*(m-)kul (STEDT #2355)

## 5 接頭辞

本節では C/K/G に共通する主要な接頭辞をあげておく。

<sup>注82</sup> PTB の形式を参考にすれば、PL \*-il としたほうがよりよいかもしれない。

<sup>注83</sup> PTB の形式を参考にすれば、PL \*-ul としたほうがよりよいかもしれない。

## 5.1 PL \*a-

親族名称をあらわす接頭辞として PL \*a-を再構できる。具体例としては次の三例が確認されている。

(39) ‘elder sister’<sup>注84</sup> PL \*a-té; C ʔaté ‘uncle’, K ʔəté, G ʔəté; PTB —

(241) ‘mother’ PL \*a-me; C (ʔanú), K ʔəme, G ʔəme; A/Se amé; J (nu<sup>51</sup>); WrB {@a.me}; PS \*me, \*nü; PTB \*mi (STEDT #1618)

注 K/G/A の形式は Shan me<sup>3</sup> からの借用にみえるかもしれない。しかし親族名称をあらわす接頭辞が共通してみられるので、本来語とかんがえる。

(274) ‘father’ PL \*a-wáʔ; C ʔavá, K ʔəwà, G ʔəwa; A apa, Se apo; J wa<sup>51</sup>; PS \*wa; PTB \*pa = \*pwa (STEDT #2546)

注 C/K/G で声調があわない。

C/K/G に共通して接頭辞 ʔa/ʔə-があらわれる形式として、さらに (317) の一例が確認されている。

(317) ‘negative.prefix-’ PL \*á-; C ʔá/ʔa-, K ʔə-, G ʔə-; A/Se a-; PTB —

注 K/G の形式は後続する動詞を低声調にしうるので、本来的には高声調をになっているとかんがえられる。

## 5.2 PL \*k-

身体部位をあらわす接頭辞は、(70) において K/G の主音節が低声調であらわれているので、PL \*k<sup>H</sup>-と再構しうる。

(70) ‘neck’ PL \*k<sup>H</sup>-duk; C ʔákəduʔ, K kətòuʔ, G kətàuʔ; A/Se kotok; J tuʔ<sup>31</sup>; PTB \*tuk  
 ㄨ twak (STEDT #359)

主音節が高声調であるものについては、接頭辞に PL \*k<sup>H</sup>-を再構せずにおく。次のような例がある。

(106) ‘ear’ PL \*k-ná; C ʔakəná, K kəná, G kəná; A/Se kana; J na<sup>33</sup>; PS \*kana; PTB \*r/g-na (STEDT #811)

<sup>注84</sup> この語の意味については注 25 を参照。

- (108) ‘back’ PL \*k-sáj; C ʔakəsáj, K kəs<sup>h</sup>áj, G kəs<sup>h</sup>áj; J ʃiŋ<sup>31</sup>ma<sup>33</sup>, n<sup>31</sup>ʃaŋ<sup>33</sup> ‘waist’;  
PTB —

動物をあらわす接頭辞は、たとえば (107) において K/G の主音節が低声調であらわれているので、PL \*k<sup>H</sup>-と再構しうる。次のような例がある。

- (18) ‘ringworm’ PL \*k<sup>H</sup>-bun; C kəbuŋ, K kəpòn, G kəpùn; PTB —
- (49) ‘insect’ PL \*k<sup>H</sup>-tuŋ; C kótuŋ ‘leech’, K kətòuŋ, G kətàuŋ; A/Se kotong; J lá<sup>31</sup>tuŋ<sup>33</sup>;  
PTB —
- (71) ‘porcupine’ PL \*p/k<sup>H</sup>-duw-k; C (pədvu), K kətùsipáuŋ, G kətùʔ; A/Se kutuk; J  
(tu<sup>55</sup>); PTB —
- (101) ‘deer’ PL \*k<sup>H</sup>-juk; C kəjuʔ, K —, G kəsàuʔ; J khji<sup>31</sup>tut<sup>55</sup>; PTB \*d-yuk (STEDT  
#2794)
- (107) ‘tiger’ PL \*k<sup>H</sup>-sa; C kəsa, K kəs<sup>h</sup>à, G kəs<sup>h</sup>à; A (höl); PS \*kasa; PTB —  
注 PKC kay (STEDT #4317): チン系言語では Mizo sà-kéi のように、sa に該当する要素が前にきて、k-に相当する要素が後にくる。Jilí kasá.
- (109) ‘frog’ PL \*k<sup>H</sup>-suk; C kəsuʔ, K kəs<sup>h</sup>òuʔ, G kəs<sup>h</sup>àuʔ; J ʃuʔ<sup>31</sup>; PTB —
- (112) ‘rat’ PL \*k<sup>H</sup>-yuw-k; C kəyvu, K kəyù, G cùʔ; A/Se kuyuk; J (ju<sup>55</sup>); PTB \*b-yəw-n  
(STEDT #2796), PKC \*yuu (STEDT #2796)  
注 G c-は PL \*k-が y-の影響で硬口蓋化したためと推定される。
- (188) ‘bear’ PL \*k<sup>H</sup>-sap; C (lúwain), K kəs<sup>h</sup>àp, G K kəs<sup>h</sup>àp; A/Se (səpmo); PTB —

(318) の例は頭子音も末子音もあまりよく対応しないけれども、動物接頭辞 PL \*k<sup>H</sup>-を再構しうる例である。

- (318) ‘goat’ PL \*k-ʃV-k; C kəʃiʔ, K kəpè, G —; A/Se kémék; J pai<sup>31</sup>nam<sup>33</sup>; PS \*kabe;  
PKC \*bin ≈ \*biŋ (STEDT #6033: provisional)  
注 とくに K の形式は Shan pe<sup>5</sup> が関係している可能性がある。

以下の例では主音節が高声調であるので、PL \*k<sup>H</sup>-を再構せずにおく。

- (23) ‘lizard’ PL \*k-phóy; C kəp<sup>h</sup>ú, K kəp<sup>h</sup>é, G kəp<sup>h</sup>é; PTB —  
注 (28) ‘snake’ と語家族をなすとおもわれる。

- (28) ‘snake’ PL \*k-phúw; C kəhvú, K kəp<sup>h</sup>ú, G kəp<sup>h</sup>ú; A/Se kuphu; J lǎ<sup>33</sup>pu<sup>33</sup>; PS \*kaphu; PTB \*bəw (STEDT #2178)

注 (23) ‘lizard’ と語家族をなすとおもわれる。

- (111) ‘monkey’ PL \*k-wóy; C kəvú, K kwé, G kwé; A koi; J woi<sup>33</sup>; PS \*kawoi; PTB \*b/d/g-woy-n (STEDT #2782)

- (140) ‘buffalo’ PL \*k-réy; C krí, K cé, G cé; A/Se ké; J wǎ<sup>33</sup>loi<sup>33</sup>; WrB {kywaY}, OB {klway} [Nishi 1999: 68] ; PS \*kloi; PTB \*lway (STEDT #2427)

注 Proto-Tai \*grwaay < Siamese khwaay (GSTC #75)。Matisoff [1985: 33] によれば、東南アジア大陸部での地域語。

ほかに接頭辞として PL \*k<sup>h</sup>-を再構しうるものとして、次のものが確認されている。

- (31) ‘door’ PL \*k<sup>h</sup>-phaŋ; C (?ahá), K —, G kəp<sup>h</sup>əŋ; A kaphaŋ; J (tʃiŋ<sup>33</sup>kha<sup>33</sup>); PTB —

接頭辞として PL \*k-を再構しうるものとして、次のものが確認されている。

- (17) ‘ashes’ PL \*k-but; C taʔkəbuʔ, K kəpət, G kəpət; PTB —

注 \*hot (STEDT #3514: provisional) は声母も韻母もあわない。

- (47) ‘knife’ PL \*k-taŋ; C kótəŋ, K (taŋ), G (taŋ); A/Se katang ‘dao’; PS \*katang; PTB —

- (105) ‘mushroom’ PL \*k-mú; C kəmúkaiŋ, K kəmú, G kúʔmú; J kǎ<sup>33</sup>mu<sup>33</sup>; PTB \*g-muw = \*g-məw (STEDT #2472)

- (110) ‘root’ PL \*k-rat; C ?ákratʔ, K təklat, G təkət; A (kaké), Se (taha); PTB —

注 K の形式は接中辞-lがはいった形式と推定される。

### 5.3 t-

動物をあらわす接頭辞は、(32) などにおいて K/G の主音節が低声調であらわれているので、PL \*t<sup>h</sup>-と再構しうる。

- (32) ‘fish’ PL \*t<sup>h</sup>-ŋa; C təna, K táŋŋà ~ taŋŋà, G táŋŋà; A/Se tanga; J (ŋa<sup>55</sup>); PS \*taŋà?; PTB \*s-ŋya (STEDT #1455)

注 C で n-となっているのは接頭辞 t-と同化しているため。Jilí tangá。

- (33) ‘turtle’ PL \*t<sup>h</sup>-lip; C təliʔ, K tələp, G tələp; WrB {lip’}; PTB —

- (34) ‘bee’ PL \*t<sup>h</sup>-Cún; C təlún, K təmún ~ túŋgún, G təmún; PTB —

注 主音節が高声調であるばあい、通常は接頭辞の声調を決定できない。しかしこの語例では、K の自由変異として túŋgún があり、第一音節が高声調である。したがって接頭辞にも高声調があったと推定できる。なお第一音節の韻母は、第二音節の頭子音が ŋ- であるから、t-ŋ- の連続をさけるために第二音節の韻母が重複して挿入されたものとおもわれる。

- (36) ‘red ant’ PL \*t<sup>h</sup>-hra < \*t<sup>h</sup>-khra; C təhra, K təhà, G təhà; M k<sup>h</sup>ra; PTB —

このほか、PL \*t<sup>h</sup>- と再構しうるものとして次の例がある。

- (35) ‘stone’ PL \*t<sup>h</sup>-luŋ; C təlun, K təlounɛiŋ, G tələuŋ; A/Se torong; J n<sup>31</sup>luŋ<sup>31</sup>; PS \*talung; PTB \*r-luŋ (STEDT #1269)

- (60) ‘bow’ PL \*t<sup>h</sup>-li(t/k)?; C (lehá?), K tələt ~ tələi?, G təli?; A/Se tirit; J (kuŋ<sup>33</sup>li<sup>33</sup>); WrB ({le:}); PTB (\*d/s-ləy (STEDT #2411))

接頭辞として PL \*t- を再構しうるものとしては、(37) ‘foot/leg’ などにみられる PL \*ta- や、(44) ‘finger’ などにみられる PL \*tak- が弱化したものと関係しているものが散見される。たとえば次のようなものがある。

- (15) ‘calf (of leg)’ PL \*t-pók; C (ʔátasəlún̄sa), K təpáu?, G təpáuʔhonn̄s<sup>h</sup>i; A/Se tanpok; PTB —

注 K/G tə- は (37) ‘foot/leg’ などにみられる PL \*ta が弱化した形式とおもわれる。A/Se tan- は PKC \*tan CALF (of leg) (STEDT #4183: provisional) と関係があるかもしれない。

- (16) ‘left (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-pay < \*t<sup>h</sup>-pway?; C (belá?), K təpè, G (pɛ); A téwe, Se tewew; J p̄ai<sup>33</sup>; WrB ({bhay’}); PTB \*bay ~ \*bway (STEDT #2154)

注 PL \*t<sup>h</sup>- は PL \*tak- ‘hand’ が弱化したものと推定される。ただし、K の声調を考慮すると接頭辞の声調が高声調である。PL \*tak- に由来しているとするならば、不規則な対応である。頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

- (54) ‘hand’ PL \*t-hów < \*t-khów < \*tak-khów; C təhú, K təhú, G (t<sup>h</sup>ɔ); A takhu, Se tahu; J t̄a<sup>55</sup>, l̄a<sup>31</sup>t̄a<sup>55</sup>; PS \*tak?u; PTB \*k(r)ut (STEDT #712: provisional)

注 C/K tə- は (44) ‘finger’ などにみられる PL \*tak が弱化した形式とおもわれる。

(56) ‘knee’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C ʔátəhvú, K (tə<sup>h</sup>u), G (tuʔ<sup>h</sup>u); A tankhu, Se takhu; J lǎ<sup>31</sup>phut<sup>31</sup>; PTB \*(m)ku:(k/ŋ) (STEDT #1251: provisional)

注 C tə は (37) ‘foot/leg’ などにみられる PL \*ta が弱化した形式とおもわれる。A tan- は PKC \*tan CALF (of leg) (STEDT #4183: provisional) と関係があるかもしれない。

(58) ‘thigh’ PL \*t-kíyʔ; C (ʔátəkəbʔ), K (təci), G təki; A tanghī, Se tangé; J mǎ<sup>31</sup>kji<sup>33</sup>; PTB —

注 K/G tə は (37) ‘foot/leg’ などにみられる PL \*ta が弱化した形式とおもわれる。A/Se tan- は PKC \*tan CALF (of leg) (STEDT #4183: provisional) と関係があるかもしれない。

(59) ‘right (hand)’ PL \*t<sup>h</sup>-ha < \*t<sup>h</sup>-kha; C (púʔsəláʔ), K təhà, G tək<sup>h</sup>a; A laha, Se tauwa; J (khʒa<sup>55</sup>); PTB \*g-ya ~ \*g-ra (STEDT #2786)

注 PL \*t<sup>h</sup> は PL \*tak- ‘hand’ が弱化したものと推定される。ただし、K の声調を考慮すると接頭辞の声調が高声調である。PL \*tak- に由来しているとするならば、不規則な対応である。頭子音と声調の対応を考慮すると、G は J からの借用に接頭辞が付加している可能性がたかい。

次のような例も確認されている。いずれも主音節が高声調なので、接頭辞の声調は決定できない。

(57) ‘nine’ PL \*t-húw < \*t-khúw; C təhvú, K (kàʔ), G (kò); A tuhu; J tǎ<sup>31</sup>khu<sup>31</sup>; PS \*taku; PTB \*d-kuw = \*d-kəw ~ \*d-gew (STEDT #2364)

注 K/G は Shan kaw<sup>3</sup> からの借用語。

C r- に対して K/G t が対応するものとして次の一例が確認されている。

(115) ‘bridge’ PL \*t/r-káʔ; C rəká, K təká, G təká; PTB —

#### 5.4 s-

K/G において主音節が低声調であらわれているので PL \*s<sup>h</sup>- を再構しうるものには、次のような例がある。

(7) ‘horse’ PL \*s<sup>h</sup>-pu-k; C (mərán), K s<sup>h</sup>əpù, G s<sup>h</sup>əpùʔ; A/Se shuruk; PS \*sapu; PTB —

注 C はマルマ語からの借用。アラカンの Sak については Hodgson [1853: 5] に sapú という形式が記録されている。そこで PL \*s-pu を再構する。また STEDT

Database によるとナガ諸語に *sapuk* という形式がある。

(156) ‘nose’ PL \*s<sup>h</sup>-na; C (?asəkənú), ?ásəna ‘apex’, K s<sup>h</sup>ənà, G s<sup>h</sup>ənà; PTB \*s-na ≍ \*s-na:r (STEDT #803)

(181) ‘rob’ PL \*s<sup>h</sup>-nan; C sənaiŋ, K s<sup>h</sup>ənàn, G —; J fǎ<sup>31</sup>ŋjen<sup>31</sup>; PTB \*s-nyen (STEDT #181)

(7) ‘horse’ PL \*s<sup>h</sup>-pu-k にみられる接頭辞 \*s<sup>h</sup>-は動物にかかわるものかもしれない。しかし、動物がかかわっていても、共時的には s-があらわれないばあい、K/G で低声調がでてこないようである。

(230) ‘cattle’ PL \*s-muk; C səmuʔ, K mouʔ, G mouʔ; A sok; PS \*samuk; PTK \*muk (STEDT #7137: provisional)

このほか、接頭辞として PL \*s-を再構しうるものとしては、次のような例も確認されている。

(48) ‘lips/mouth’ PL \*s-tún; C ?asətún, K s<sup>h</sup>ətún, G s<sup>h</sup>ətún; A/Se shun; J n<sup>31</sup>ten<sup>33</sup>; PS \*sadün?; PTB \*m/s-d(y)u-l/r/n (STEDT #442: provisional)

(50) ‘grandchild’ PL \*s-tún; C ?asətún, K s<sup>h</sup>ətóuŋ, G s<sup>h</sup>utóuŋ ~ s<sup>h</sup>utáuŋ; J kǎ<sup>31</sup>fu<sup>31</sup> ~ fu<sup>51</sup>; PTB —

(69) ‘moon’ PL \*s-dá < \*s-lá; C sədá, K s<sup>h</sup>ətá, G s<sup>h</sup>ətá; A/Se satha; J fǎ<sup>33</sup>ta<sup>33</sup>; PS \*sada; PTB \*s-(g)la (STEDT #1016)

(131) ‘star’ PL \*s-kán-si < \*s-kár-si?; C səkáŋsi, K (?uluçi), G (?unuŋs<sup>h</sup>i); A/Se sangansī; J fǎ<sup>33</sup>kan<sup>33</sup>; PS \*sakan-si; PTB \*s-kar = \*s-kər (STEDT #2300)

(155) ‘tongue’ PL \*s-lí-k; C ?asəlíʔ, K s<sup>h</sup>əlí, G s<sup>h</sup>əlí; J fɪŋ<sup>31</sup>let<sup>31</sup>; WrB {lhya}; PS \*-ti; PTB \*s-lyak (STEDT #629)

(157) ‘tooth’ PL \*s-wá; C ?asəvá, K s<sup>h</sup>wá, G s<sup>h</sup>wá; A sho; J (wa<sup>33</sup>); WrB {swaa:}; PS \*sawà; PTB \*s-wa (STEDT #632)

(185) ‘seven’ PL \*s-ni-ŋ; C səniŋ, K (set), G (sit); A/Se sīnī; J sǎ<sup>31</sup>nit<sup>31</sup>; PS \*sani(t); PTB \*s-ni-s (STEDT #2505)

注 K/G は Shan tset<sup>4</sup> からの借用語。

### 5.5 r-

K/G において主音節が低声調であらわれているので PL \*r<sup>H</sup>-を再構しうるものには、次の二例が確認されている。

(73) ‘thick’ PL \*r<sup>H</sup>-thay; C rə<sup>h</sup>e, K t<sup>h</sup>ɛ̃ ~ ʔət<sup>h</sup>ɛ̃, G t<sup>h</sup>ɛ̃; A/Se the; J that<sup>31</sup>; PTB \*r-tas (STEDT #178)

(259) ‘drive/chase’ PL \*r<sup>H</sup>-ɲak; C rənaʔ, K ɲàʔ, G ɲàʔ; PTB —

このほか、接頭辞として PL \*r-を再構しうるものとしては、次のような例も確認されている。

(116) ‘dry’ PL \*r-ków; C rəkú, K ʔəkú, G kó; PTB —

### 5.6 その他

C kə-に対して K/G hə-で対応する例が、以下の二例確認されている。接頭辞の音価を特定できないので、本稿では\*C<sup>H</sup>-と再構する。

(231) ‘thunder/sky’ PL \*C<sup>H</sup>-muk; C kəmuʔ ‘thunder’, K həmə̀uʔ ‘sky’, G həmə̀uʔ ‘sky’; J muʔ<sup>55</sup> ‘thunder’; PTB \*r/s-mu:k [Matisoff 2012: 35]

(284) ‘fan (n)’ PL \*C<sup>H</sup>-yap; C kəyaʔ, K həyàp, G həyàp; WrB {yap’}; PTB \*g-ya:p (STEDT #2790)

C/K/G でかならずしも明示的には接頭辞があらわれていなくとも、K/G で低声調があらわれているばあいには、通時的には高声調をもったなんらかの要素が先行していたことをしめす証拠となる。次のような例がある。

(65) ‘man’ PL \*C<sup>H</sup>-tik-(sa); C (lú), K (təmis<sup>h</sup>a), G tìʔs<sup>h</sup>a; A tìksahora, Se tìkhora; PTB —

(84) ‘chilly’ PL \*C<sup>H</sup>-cap; C caʔ, K sàp, G sàp; J tʃap<sup>31</sup>; WrB {cap’}; PTB —

(95) ‘hard/solid’ PL \*C<sup>H</sup>-cak; C —, K ʔəsàʔ, G sàʔ; A chak; J tʃaʔ<sup>31</sup>; PTB \*tsak-t (STEDT #186: provisional)

(99) ‘fear’ PL \*C<sup>H</sup>-cak < \*g<sup>H</sup>-rak?; C ʔácaʔ, K sàʔ, G kəsàʔ; A/Se achak; PTB —

注 PTB \*k/grok ≈ \*k/grak FEAR/FRIGHTEN (STEDT #2249) が関係している可能性がある。

- (149) ‘sell’ PL \*C<sup>H</sup>-khe; C ʔáʔe, K (ma), G ɲəhè; A/Se he; PTB —  
 注 C/G/A/Se の形式は、あるいは Shan k<sup>h</sup>aaʔ<sup>1</sup> ‘sell’ と関係があるかもしれない。
- (189) ‘green’ PL \*C<sup>H</sup>-seŋʔ; C —, K kəs<sup>h</sup>èiŋ, G s<sup>h</sup>àiŋ; Se seng; J tsɿŋ<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-riŋ  
 ≍ \*s-r(y)əŋ (STEDT #71)
- (194) ‘comb’ PL \*C<sup>H</sup>-si-k; C húsi, K wəci, G hós<sup>h</sup>iʔ; J pǎ<sup>55</sup>si<sup>55</sup>, mə<sup>31</sup>sit<sup>31</sup>; PTB  
 \*m-si(y)-t (STEDT #1219: provisional)
- (196) ‘liver’ PL \*C<sup>H</sup>-sen; C ʔáŋsiŋ, K ʔəs<sup>h</sup>èn, G (téci); J mə<sup>31</sup>sin<sup>31</sup>; PTB \*m-sin (STEDT  
 #1390)
- (205) ‘chin’ PL \*C<sup>H</sup>-ha < \*C<sup>H</sup>-kha; C ʔahəbúʔ, K ʔəhà, G ɲəhàhuʔ; A/Se (khang); J  
 n<sup>31</sup>kha<sup>55</sup>; PTB \*(m/s)-ka (STEDT #273: provisional)
- (207) ‘branch/twig’ PL \*C<sup>H</sup>-ha-k < \*C<sup>H</sup>-kha-k; C ʔáhaʔ, K həlàʔ, G hà; A/Se (musa);  
 M ʔəkhaʔ; PTB \*s-ka(:)k (STEDT #1278)  
 注 C/K/G の証拠からだけでは PL の接頭辞を決定することはできない。しかし  
 PTB も参考にすれば、おそらくは\*s<sup>H</sup>-を再構しうる。
- (226) ‘water leech’ PL \*C<sup>H</sup>-mo; C məyúʔ, K mò, G mò; M hɯyɔ̌, WrB {mhyo.}; PTB  
 —  
 注 ビルマ語の形式から判断すると、PTB で接頭辞 \*s<sup>H</sup>-があった可能性がある。  
 C では PL の主音節が接頭辞としてのみのこっている。
- (249) ‘heavy’ PL \*C<sup>H</sup>-ni(ŋ/k); C (ʔániŋ), K nèiʔ, G niʔ; A/Se nik; PTB —
- (251) ‘bury’ PL \*C<sup>H</sup>-nup; C —, K nòp, G nòp; A/Se nup; J lup<sup>31</sup>; PTB \*klup (DPTB  
 #138)
- (252) ‘push’ PL \*C<sup>H</sup>-no < \*C<sup>H</sup>-norʔ; C —, K —, G nò; A/Se no; PCC \*nor (STEDT  
 #4805: provisional)
- (257) ‘bend down’ PL \*C<sup>H</sup>-ɲuk; C ɲuʔ, K ɲòuʔ, G ɲòʔ; PTB —  
 接頭辞とはいえないけれども、C<sup>H</sup> を再構しうるものとして次の例もある。
- (300) ‘=ALLATIVE’ PL \*=C<sup>H</sup>a; C =a, K =pà, G =à; PTB —

## 6 声調

PL の声調として、本稿では高声調 (H) と低声調 (L) をみとめる。高声調は鋭アクセントでしめし、低声調はとくに表記しない。PL \*H と PL \*L が C/K/G でどのように対応するかをしめすと、(319) のようになる。

- (319) a. PL \*H: Cak H vs. Kadu H vs. Ganan H  
 b. PL \*L: Cak L vs. Kadu M vs. Ganan M  
 c. Kadu/Ganan の L や F は二次的な発展

(319a, b) について具体例は本稿ですでに多数あげたので、再掲はしない。(319c) について、K/G において共時的にみられる低声調があらわれる条件は、原則としては次の二つである。すなわち、(1) 共時的にみたばあいの中声調に高声調が先行する、あるいは (2) PL における低声調に高声調が先行する、このいずれかの条件において K/G の低声調があらわれる。さらに K においては、L の直前に M がある環境で、その L が F に変調する<sup>注85</sup>。

声調の対応はかなりの程度に規則的であり、不規則な対応はほとんどみられない。声調の対応が不規則なものとしては、次にあげるようなものがある。これらの例については、本当に同源形式といえるかどうかについても、検討を要する。

- (19) ‘cheek’ PL \*n/l-baŋ; C ʔanəbáŋ, K ləpàŋ, G nəpàŋ; A/Se nambɔŋ; PTB \*baŋ ≈ \*boŋ (STEDT #263: provisional)

注 C と K/G で声調があわないほかは、よく対応している。PL では声調を指定できない。

- (52) ‘smell (vt)’ PL PL \*tám? < \*tyúm?; C ʔátíŋ, K túm, G túm; PTB —

注 C と K/G で声調があわない

- (169) ‘shrimp’ PL \*r-i-sík? < \*r-i-syúk?; C ʔisíʔ, K ʔisʰúʔ, G ʔisʰúʔ; PTB —

注 K の声調が対応しない。

- (180) ‘live’ PL \*séŋ? < \*syáŋ?; C síŋ, K sʰèiŋ ~ ʔəsʰèiŋ, G sʰáiŋ; A seng, Se sheng; J tsíŋ<sup>33</sup> ‘grass’; PTB \*s-ríŋ ≈ \*s-r(y)aŋ (STEDT #71)

注 K の声調は不規則。

<sup>注85</sup> カドゥー語とガナン語における声調についてよりくわしくは藤原 [2012, 2013] を参照。

(224) ‘capsicum’ PL \*m-ruk?; C məruʔ, K mouʔnəçi, G múʔ; A mosī, Se moksī; PTB

—

注 C/K と G とで声調があわない。

(232) ‘under/below’ PL \*múk?; C ʔámuʔ, K həmúʔ ~ kəmuʔ, G həmúʔ; PTB —

注 C と K/G で声調があわない。さらに韻母の対応も不規則。同源形式とはいえないかもしれない。

(274) ‘father’ PL \*a-wá?; C ʔavá, K ʔəwà, G ʔəwá; A apa, Se apo; J wa<sup>51</sup>; PS \*wa; PTB  
\*pa = \*pwa (STEDT #2546)

注 C/K/G で声調があわない。

(296) ‘cockroach’ PL \*s-Cíp?; C sífíʔ, K s<sup>h</sup>əlíp, G s<sup>h</sup>əlíp; PTB —

注 C と K/G とで声調が対応しない。

(301) ‘=LOCATIVE’ PL \*=a?; C =a, K (=pe), G =á; PTB —

注 C と G で声調が対応しない。K =pe は \*pa-i といった形式に由来するかもしれない。

(309) ‘wife’ PL \*ik; C ʔaʔíʔdá, K ʔeiʔ, G ʔeiʔ; PTB —

注 C と K/G では声調が対応しない。ただし、意味的にみても (158) ‘daughter’ と関係があり、‘female’ PL \*ik といった形式を再構しうる。

## 7 音対応のまとめ

この節ではルイ祖語からチャック語、カドゥー語、ガナン語への対応をまとめる。アンドロ語とセンマイ語については、語例が十分にあるとはいえないのであつかわない。

### 7.1 ルイ祖語とチャック語

- 頭子音については、チャック語の形式がほぼそのまま PL に再構しうる。
- 頭子音についてチャック語を特徴づける対応は、(i) C ʃ が PL \*khy/khi、(ii) C kyi が PL \*ti、(iii) C v が PL \*w で対応するものである。
- PL に有声閉鎖音・有声摩擦音を再構する根拠は、基本的にはチャック語のみである。ただし、対応する無声音が語中で有声音に変化しているものもおおい。PL \*b, \*d, \*j は、それぞれ \*p, \*t, \*c と再構できる可能性がある。
- チャック語の入破音については適当な PL 形式を再構することができない。
- 母音（開音節）については、チャック語の形式のみから PL の形式を特定することはまずできない。ただし、チャック語に u があれば PL \*oy を特定できる。

- 母音（閉音節）については、チャック語の形式から PL の形式を特定することはほとんどできない。ただし、チャック語が-iʔ であれば、PL \*-yuk を、-im であれば、PL \*-yum を再構できる。チャック語が-aiʔ であれば、ほとんどのばあい PL \*-at を再構できる。
- 声調については、チャック語の高声調は、接頭辞をのぞき、PL \*H で対応する。チャック語の低声調は、PL \*L で対応する。

## 7.2 ルイ祖語とカドゥー語・ガナン語

- 頭子音については、カドゥー語・ガナン語の形式がほぼそのまま PL に再構しうる。ただし K/G s については、PL \*c が再構しうる。
- 頭子音についてカドゥー語とガナン語を特徴づける対応は、(i) K k<sup>h</sup> が PL \*kh、しかし G h、(ii) C ʃ のとき K p に対して G m。
- 母音（開音節）については、カドゥー語・ガナン語の形式のみから PL の形式を特定することはできない。
- 母音（閉音節）については、カドゥー語・ガナン語の形式が PL の末子音を決定する根拠となる。ただし母音については、かならずしも決定できない。
- 声調については、カドゥー語・ガナン語の高声調は、接頭辞をのぞき、PL \*H で対応する。カドゥー語・ガナン語の中声調は、PL \*L で対応する。
- カドゥー語・ガナン語において一音節半語の主音節あるいは語頭に L があるばあい、接頭辞として PL \*H があつたと推定される。

## 8 音対応一覧

本稿であげてきた音対応を一覧表にしてまとめる。表記上の注意は以下のとおり。

- 対応がわからないものについては?のみをつけた。たとえば PL \*ut に対応するアンドロ語やセンマイ語は適当な形式が確認されないので、?にしている。
- 対応例が確認されるけれども、規則的なものかどうかわからないものや、対応例が確認されないけれども、類例から判断して対応音が推測されるものには、対応音のあとに?をつけた。たとえば PL \*op に対するカドゥー語の opʔ は、もしも対応例があるならこうなることが予想されるというものである。他方、PL \*it に対する PTB の itʔ は、対応例はそうなっているけれども、規則的といえるかどうかはわからないものである。

## 8.1 頭子音

ルイ祖語の頭子音については、C/K/G でほぼそのまま対応する。ただし C の入破音が K/G でどのように対応するかについては、さらに同源形式をさがして検討する必要がある。

表 3 ルイ祖語の頭子音

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*p	p	p	p	p	p	*b/p
*b	b	p	p	p	—	*b?
*ph	p <sup>h</sup>	p <sup>h</sup>	p <sup>h</sup>	p <sup>h</sup>	p/ph	*b/p
*t	t	t	t	t	t	*d/t
*ti	kyi	ti	ti	ti	ti/tui	*d/ti < *d/twi?
*d	d	t	t	th	t	*(d/)t
*th	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	th/t	t/th	*d/t/ts
*c	c	s	s	ch	tʃ	*dz/ts/ry
*j	j	s?	s	j?	tʃ?	*dy?
*k	k	k	k	k/h	k/kh	*g/k
*kh	h	k <sup>h</sup>	h	kh	kh	*g/k
*khy/khi	ʃ	h/c <sup>h</sup>	h	kh?	kh(j)	*k
*s	s	s <sup>h</sup> /ç	s <sup>h</sup>	sh/s	s/ʃ	*s/ts
*h (< *kh/s)	h	h	h	h/kh?	kh	*k/s
*m	m	m	m	m	m	*m
*n	n	n	n	n	n	*n
*ŋ	ŋ/n	ŋ	ŋ	ŋ	ŋ	*ŋ
*l	l	l	l	l	l	*l
*r	r	∅	∅	∅	ʒ	*r
*w	v	w	w	w	w	*w
*y	y	y	y	y?	j	*y
*C	r	y	l	n?	ʒ	*gr?
*C	β	p	m	m	?	?
*d/C	d	t/l?	t/l?	?	?	?

## 8.2 母音

### 8.2.1 開音節

ルイ祖語の母音（開音節）は、\*a、\*i、\*uについてはC/K/Gでほぼ問題なく対応している。しかし\*e、\*oおよび\*-y、\*-wといった形式については、C/K/Gのあいだでかならずしも対応が一定しない。

表4 ルイ祖語の母音（開音節）

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*a	a	a	a	a	a	*a
*ay?	e	ɛ	ɛ	e	ai/at?	ay/as?
*aw	a	ɔ	ɔ	a	au/u?	*a:w?
*i	i/i	i	i	i	i	*i/iy/eɣ/əy
*iy?	e	i	i	i/e?	i	*i?
*e	e	ɛ	e	e	ai	*əy?
*ey	i	ɛ	e	e	ai	*əy/a:y?
*u	u	u	u	u	u	*u/uw/əy
*uy	vu	i	i	i	ui	*wiy/wəy
*uw	vu	u	u	u	u	*əw
*o	o	ɔ	ɔ	o	au/a	*aw?
*oy	ʊ	ɛ	ɛ/e	oi/e	oi	*oy/əy
*ow	u	u	ɔ	u	u?	*aw/u?

### 8.2.2 閉音節

ルイ祖語の母音（閉音節）は、\*aC、\*iC、\*uCについては、C/K/Gでほぼ問題なく対応している。しかし\*eC、\*oCおよび\*yuk、\*yumといった形式については、さらに同源形式をさがして検討する必要がある。とくにCの中舌母音が閉音節におわるばあいには、どのようなルイ祖語を再構するべきかに課題がある。さらに同源形式をさがして検討する必要がある。なおルイ祖語における語末のrについては、C aijがK/G aで対応するときにPL \*arであることだけが確実な根拠である。語末のlについては、A/SeやPTBで同源形式が確認されなければ、再構できない。

8.2.2.1 閉鎖音

表 5 ルイ祖語の母音（閉音節・閉鎖音）

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*ap	aʔ	ap	ap	ap	ap	*ap
*at	aiʔ	at	at	at	at	*at
*ak	aʔ	aʔ	aʔ	ak	aʔ	*ak
*ip	iʔ	ep/ipʔ	ep/ipʔ	ʔ	jupʔ	*ip/upʔ
*it	iʔ	et	ɛt	it	it	*i:tʔ
*ik	iʔ	iʔ/eiʔ	iʔ/eiʔ	ik	iʔ	*ik
*ek	aiʔ	aiʔ	aiʔ/eiʔ	ek	ʔ	ʔ
*up	uʔ	up	up	up	up	*up
*ut	uʔ	ot	ɔt	ʔ	ut	*ut
*uk	uʔ	ouʔ	ouʔ/auʔ	ok	uʔ/u	*uk/u
*ikʔ < *yukʔ	iʔ	uʔ	uʔ	uk	uʔ	*ukʔ
*op	oʔ	opʔ	ɔp	ʔ	ʔ	ʔ
*ot	oʔ	ɔt/otʔ	ɔtʔ	ʔ	ʔ	ʔ
*ok	oʔ	auʔ	auʔ/ouʔʔ	ok	ʔ	*u(:)k/okʔ

8.2.2.2 鼻音・流音

表 6 ルイ祖語の母音（閉音節・鼻音・流音）

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*am	aŋ	am	am	am	am	*am
*an	aiŋ	an	an	an	an	*an
*aŋ	aŋ	aŋ	aŋ	ang	aŋ	*aŋ
*im	iŋ	im/em	im/ɛm	emʔ	im	*im/yam
*inʔ	iŋʔ	iŋʔ	inʔ	inʔ	inʔ	*inʔ
*iŋ	iŋ	iŋ/eiŋ	iŋ/eiŋ	ing/engʔ	in/iŋʔ	*in/iŋʔ
*en	iŋ	en	ɛn	en/el	in	*in
*eŋʔ < *yaŋʔ	iŋ	eiŋ	aiŋ	eng	iŋ	*iŋ/yaŋ
*um	uŋ	om	ɔm/om	om	um	*um
*imʔ < *yumʔ	iŋ	um/om	um/ɔm	um	um	*yim/yum/im/umʔ

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*un	uŋ	un	un	un	un	*un/ul/wan?
*uŋ	uŋ	uŋ	uŋ	ong/ung?	uŋ	*uŋ
*om	—	—	—	—	—	—
*on	uŋ/oŋ	on	ɔn	on	un	*un
*oŋ?	oŋ	auŋ	auŋ	ong	?	?
*ar	aiŋ	a	a	a	an	*ar
*ir	aiŋ?	i	i	?	en?	*ir
*or	?	?	o?	o?	?	*or?
*al	aiŋ	an	an	an/al	an	*ar?
*el? < *il?	iŋ/aiŋ?	en?	ɛn?	en/el?	in	*ya(:)l/il?
*ol < *ul	uŋ	on	ɔn	ol	un	*ul

### 8.3 声調

ルイ祖語の声調は、C/K/G でほぼ例外なく規則的に対応する。しかし、ジンポー語とはあまりうまく対応しない。A/Se については声調が記録されていないので対応がわからない。PTB については本来の声調がどうであったかを決定できない。

表7 ルイ祖語の声調

PL	Cak	Kadu	Ganan	A/Se	Jingpho	PTB
*H	H	H	H	?	?	?
*L	L	M	M	?	?	?

## 9 おわりに

以上、本稿ではチャック語とカドゥー語、ガナン語を中心に比較することにより、ルイ祖語の再構をこころみ、318組の同源形式を提示した。そして、ルイ語群に属する諸言語（チャック語、カドゥー語、ガナン語、アンドロ語、センマイ語）のあいだにみられる音対応を具体的にあらわにした。

今後の課題としては以下のものがある。

- チャック語に音素としては存在するけれども、ルイ祖語として適当な形式をほとんどたてられなかったものがある。具体的には/c<sup>h</sup>, d, j, g/である。これらは主としてマルマ語からの借用語にみられる。ただし、対応するマルマ語が不明であるばあいもある。入破音/b, d/については適当な同源形式をほとんどみつけられなかった。中舌母音/i, m/については、とくに閉音節について、同源形式と

祖形の推定に不十分な点がみられる。これらの点について、さらに同源形式をさがしだし、より妥当な祖形を再構する必要がある。

- カドゥー語とガナン語のあいだでのみ共通する同源形式を本稿では PL とみとめなかった。しかし、両言語で共通する語彙は多数ある。これらの語彙を視野にいれ、より規則的な音対応を追求する必要がある。
- PL \*-eC や PL \*-oC といった形式は、PL \*-iC や PL \*-uC とまとめることができる可能性がたかい。さらに同源形式をさがしだし、より妥当な祖形を再構する必要がある。
- チャック語の中舌母音がかかわるとき、ルイ祖語として介音を再構した (PL \*yuk, \*yum)。ほかの条件においても介音を再構できるかどうか、さらに資料を精査して検討する必要がある。
- チャック語におけるバングラ語やマルマ語からの借用語について、音対応を網羅的に調査する必要がある。
- カドゥー語やガナン語におけるビルマ語やシャン語からの借用語について、音対応を網羅的に調査する必要がある。
- 語彙の比較のみならず、文法もふくめた総合的な再構をめざす必要がある。

以上の課題を解決し、将来的には *Handbook of Luish languages* の完成をめざしたい。

附録: ルイ語群の分布



図 2: ルイ語群の分布 (Cak/Sak, Kadu, Ganan, Andro, Sengmai)

1: Katha, 2: Banmauk, 3: Indaw

## 参考文献

### 【日本語文献】

- 大野 徹 (おおの・とおる) . 2000. 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』東京: 大学書林.
- 倉部慶太 (くらべ・けいた) . 2011. 「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 澤田英夫 (さわだ・ひでお) . 2001. 「ビルマ文字のローマ字転写方式 (澤田式)」.<sup>注86</sup>
- 西田龍雄 (にしだ・たつお) . 1964. 『シナ・チベット諸語・比較研究略史 I』(アジア・アフリカ文献調査報告第 53 冊) アジア・アフリカ文献調査委員会.
- 藤原敬介 (ふじわら・けいすけ) . 2008. 「チャック語の記述言語学的研究」京都大学大学院文学研究科博士論文.
- 藤原敬介 (ふじわら・けいすけ) . 2012. 「ガナン語音韻論」『大阪大学世界言語研究センター論集』7: 121–144.
- 藤原敬介 (ふじわら・けいすけ) . 2013. 「カドゥー語音韻論」『東南アジア研究』51(1) 掲載予定.
- 藪 司郎 (やぶ・しろう) . 1993. 「ルイ語群」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 5 巻【補遺・言語名索引編】』東京: 三省堂, 448–449.

### 【漢語文献】

- 徐悉艰・肖家成・岳相昆・戴庆厦 (編著) . 1983. 『景汉辞典』昆明: 云南民族出版社.
- 馬提索夫 (James A. Matisoff) (原著)・蘇玉玲, 邱彦遂, 李岳儒 (訳) . 2006. 「漢藏語和其他語言中邊音的塞音化」『聲韻論叢』14: 45–65.

### 【その他の言語の文献】

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Benedict, Paul K. 2008 [1941] . *Kinship in Southeastern Asia*. STEDT Monograph Series No. 6. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Bradley, David. 1997. Tibeto-Burman languages and classification. In Bradley, David (ed.), *Tibeto-Burman languages of the Himalayas*, Papers in Southeast Asian Linguistics No. 14, 1–72. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, the Australian National University.
- Brown, R. Grant. 1920. The Kadus of Burma. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 1(3): 1–28.

<sup>注86</sup> <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf> (最終閲覧 2012 年 10 月 1 日)

- Brown, Rev. N. 1837. Comparison of Indo-Chinese languages. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 6: 1023–1038.
- Buchanan, Francis. 1799. On the religion and literature of the Burmas. *Asiatick Researches* 6: 163–308.
- Burling, Robbins. 1983. The Sal languages. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7(2): 1–32.
- Burling, Robbins. 2003. The Tibeto-Burman languages of Northeastern India. In Thurgood, Graham & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 169–191. London: Routledge.
- Damant, G. H. 1880. Notes on the locality and population of the tribes dwelling between the Brahmaputra and Ningthi rivers. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, New Series* 12: 228–258.
- Devi, Ch. Chandrakala. 1993. A comparative study of Imphal, Sekmai and Khurkhul dialects of Meiteirol. Ph.D. thesis, Manipur University.
- Devi, Lairenlakpam Bino. 2002. *The Lois of Manipur (Andro, Khurkhul, Phayeng and Sekmai)*. New Delhi: Mittal Publications.
- Devi, L. Manimala. 2002. A comparative study of Imphal, Andro, Koutruk and Kakching dialects of Meiteiron. Ph.D. thesis, Manipur University.
- van Driem, George. 2001. *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*. Volume I, II. Leiden: Brill.
- Grierson, Geroge A. 1921. Kadu and its relatives. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 2(1): 39–42.
- Grierson, Geroge A. (ed.) 1904. *Linguistic Survey of India*. Vol. III, part III, Kuki-Chin and Burma groups. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.
- Grierson, Geroge A. (ed.) 1927. *Linguistic Survey of India*. Vol. I, part I, Introductory. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.
- Hodgson, Brian Houghton. 1853. On the Indo-Chinese borders and their connexion with the Himálayans and Tibetans. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22: 1–25.
- Houghton, Bernard. 1893. The Kudos of Katha and their vocabulary. *Indian Antiquary* 22: 129–136.
- LaPolla, Randy J. 1987. Dulong and Proto-Tibeto-Burman. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 10(1): 1–43. (DPTB)

- Löffler, Lorenz G. 1964. Chakma und Sak: ethnolinguistische Beiträge zur Geschichte eines Kulturvolkes. *Internationales Archiv für Ethnographie* 50(1): 72–115.
- Luce, G. H. 1985. *Phases of Pre-Pagán Burma: Languages and History*, vol. I, II. Oxford: Oxford University Press.
- Matisoff, James A. 1978. *Variational Semantics in Tibeto-Burman: the 'organic' approach to linguistic comparison*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
- Matisoff, James A. 1985. God and the Sino-Tibetan Copula with some good news concerning Selected Tibeto-Burman Rhymes. 『アジア・アフリカ言語文化研究』 29: 1–81. (GSTC)
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press. (HPTB)
- Matisoff, James A. 2012. Re-examining the genetic position of Jingpho: putting flesh on the bones of the Jingpho/Luish relationship. Paper presented at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Singapore.
- Matisoff, James A. (ed.) 1996. *Languages and Dialects of Tibeto-Burman*. With Stephen B. Baron and John B. Lowe. STEDT Monograph Series No. 2. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- McCulloch, Major W. 1859. *Account of the Valley of Munnipore and of the hill tribes; with a comparative vocabulary of the Munnipore and other languages*. Selections from the Records of the Government of India (Foreign Department). No. XXVII. Calcutta: Bengal Printing Company Limited.
- Meillet, Antoine. 1925. *La méthode comparative en linguistique historique*. Oslo: H. Aschehoug.
- Moeng, Sao Tern. 1995. *Shan-English Dictionary*. Kensington, Maryland: Dunwoody Press.
- Mortensen, David R. 2012. Database of Tangkhulic Languages. (unpublished). Accessed via STEDT database.
- Nishi, Yoshio (西 義郎) . 1999. *Four papers on Burmese: toward the history of Burmese (the Myanmar language)* . Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Sangdong, David. 2012. A grammar of the Kadu (Asak) language. Ph.D. dissertation, La Trobe University.

- Shafer, Robert. 1955. Classification of the Sino-Tibetan languages. *Word* 11: 94–111.
- Shafer, Robert. 1966. *Introduction to Sino-Tibetan*. Part 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Shafer, Robert. 1974. *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Singh, Haobam Sarojkumar. 1988. A comparative study of Meiteiron dialects (Compounding). M. Phil. thesis, Manipur University.
- Sun, Jackson. 1993. A historical-comparative study of the Tani (Mirish) branch in Tibeto-Burman. Ph.D. Dissertation, University of California, Berkeley.
- Van Bik, Kenneth. 2009. *Proto-Kuki-Chin: a reconstructed ancestor of the Kuki-Chin languages*. STEDT Monograph Series No. 8. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Wood, D. C. 2008. An initial reconstruction of Proto-Boro-Garo. Unpublished MA thesis, University of Oregon.
- Yu, Dominic. 2012. Proto-Ersuic. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

(附記)

シンガポールでの発表原稿をいち早く提供して下さった James A. Matisoff 教授、マニプル大学での資料収集に協力して下さった L. Manimala Devi 博士に感謝する。なお本稿は科学研究費補助金（課題番号 22720155）による研究成果の一部である。

## ルイ祖語の再構にむけて

藤原 敬介

### 要旨

本稿ではチベット・ビルマ語派ルイ語群に属するチャック語、カドゥー語、ガナン語について、これらの言語に共通するルイ祖語（Proto-Luish: PL）を再構することをこころみた。再構にあたっては、上記三言語のほかに、アンドロ語やセンマイ語、ジンポー語、チベット・ビルマ祖語の形式も適宜参照した。

調査の結果、以下の内容があきらかとなった。

- PLにおける主要な頭子音としては\**p*, \**ph*, \**t*, \**th*, \**c*, \**k*, \**kh*, \**s*, \**h*, \**m*, \**n*, \**ŋ*, \**l*, \**r*, \**w*, \**y*をあげることができる。
- 対応例がすくないけれども、\**khy*, \**b*, \**d*, \**j*, \**d*も頭子音として再構しうる。
- PLにおける主要な母音としては、開音節においては、\**a*, \**i*, \**u*をあげることができる。
- 対応例にふたしかな部分があるけれども、\**ay*, \**aw*, \**iy*, \**e*, \**ey*, \**uy*, \**uw*, \**o*, \**oy*, \**ow*も再構しうる。
- PLにおける主要な母音としては、閉音節においては、\**ap*, \**at*, \**ak*, \**ip*, \**it*, \**ik*, \**up*, \**ut*, \**uk*, \**op*, \**ot*, \**ok*, \**am*, \**an*, \**aŋ*, \**im*, \**en*, \**iŋ*, \**um*, \**un*, \**uŋ*, \**ar*, \**ir*をあげることができる。
- 対応例にふたしかな部分があるけれども、\**ek*, \**in*, \**eŋ*, \**on*, \**oŋ*, \**al*, \**cl*, \**ol*も再構しうる。
- 声調は、高声調と低声調の二種類を再構できる。

受領日 2012年10月24日

受理日 2012年12月24日